

「最前からお役人方が表にお立ちなされ、家内の騒ぎを残らず聞いてるなかつたのだぞ。必ず未練がましく申し立てるな。エエ是非もない。世間の風説では十人のうち九人までは、殺し手はうぬだと名指してゐる。それを聞く度毎にこの叔父の心の中は、どうだと思ふ、考へても見ろ。事顯れる其の前に、遠國へでも遁れさすか、それとも自害をすすめ恥を隠してやらうかと、新町よ、曾根崎よと、うぬが行く先きざきを尋ね歩いて、いつも跡にばかりめぐり行き、出逢はなんだは、うぬの運のつきだ。——これ太兵衛、その裕ここに持ち出せ。則ちこれは五月四日の夜、着用したうぬが裕だ。所々に汚れが目立ち強張つてゐるので、檢非違使廳のお役人がお疑ひをかけてゐさつしやつたのだ。只今證據の實否を糺す。これこそうぬが命の生死二つの境目だぞ。——たれか酒を酒を。」

「はつ」と答へて、直ぐさまちろりや爛鍋を手々に提げて持つて来て、さらさらさつと裕の上注いだ。このやうな悪逆な甥を持ち、弟を持つた叔父や兄は、種々と心を惱まして涙を流し結果如何と見詰めてゐると、濡れた裕は酒盥のためにみるみる汚れの色は變り、汚れの色は變り、鮮かな血の色になつた。見守つてゐた叔父甥も、血汐と見るやあつとばかりに顔を見合

せ、あとは詞も出でず、呆れ果てるより外はなかつた。與兵衛は覺悟を決めて大音を上げた。

「一生不孝と道樂に過した俺ながら、紙一枚錢半錢も人の物は盗んだことは一度もなかつた。茶屋傾城屋の仕拂ひは、半年一年遅くならうとも、苦にはせぬが、新銀一貫目を手形借りにしたその銀が、一夜過ぎれば親の難儀となる、不孝の科に眼がくらみ、人を殺せば人の歎き人の難儀にならうとは、少しも考へ及ばなんだ。思へば二十年來の不幸悪逆の罪業が、魔王となつて與兵衛を眩まし、大それた事をさせたのだ。お吉を殺し金を取つたのは、河内屋與兵衛。仇も敵もこの身一つ、南無阿彌陀佛——」と言はせもはてず、捕吏は取つて引据ゑ、繩三寸に締め上げた。町役人も駈けつけて、直ぐにそこから引立てられ、千日前の刑場に引き出され、野末の露と消えてしまつた。

斯くして、此の油屋の女殺しの噂は、千人聞き萬人に聞え、つひには日本中に知れ渡り、惡事をすれば天罰を蒙るから、慎しまなければならぬといふ、世の教訓ともなつて、末長く清からぬ名を残すこととはなつた。

雪ゆき女をんな五ご枚まい羽は子こ板いた

梗概

〔上之巻〕 足利家の御家騒動である。——將軍義教の暗愚に乗じて、叛逆を企てた赤沼判官が、忠臣斯波義將を陥れようとする。義將は家來の藤内太郎に言ひ含め、また細川勝秀と共に御家の安泰を計ることに苦慮する。

〔中之巻〕 太郎の弟で小鼓の名手藤内二郎は、兄と同じく斯波家の巨となるが、測らぬ事から刀盗人の汚名を着せられる。その罪を贖ふために、女房は身を賣る。賣られてから女房は男装を強制され義將の身替りとして、大和の國古川家の姫琵琶の君の許に運ばれる。そこで夫の二郎にも對面し、赤沼一派を大いに惱ます。

〔下之巻〕 赤沼父子の立てこもる吉野山を、斯波、細川兩家が攻め寄せると聞き、將軍義教も馳せ向ひ、首尾よく逆臣を滅ぼす。同時に藤内兄弟五人も落ち合つて奮戦し、殊勳をたてる。

上の巻

〔御所堀外〕

「——樂車打つて囃した、樂車うつた見さいな藤内太郎、アリヤコリヤ、殿ハナ笛吹のヤ家で、紫竹漢竹、埃をさ、さつさと拂うて、通らいの〜。お年玉は到來の、こちらからも遣らいのと、どつと褒めて通した。門松立て、囃した御松囃を見さいな、藤内太郎。アリヤ、コリヤ、殿ハナ、斯波殿のヤ、御近習、弓矢打物お馬をさ、さつさと乗初や、蓬萊の蓬萊の、梶搦栗膝栗毛、鬘斗昆布に川原毛と、祝ひ乗つたるは、さつても伊達なお侍——」

藤内太郎は、足利將軍家の管領職を勤めてゐる斯波左衛門義將の家臣であつたが、かうして歌にまで唄はれる、都での評判男であつた。

文武兩道に秀でたその器量は、將軍義教公のお耳にまで達し、御直の諸武士同然に、年頭及び五節旬には御目見得を差し許されるといふ名譽ある武士だつた。殊に、笛の名人であることを聞き召されて、小水龍といふ名管をお上からお預けになつてゐた。

そもそもこの笛は、天曆の帝——村上天皇——の御寶物であつたが、國に異變の兆ある時には、おのづと音を出して鳴るといふ靈妙不思議な笛であつた。これを傳へ承けた足利家は、御先祖尊氏將軍以來、代々この笛のお蔭をうけ、兵亂を未然に防いでよく治まり、寶祚百王の固めをなして來たのであつた。

時は永享八年正月三日のこと、この日將軍家の御松囃が、吉例によつて北山の御所に於て行はれるといふ御觸をうけ、藤内太郎は笛の役を仰付けられたので、例のお預りの小水龍を餘塞なほ嚴しい風に吹き反らし、まだ夜も明けきらぬ七ツ時分、早くも虎の御門にまで伺候したが、まだ御門が明いてゐないので挾箱に腰を下ろし、

「御松囃は辰の刻との御觸であるから、役人伺候の諸大名は、夜明け前に續々參集の筈、然るに御所の内はひつそりとして、御門もまだ明けてはない。いかにも不思議。アア退屈な——

と呟いて、奴に持たせた煙管筒をとらせ、服部産の煙草に火をつけ、暫し燻らせて休んでゐた。

やがて、曉告ぐる鶏も鳴き、夜明けの鐘も鳴り渡り、あたりは明け初めてきた。

その時、ふと霜の置いてある御門の、檜皮葺の屋根を乗り越える人影が目にとまつた。振袖の女と角前髪の若者が、互に手を取り合つてゐるのである。が、その手もわなわなと慄へてる。女の帯は若紫、男の袴の茶宇も亂れた信夫摺、兩方共まだうら若い戀盛り。その形振から見ても、掙を背いて忍び逢つた密通者の駈落とは一目に領かれた。太郎は咎めるのもあまり不粹、見ぬふりをして通してやらうと、奴どもにもそれとなく云ひ含め、土塀の片蔭に身を忍ばしてゐた。これを知つてか知らずにか、二人の者は門松傳ひにするすると下りて來た。

太郎は見付かるまいと、猶も身を隠さうとするのを、男の方がきつと目を付け、いきなり刀を抜いて左手の方から聲も立てずに打ちかかつた。太郎は突瑳に刀の柄で相手の拳をはたと打つて、太刀振り落し、二の拍子に突き倒して胴骨をしつかと踏み押へた。すると女の方が右手から切りかかつた。拳を打たうと持つたる笛を振り上げた時、さつと女はつけ込んで笛を眞二

つに切り折つてしまつた。

「ヤイ、この馬鹿者めが」と呶鳴りざま、太郎は女をとつて引き寄せ、二人を一緒にどつと引き倒して踏みつけた。

「ヤア、若氣にも似ぬこましくくれた奴め等。我こそは斯波左衛門が家來、藤内太郎家治、知らぬことはよもあるまい。おのれ等の不義の駈落を見遁しやらうと見ぬふりをして居れば、却て手向ひ、その上御預りの大切な笛を切り折り、以ての外なる言語道斷。仔細を白状すれば許しても遣はさんが、偽りを申すならば繩をかけ、四職業の白洲に引据ゑ、一家一門の恥を曝さうか、どうともそちらの料簡次第」と云ひ放つた。

若者は怖れる氣色もなく、「オオ藤内太郎にてあつたるか。我は一色が末子大炊之介久常といふ奥小姓、この女は御墓所に仕へてゐる小田巻といふ御腰元。互ひに人目を忍ぶ戀仲となり、いつしか逢瀬も繁くなれば、つひに赤沼入道幸滿に見つけられ、既に御成敗にもなる所を、そのまま入道の計らひにて隠密に命を助けられ、夜逃げせよとの有難い御意。しかもその御恩を思はば御門前に藤内太郎が相詰めてゐる筈、彼奴がお預りの笛を二つに切折つてくれとのお頼

み、心得ぬ仰せとは思ひながら、恩を受けたる身の上に、さてこそ笛は切り折つた。入道への恩報じは是ですんだ。さてこれからは其方への話。入道が本心は上に對して異心を抱く様子。其方が主人の左衛門にもよくこの事を申しきかせ、必ず油斷があつてはならぬ。我も一つの望みのある身、神に誓つても嘘言は申さぬ。なんと此の場は逃してくれまいか」と理非を分けて語るのであつた。

「オオ、そなたは一色大炊介殿か。名前はかねて聞いてゐる。お身柄といひ御誓文を以てお明かしの上はよもや嘘言もござるまい。さりながら明朝は御松囃と御觸があり、早や明方に近付いても、それらしい用意もないは何か仔細のありさうなこと、御前の様子を隠さずに承りた

い」と云ふのを、小田巻は聞いて、
「ムム、それでは何も御存じないか。昨夜俄に變替て松囃しはあすの晩になりました。今日は赤沼入道の館にお成り遊ばされ、節分のお年取をお楽しみなされとの御事で、皆々様にお觸が廻つた筈。たとひお觸がなくとも、御前の身廻りの事を知らぬとはエ、よい加減な事ばかり。私の朋輩中川殿とあなた様の仲は並大抵な事かいな。奥向の事柄は中川様から筒抜け

に耳に入つてをりそなもの。飛脚などよりはましである。知らぬなどは、エエ小面憎い、打つてやろ」と言つて笑つた。

「アアコリヤ聲が高い、聲が高い。それならばあの赤沼めが此の笛を損はせ、我々主従の越度にしようと、御祝儀迄も延引させたに違ひない。——一大事を承つた御厚恩に對しては、御身のことはたとひ死ぬとも隠密に致さう。早夜も明けて來た。サアはやくお落ちなされ」と互に別れる先きには、早や廻禮者の物申といふ聲がして、御年玉の扇子箱を持ち歩き、まことに目出度い年越ではあつた。今日からは年も一つ敷を増すといひ、且つは節分といふので、榊には煎豆を入れ、福は内鬼は外と、賑はしく家の外には鬼も怖れる深緑の柵の頭を申に通して刺してある。梅の香りも高く綻び初めてゐるのも、如何にも心ありげに思はれ、殊に今年は榎の子まで春めくと云はれる閏年、何となく世の中までが春めいて、豊かに見えるのも御盛代の餘慶であつた。

〔赤沼屋敷〕

御大將義教公は、赤沼入道の館へおいでになつて、追儼の御祝儀が行はれた。年男は熊橋犬二郎満景で、御年豆を獻じたので、赤沼前司入道幸満、子息新判官則久の親子は御前に畏まり、

「冥加に餘る御成。一家の光榮これに過ぎたる事はござりませぬ。扱てこの度お招き申し上げましたは、毎年御所で行はせられる御祝儀には、斯波、畠山、細川などを始めとし、何れも馬鹿丁寧な堅侍ばかり、切口上の諸禮、四角張つた正月詞でさぞ御窮屈なことに察し奉り、我らが御馳走は、御供の諸大名を殘らず退出いたさせ、古風な事は一切取り止め、奥勤めの女中の中でも情知りを撰りぬき、その外都中のみめよき娘子達に、ござんす詞にて酒席のとり持ちを上覽に供へうとて、かねて召寄せ置きました」と前以て用意させた女達を呼び出した。

その顔觸といふのは、お腰元のその中でも氣立も身装も當世風の中川といふ美人を始め、酒席の取持ちの名人で、自分は飲まずに相手に盃を重ねさすといふお小夜の君、琴三味線を弾かせては、誰彼いはず縫りつかせるほど名人の菅戸など。又町娘では、姉が小路の針屋のぬひ、紺屋のお染、白粉屋の艶、絲屋の房などいふ噂の美女が、舞つたり踊つたり、小唄を巧み

に唄つたり、機轉きかして酒席のお取持ちをした。

義教公はいよいよ御機嫌よく、烏帽子の紐も直垂も、自づと打とけ、氣も心も寛いで、さては膝枕して足をさすらせ、腰を打たせ、正氣を失ふばかりの大酒宴になつた。入道は頃合よしと思ひ、

「さて節分の夜は厄拂ひと申す事が民間に行はれてをります。上つ方には御存じない事、厄拂ひと申しまするは、御身の大事になさるものを捨つると申して、我等にお預けなされ、厄拂ひの詞を述べて呪へば、悪病邪氣を除き去る事が出来ると申します。さあさあ急いで仕りませう」と申し上げた。義教公は佞臣の詞を眞と信じ、

「幸ひここに先祖より傳來の印判がある。これは軍兵を集め、關所、廻船など、日本を治めてゐるのもこの印一つといふ程大切なもの。是を暫く預けよう。」

と、錦の袋に入れたまま、「サア捨てた」としてお投げなされた。赤沼入道は、

「お厄は我等が拾ひ除け、四魔三障の祟りはない。これ女ども、都の町の厄拂ひ、拂ひ物は呪ひ出るだけ拂ひ申せ」といひ付けた。「はい」と答へて女子どもは、口々に厄拂ひの詞を眞

似て立騒ぐのであつた。

〔初春厄拂ひの言葉〕

——やあら目出度や、此方の御壽命申さば、鶴は千年龜は萬年、浦島太郎が八千歳、東方朔が九千歳、西王母が桃の核、猿豆小豆、親もまめどり雛鳥の、はがひ重ねに寶は集る、家は治まる持丸長者の、四方に四萬の藏の戸前の明け行く年から、福神達の御影向、一に市姫辨才天女、二は西の宮若惠比壽殿、三は三面大黒頭巾の、變の數々十二箇月は、無病息災其の身は鐵槌打出の小槌、打つて打出す金錢銀錢、福徳圓滿惡魔外道、打拂うて西の海へさらり、さらりさつ／＼、こきやかう、まつかう祝ひ納むるは、これ上方の厄拂ひ、扱て又東の果にては、斯くこそ厄を拂ひけれ、お厄拂ひお厄拂ひ、厄つつ拂ひ申すべし、がいに出度い此方の御壽命語るべしなら、鶴と龜何が何うち食つて、すつ百萬年のめりめりと、くたばり外れにあやかりなされ、父ら母らに爺孀息災、女兒小倅産のままなる餓鬼十二疋、錢金俵や小袖の中から、目玉むき出し耳朶でつかく、五百八十七曲り、惡魔外道ぶ

つ拂つて、西の海へぶん投げろ、こつきやつこうと祝ふとかや。ここに名に立つ色廊、揚屋女郎の厄拂ひ、又珍らかにかくもなん、あらあら目出度やこなさんの、御壽命申さば苦界十年、蠅がとまつて鶴は千年龜は萬年、浦島太郎が重箱肴、紋日々々は一歳に、貸す數の子も御盛や、何時大福の茶はひかず、揚屋に海參煎串鮑、幫間相客宿屋鴛舁のつけとどけ、こそこそ宿のなさけ事、身揚り分のおどもりも、東方朔が九千兩、それで残らず梅法師、井戸へ釣られた大黒天も、好い客踏まへた依子や、蜜柑柑子大大盡、子の日の松や根引の妓、三年前の紙纏頭空纏頭捨てたふるがけ、今年はくるくる廊の全盛、炬燵に火をせいで床せい酌せい、酒はこぼすと仕着は厭はじ、禿が文錢駒は古さに、寶引骨牌をうつつら王子が八千歳、女郎に口説の痞も下り、遣手は際の血の道なく、揚屋々々の賑ひは、二階中の間奥座敷、五客六客しつきやく入れず、扱てこそ不審春の日の、長う入らぬは見せかけ大盡、惡謔末社の、ちよつと借着に食物吸物、小言いふ人おやぢの意見に手代の始末、一つ買うては三度借る客、是が廊での惡魔外道、打拂うて西の海へざらりざらり、こきや

こう——

と厄を拂つた。御大將はなほお盃の數を重ね、お睡氣を催されたので、お側付きの女に誘はれ、寢殿深くお入り遊ばされた。

入道親子は、この有様を見送つて、

「サア熊橋、うまくいつた。いかに厄を拂ふのがよいからとて、天下を治める此の印判を手に渡すといふ間抜けがあるものか。滅ぼさうにも何も思案はいらぬ。が手強いのは斯波、細川。此の判を持つて義教の命と偽り、鎌倉勢を催して一戦を交へ討取らう。この年越早々運が巡つてきた。こりや熊橋、來年は一段とよい年を取らせてやらう。まあ精出して働け」と、互に頷き合つて悦んでゐるところへ、お腰元の中川が走り出て、

「これ赤沼殿、只今の御判はお厄落しの呪に、ちよつとの間お預りなされたのかと思ひの外、お返しもなされずそこに留め置き、何か意味ありげな、ひそひそ話し。妾にはどうものみこめぬ。女子ながらも御臺様よりお附けなされてまるつたこの中川、見過しにはなりません。

サアその御判をお戻しなされ、それともお嫌か。嫌ならばこちらにも考へがござんす」と、男勝りにいきり立つ。入道は別に動ずる色も見せず、

「オオよいところへお出でなされた。これには仔細のある事。日頃斯波左衛門義將が御諫言申し上げるがお氣に入らず、密かに諸國の兵を集め左衛門を滅ぼさうとの御企て。それを聞いて氣の毒に存じた故御判さへ取つたなら、軍兵一人も寄せることは叶はぬと、やうやう賺し取つたこの御判。噂に聞けばそなたは斯波が家來藤内太郎家治と、夫婦契約致し居るといふ事ではないか。いやそれについて今一つ一大事がある。といふは、藤内太郎はお預りの大切な笛を折つたとか。その越度によつて、今宵ここへ呼び寄せお手討ちになさるる筈。但し今宵さへ無事に過せば、明日は又我等よりお願ひ申し上げ、藤内を助けて進ぜう。それにはどうにかしてお側の刃物を盗み取ることは出来まいか。いやはや誠にお氣の毒な次第」と、誠にやかに言つた。さすが女は男を思ふ一筋に、「アア有難いそのお知らせ、夫の命を助けると申し、斯波殿とても夫の主人、理由もないに疑ひをかけ恥かしい、上には殊の外御酒を召上られ、只今御躰の眞最中、そつと御太刀を取りませう。」

「オオそれがよいそれがよい。お目覺めのないうちに、片時も早く太刀刀を奪ひ取り、高遣戸のある小庭から、椿畑の妻戸を明けて忍び出で、鞠場の入口でお待ちなされ。土戸の錠を明け

させう。それを合圖にそつと抜け出し、左衛門が館に逃げさつしやれ。わかつたか。仕損ずまいぞ。」

「アアこの身にかかつた事ぢやもの、それはお氣遣ひなされますな」と、中川は奥をさして姿を消した。

「それ又彼奴にも一杯食はしたわ。屋敷の中をうろつかせ、曉方に引拵へ、斯波左衛門逆心を抱き、家來藤内が密通してゐる女に御太刀を盗ませたと、證據を出して申し上げれば、斯波めはよい仕合せで切腹仕事。今宵はどんな夢を見ることやら。こつちは誠の寶舟の夢見たやうに舳が向いて來たわい。それ飲め勢をつけろ」と勇みかけ、入道は得々と頭を振つた。

〔赤沼屋敷前〕

雪催ひの春の夜は、いとも靜かに更けて行つた。「頃はよし」と、ひとり頷いた中川は、御寢所に忍び込み、義教公の枕邊に置いてあつた太刀を奪ひ取り、そつと抜け出た。併し思へば品こそ變れ、慾心からでないとはいへ、この太刀は主人の目を掠めて盗んだ物。アアこれが生死

の切迫ぞと考へて見れば、怖ろしさに心も後れ手も顫ひ、柄鮫の太刀を握つたまま、鮫や鰐にでも追はれる心持で、夢中になつて檜書院に出たのであつた。

小庭に通ふ遺戸に手をかけ、そろそろと明けると外は吹雪。出足は鈍つたが、後の罪も怖しく、ともすれば立竦む心を勵まし、幸ひそこにあつた駒下駄を穿いて出ようと思つたが、怪しめられては大變と思ひ直し、「エエままよ」と、素足のまま雪の中へ飛び下りた。冷たさはずんと頭にひびき、怖ろしきは剣を踏むやうだつた。

その跡から赤沼はつけて出て、中川の出たのを見澄まし、遺戸に錠を下してしまつた。

中川はそれとは氣づかず、吹きかかる白雪を打拂ひ打拂ひ、土戸に近付き、明けようとしたがいくら押しても明かない。「扱てはまだ時刻が早かつたか」と呟いて、暫く待つてゐる間にも、掻き亂してこぼすやうに降る雪は、見る間に庭を埋めて眞白になつてゆく。

身を避けようと立寄つた檐下までも、吹雪が降りしきつて、「袖打拂ふ蔭もなし佐野のわたり」と詠んだ雪も、かくやと思はれるばかり。嵐は五體を刺しつんざくばかりであつた。せめて顔だけでもと、袂を腕に捲いてさしかざし防いでも、襟にたまつた雪は身體の温りに溶け

て膚を通して浸みわたり、足も膝まで雪に埋もれて来る。髪にかかつた雪は氷柱になつて、白銀の瑤瑤をかけたやうだつた。

「アア寒い、苦しい」と顫へ上つて齒も合はぬ。「忍び逢ふ夜の通ひ路ではないが、これも亦男の爲、戀の爲ぢやもの。ここを一つ我慢しよう」と心に鞭打ち、我が身を抱き締め、小さくなれば寒さの爲になほも息が切れさうになる。雪で口を濕せば、身内までも浸み凍る思ひがして、寒さに弱いと云はれる閑古鳥の苦しみも、かくやと思はれるのだつた。「これでは耐らぬ。立歸つて湯でも一つ呑んで来よう」と、腰までも埋まる大雪を押し分け、踏み分け、やうやう最前の遺戸口に縋りつき、押しても引いても動けばこそ。「南無三寶。誰ぞ錠を下したのか」と思ひ諦め、立戻らうとすれば、ほんの少しの間に、たつた今踏み分けて来た跡は、早や雪に埋もれ、波濤を切つて泳ぐ思ひだつた。やうやく土戸の所まで歸つて見れば、やはり明きさうにもなかつた。ただ茫然と佇む間も、雪は容赦なく降り積つて、身も埋まるばかり、その苦しきは云ひ表はしやうもなかつた。

「エエさては騙されたのか、口惜しい。病に臥し又倒れ、火水にはまつて死ぬことはある

習ひながら、殺しやうもあらうのに、雪に凍らし殺さうとは鬼か蛇か。ムム憎い入道め、むざむざ一人で死ぬものか——。」と、身も埋まるばかりの雪の中を、這ふやうに歩み出れば、踏み沈み、また這ひ上つては踏み落ち、咽は嵐に吹き捲られ、人を呼ばうにも聲も出ぬ。手足は凍え、身體中は冷え切つて、寒いやら冷いやら苦しいやらで、とても生きられるとは思はれなかつた。

「アア藤内殿々々々、我が夫、アアも一度逢うて死にたい——。」と心でしきりにあせつても聲が立たないので、雪に嚙りついて流す涙は、出るより早く凍りつき、眼も口も閉ざされて、天に降りしきる雪は更にはげしく目先を包む。寒風は益々吹き募つて、五臓六腑を裂く如く、息をつくことも出来なくなつて、哀れ中川は二十歳の春を前にして、花を待たず、雪とともに息は絶えてしまつた。まことに果敢ない最期であつた。

〔赤沼門前〕

その夜の東南の空は一面の雲に蔽はれ、西北には風凄まじく雪を誘ひ、夕闇の空も物ありげ

に騒がしく、雪の夜とはいひ、薄氣味悪い晩であつた。

斯波左衛門義將は、今宵に限つて小水龍の名笛がひとりで音を出したのは、不思議な事もあるものよと、君の御身の上を氣遣ひ、人馬も連れず藤内一人に提灯持たせ、雪踏み分けて赤沼の屋敷の門前に辿り着くと、突然藤内の持つてゐた提灯が消えた。呆氣にとられてゐる間もなく、堀の内から白鷺の飛ぶやうに、雪が渦巻いて提灯を白く輝かしたかと思ふや否、女の姿がばつと浮んで見えた。白衣白髪の、全身眞白な雪女ともいふべき女の姿。

左衛門主従は何事やらんと、太刀の柄に手をかけて身構へると、

「——もしお忘れなされたか藤内殿。お互ひに忍び逢ひ水も洩らさじと契つた二人の仲、思ひ焦れた中川の幽霊がこれまでまゐりました。申すも口惜しい事ながら、赤沼親子逆心を抱き君の御判を奪ひ取り、妾には御太刀を奪はせ、左衛門様を始め、我が夫にも其の科を負はせて、滅さんとの企みとはつゆ知らず、盗み出る道の前後に錠を下し、今宵の雪に埋もれて凍死に殺されました。此の世にある中から八寒地獄の苦患に苛まれた此の身。ただいとし可愛の我が夫主従の御命を、どうがなして助けたい救ひたいと思ふ一念が、この身に堅く凍りつき、只

今お知らせ申します。此の御太刀を義教公に差し上げ、御身の言譯を立て給へ。名残惜しい我が夫、たとひ此の世の縁は薄くとも、來世までもと約束した契りは厚く結び添へ付き纏ひ、生々世々に決して離れは致しませぬ。さらばさらば」と泣く涙に、ありし姿は雲の如く消え失せてしまつた。

藤内は涙を押し拭ひ、「エエ憎い入道め、妻の敵國家の仇。生首引抜いてくれるぞ」と云ひ捨てて走り込もうとする。

「これ待て——」と左衛門は引き留めた。「——これは容易の事ではない。いはば天下の一大事。この館には御大將が御座あるといひ、御直衆に亂暴を働いたと言はれては道理が立たぬ。これに控へて様子を窺へ。出過ぎたる振舞なさば勘當」と押し宥められた。

藤内太郎はハツと畏まり、心を落着けて控へる外はなかつた。

左衛門は衣紋を正し、御太刀を持つてしづしづと門内に入り、廣間に立つて、「お小姓衆お小姓衆、斯波左衛門義將、御機嫌伺ひ申す」と聲高に案内した。

「それ左衛門がやつて來た。討ち取れ」と、赤沼親子、犬二郎らは「承つた」と飛び出したが、

さすが五常の徳の備はつてゐる左衛門のこと、如何にも威厳があり、荒々しい態度は見せないが、忠臣の威光に氣を吞まれ、最前の勢ひもどこへやら。

「ヤア斯波殿。殊勝なお出で——」と手を揉んでゐるばかりであつた。

御大將義教公は斯波が來たと聞かれ、寝ぼつれた髪に烏帽子を引きかぶり、しづしづお出ましになつた。左衛門は君のお姿を拜してにつこと笑ひ、

「義將は今宵珍らしき夢を見、御物語り致さうと御機嫌伺ひかたがた参上いたしました。いやはや夢といふものはをかしのもの、——これ赤沼殿、お氣にかけられるな。貴殿が逆臣の企てにて、尊氏公より御相傳の御印判を瞞し取り、御腰元の中川をたぶらかして御太刀を奪はせ、その罪を我等に塗りつけ、此の左衛門に切腹致させようとする謀計と、まざまざ見たる夢に驚き、覺めて見れば枕頭にこの御太刀が置いてあつた。是はなんと正夢ではござるまいか。これも夢であつたからこそ御仕合せ、若し本當であつたなら、赤沼殿でも青沼殿でも容赦はない。御前にて胸脹を突ん抜き親子繋ぎにするか、又は一戦を交へるか。萬一戦ふともお主のやうな相手には騎馬を向けるまでもない。左衛門が足輕十人程も差し向ければ朝飯前に生捕つて

洛中を引張り廻し、恥かかせ、何彼言はず礎柱一本の主にしてやらうもの。——とは言ひ乍ら見たは春の夢。春の夢は合はぬもの。必ずお氣にかけられるな」と、からからと打笑つた。

赤沼は言ひ込められまいと、

「いやこれ義將、貴殿が今の言ひ分は、自分の過ちを人に云はせまいとの企てにて、先きばしりの言葉と、この入道は聞き取つた。オオそれぞれ、思ひ出した。あのお預りの小水龍の笛を打折り、お咎め受けるを恐れてのことか。左様のことならこの俺が申譯をしてやらうもの。エエ氣の狭い。そのやうな小さい事を氣にかけて、くよくよ召さるな左衛門殿」と、負けずに言ひ返した。

この話を、門の所に控へて聞いてゐた藤内太郎は、堪りかねて飛んで出て、居丈高になり、
「これ入道、兩刃の劔で人を切らうと振り上げる時は、又おのれの頭をも切るといふ。まッその如く、人を悪者にしようとして、我が身の悪を自ら喋べるか。その御笛はこの藤内太郎家治が預かり奉り、先日北山御所の御門にて、一色大炊之介に汝が頼んで切らせたを忘れはすまい。功ある者の不斷の心掛けを聞いておけ。眞の小水龍は庫に納め、模して作つた笛を持つてゐるのだ。汝が頼んで切らせたはその偽物の笛とは知らぬか、ぼんやり者め。本物の小水龍といふ御笛は天曆の帝御宸筆の銘があり、天下の一大事には自づと音を出す。只今もしきりに鳴つた不思議さに、上の御身を氣遣ひ、馳せ参じたのだ。是を見ろ」と笛を差し出し、「これ程大

事な御寶を、どんな譯あつてお主は大炊之介を頼んで切り折れと云つたのか。笛を切るのがそれ程好きなら、お主の咽吭を切折つてくれよう」と、詰めかければ義將は、

「ヤア藤内、御前といひ、主を差し置き出過ぎるぞ、下り居れ無禮者。赤沼入道ともあらう御人が、笛を切折り遺恨を晴らす如き、子供だましをなさる筈がない。よしそれがあつても、上は天下の武將。御譜代忠功を勵む斯波の兵衛府の重職を、笛一本如きに思し召し代へられやうか。——とは言ふものの、忠臣を厭ひ、佞臣に心を許し、酒宴妓樂に御目が眩み、御枕許の御太刀を奪はれしをも心付かぬ程の大愚將。山鷄を鳳凰と見、燕石を玉と信じ、果ては國を失ひ身を破り、悪名を末代にまでお残しなされう。かへすがへすも口惜しき御心底」と、拳を握り席を叩き、涙を流し、心から御諫言申し上げた。

すると、御大將の御氣色が忽ちにかはつた。

「折もあらうに祝儀の座敷を憚らず、おのれ一人智恵ありげに愚將とは誰を指す。早く退出して閉門致せ」と大變にお怒りになつて仰せられた。左衛門はすつとお側近く進み寄り、「愚將と申すは我が君のこと。愚將といはるるがお耳に障る程ならば、何故俊臣と忠臣の詞をお聞き分けはなさりませぬ。浅間しい御心底。御祖父義詮將軍、御父鹿苑院義満公、御舎兄勝定院殿義持公、御先代義量公と我が君までは五代。我々は三代に亘つて管領職を承るが、今日に至るまで、只の一度も閉門に處せられたことはござりませぬ。それ程までに過のある左衛門なら、閉門までもなく、御佩刀を以てお手討ちになさるるか、或はお氣に入りの赤沼入道子息新判官、これら歴々の侍に討手を仰せ付けられ、軍勢を以て何故この左衛門を攻め滅ぼしなされぬか。——オオそれも尤も。赤沼などの手に及ばぬも無理はない。軍といふは酒宴遊興とは事替り、命勝負のものなれば、戦場の関の聲、矢叫びに怖れ、馬より落ちて目を廻すより、お世辭たらたら世を渡るが伶俐な分別でもあらう。エエこれ我君、莫耶の名劍を鈍しと思ひ、鉛刀を鋭しといひ、周の鼎を棄てて瓢箪を寶とすると世の譬にもいふ事を、御身の上とはお氣付きなされぬか。麒麟も繋がれて動くこと叶はねば犬猫にも等し、渴しても盜泉の水を吞まず

とは義者の恥づるところ。上下を顛倒して章甫の冠を沓に履くより、首陽山に隠れても、蘇に露命をつなぎ、汨羅の河に入つて川魚の腹中に葬られんには如かず。我々が都を退いたらば、赤松、細川、畠山、結城、長沼、仁木、石堂、大内、今川、山名、京極、宇都宮などと、凡そ名のある諸大名は、頼みにならぬ時世を憤り、各々自分の領土に引籠るでござらう。さすれば民百姓は貢ぎ物を納めず、地頭郡司は勝手に租税を重く致し、國を恵む糧は盡き、四方八方に野心を抱く輩現はれ、四夷八蠻一度に起つて攻め来るは火を見るより明らか。その時は折角御寵愛の俊臣奸人等は味方を捨てて、われ勝ちに敵に降り、君一人が敵の擒とからめられ、元祖尊氏公の御勳功も一度に朽ち、御父義満公が七寶に金銀を鑲めて御造營の北山の金闕を始め室町殿の花の殿、三條の紅葉の殿は野原と荒れかはり、梟松桂の枝に啼き、狐蘭菊に隠れ栖んで、御山彦の外は誰か昔の有様を忍び、訪れるものもござりませう。その時に到つてこの斯波が詞を思ひ出され、遙かの天を望み、地に爪立ててお探しなされ、臍を嚙んでお悔み遊ばる有様が、今から目に見えるやうでござる。三度諫めて用ひられざれば身を報じて去るとは、古人の金言。左衛門が一生の諫言もこれが最後。孔子も衛國の靈公に失意落膽し、國を去つた

と聞き及ぶ。我等もその如く我が家にも立ち歸らず、この場より直ぐに他國に退散いたす。イザお暇申さん」と立上つた。

赤沼判官は突立つて、これを遮つた。

「こりや左衛門、主君に暇出す憚り者め、容赦はならぬ。」と飛んでかかつた。藤内太郎はすかさずこれを懸け隔て、

「ヤア小生意氣な刃物三昧。汝如きの錆刀が御主人の身に立つと思ふか。今一度でも動いて見よ。御前だからとて遠慮はせぬぞ」と、はつたと睨みつけた。義教公も、

「ヤレ待て赤沼、討手に向けて左衛門が首を取らん。鎮まれ鎮まれ」と仰せられた。

左衛門は少しの臆した様子もなく、

「討手とは有難し、早速腹切つて汚れ首を差し上げう。さりながら討手の人とは誰でござる。其の相手によつては一戦交へて勝負を決し、討手の首を此方へ拜領仕らう。無禮者と後に思し召さぬやう、念のためお断り申し上げる。——藤内太郎供せい」と、御前を立つて悠々と、後をも見ずに立退いたのは、まことに臣下の手本、武士の鑑と思はれた。

〔山崎關戸〕

斯波左衛門義將は、腹巻に腹當、脛當、籠手をつけ、侍といつては藤内太郎家治の外、若黨少々に旗持一人を従へて、都を離れ、山崎にある關戸の院に到着した。

そこへ、緋緘の鎧に身を固め、月毛の馬に跨がつた武者が、甲冑の侍を五十騎ばかり引き連れ攻め寄せて來た。

「やあやあ左衛門、君にお暇申し捨て、都を立退く無禮者。討ち取つてまるれとの大將軍義教公の仰せを受け、細川右馬之丞勝秀がまるつたり、引返せ」と呼ばはつた。左衛門は聞くや否や、

「なに勝秀とな、たとひ千萬騎討手に向ふとも、刀の續く限り攻め戦はうと思つたが、勝秀が討手と聞いては、速かに腹切らう。首取つて歸れ」と、どつとその場に坐り込んだ。

勝秀は馬から飛び下り、

「やれ待て左衛門。貴殿の切腹には三箇條の不審がある。勝秀が武勇に怖れての切腹か、こ

れが一つ。日頃水魚の朋輩に討手に向はれ、面當の爲の切腹かこれ二つ。今一つは浮世を軽く見て、我が身を頼りないと見限つて切る腹か。この三つの中何れでも一つを言つて死ぬ」と叫びかけた。左衛門はにつこと打笑み、

「ホホウ、流石は勝秀と云はれるだけのことはある。問ひにくい事をよく訊ねた。我等にもそちに問ひたい不審がある。他に人もあらうにお主が討手に向つたは、この義將が諫言を道理に外れたと思つてか、これ一つ。それとも拙者程の武士の首をとり功名しようと思ふのか、これ二つ。或ひは佞臣赤沼と一味の心か、この三つの中一つを言へ。我も言はう。勝秀いかに」と反問した。

「オオその疑ひは尤も千萬。よく聞け。管領職のその中でも、お主と己とは殊の外親密な附合をしてゐるのに、我等に何の知らせもなく都を立退く志しが氣遣はれ、死ぬとも生きるとも朋友の交を違へまじと、山名に討手を仰せ付けられたを、拙者が請ひ受けて向つたのぢや。かうした討手であるからは濫りに腹は切らせぬぞ。サア今度はお主の心底が聞きたい。」と詰め寄つた。

「ムムよく解つた。さもあらう。此の左衛門もその通り、勝秀は愚か樊噲が討手となつて押し寄せても、恐ろしいとは思はぬ。諫言申して殺されるも君の御爲。死せる孔明が生ける仲達を退かした例しもある。死んでも忠は忘れぬ。我は一旦都を立去り、お主とも内通し、何れ悪人共を討滅ばし、我が君を名將と仰がんとお主と思つてゐるが、その考へは裏切られ、貴殿が討手と聞く上は、浮世の望みも切れ果てた。それ故にこの自害。弓矢取る侍が討手を蒙り、空手では歸られまい。介錯せよや勝秀——」と、あはや自害しようとした。

「待て待て左衛門」と押し止め、「——話を聞いて満足々々。日頃親しく語る朋輩はかほどに心が合ふものか。さりながらここは死ぬ所でない。九州に逃れて身を忍べ。我も本國に引籠り、密かに世の有様を知らせ合ひ、佞臣の榮枯を窺ひ、義兵を起し討つて出で、悪人を攻め滅ぼし、我が君を古の聖賢に劣らぬ名將と仕立てよう。さうは思はぬか、左衛門」と、理を言ひ含め諫められ、左衛門は横手をうち、

「ハアアさうぢや、過まつた。君の御爲には大事な命、ここは死ぬ所でない。一と先づ落ち延びよう、御身も立退くか。」

「仰せまでもない、我も退く。」

「ヤレ勝秀、これ程揃つた忠臣がゐるものを、義教公さへ名君ならば、唐土までも靡け從へ治めようものを。無念ではないか勝秀。」「いや尤も、口惜しいわえ左衛門」と、互ひに鎧の袖と袖に取りつき、縋りついては泣くのであつた。忠義に凝つて泣く涙は、見るも哀れな有様であつた。

「ヤア時刻も移れば悔んで甲斐ない事。朋輩の縁もこれで盡きたといふではなし。又逢ふことも命次第」と、泣く泣く左右に別れたが、又名残り惜しげに立歸り、

「これこれ、思へば新年になつてからまだ一度もお目にかからなかつた。これが本年の逢ひ初め。」

「オオさうさう、その通り。先づ新春の御吉慶。」

「此方も、」

「其方も、」

「互ひに目出度いお年越し。この春早々からお悦び、十分のお仕合せ結構々々。盃事はいづ

れゆるりと、」

「それではいづれ春永に、」

「年も壽命も長々と、御健在で。」

といづれ又榮ゆる時世に迎へられ、春に逢ふ日を楽しみに、門出を祝ひ合ひ、立別れたのであつた。

中 の 巻

〔本阿彌屋敷〕

(唄) ぼんじやり咲いて匂うた、梅の花形見さいな。藤内二郎、アリヤコリヤ、殿ハナ、小鼓のヤ 得手物、あかうの胴に加賀草くれ、紅の調緒、千鳥がけにかけさせ、合せ打つたるは、さつても打つた小鼓と上の町、下の町、どつと褒めて通した。ほんのり明けて唄うた、鳥の懸聲ききやいな、藤内三郎殿大鼓の上手で、しつたんにしつたんく。七反作のお百姓。明年は八反ぢや、さ明年は十六反、丹波の國のお百姓と、勇み打つたるは扱ても打つた大鼓と、どつと褒めて通した、春めく大路ぞ豊かなる。ヨイ。一夜押開けて四方の春、空の顔容にこやかふくやかにつこりほやりの笑顔は誰だア、それだか是だか春の司の佐保姫君、霞の衣當流仕立、しやんと着こなす四尺八寸、あさを握つて押せ押せ、押込

め乗込め米俵、でつかく踏まへた大黒々々、大黒舞と囃されて、天の戸袋だん袋、くわつと開けた初日の色、あら面白やお目出度や。草木心なしとは申せども、花實の時を違へず、げに陽春の徳利燗鍋屠蘇の酒、三杯機嫌の朝ぼらけ、物もう、どれい、先づ當年の御吉けいはく慶庵、めつきり今年は若うなるく、なるほどく目出度い事の言ひ草山草、穂長は白妙標の浅みどり、わつさりわさく紙子の袖にも春立つと、いふばかりにて金かけて、買った袴の師走の氷、叩いて砕いて若水の、湯殿初め着衣初め、衣紋繕ふ若い者、藤内二郎、同じく三郎、併せて五郎は曾我に劣らぬ住家にも、ごまめ鯨の素浪人、雑煮の上置輪ん切大根、ずんでんどうど打ちをさまつた、時勢に逢ふも他生の御縁、花の宴、縁から落ちたお乳の人、打つたところがふくく福徳、千歳を呼ばふ鶴の聲、此方は似合つて雀はちうく、鳥はかあく、鳶とろゝ山の諸、精のついたる妻戀猫、猫の化粧、鼠の嫁入、ちゅつちゅつくり色をやる。戀から生れた人間萬事塞翁が、馬の打つた太鼓の撥、狸が打つた腹鼓、打つたら鳴るべい、何になるべい、知行になるべい、なれくなれく、花になれこし王城の町、そなたに高山去年の雪、これ、香爐峯の心なんめり、簾を巻けば

お肴に嵐が雪を、もつて北山東山、西に妓里戀廓、正月買の初君の、袖を連ぬる裳裾を連ねる、ぬるくぬつと出る日影に、南枝始めて開く、梅に鶯、紅葉に鹿、獅子に牡丹、昆布に山椒、小粒な男も陽氣を受けて、和歌を囀る一曲奏でる、つるくつるく、釣つたところを恵方棚、賑ひ申す榮え申す、押へ申す食べ申す色めき申す時めき申す、御亭を祝つて御禮申す、ありや、こりや、はッあ新玉の、春ぞ長閑なる――。

藤内二郎は鼓、弟の三郎は大鼓のそれぞれ名手であつたが、共に浪人の憂き渡世をしてゐた。初春といふので兄弟は打連れて、町々を前に述べたやうな唄をうたひながら稼ぎ廻つてゐて、春知り顔な白梅が露路の垣根に咲きこぼれてゐる、とあるお屋敷の玄關前を通りかかつた。あたりは綺麗に磨き拭はれ、これが刀劍鑑定の家元本阿彌の家構へとは、一目に分る立派な館であつた。

藤内三郎武治は、奥の方を覗くやうに見て、

「これ兄上、ここが本阿彌右衛門太郎清祐が居宅。この身代は別に羨ましいとも思はぬが、此の家に澤山ある立派な大小が愆しい。我々に銘入りの大小があつたなら、よい主を持つて立

身も致さうものを、何を言はうにも、この竹光ではどうにもならぬ。いつかはこの無念を晴らして、よい春に廻り逢はうと思つてはゐるもの。アア、世間では春だといつて喜んでゐるが、我が身に春は名ばかりで、まだ師走ぢや」と、小首を投げて悔むのであつた。二郎盛治は聞きもあへず、

「浪人に零落れ町住居をしながら、鼓太鼓の貧しい渡世に、武士の道は忘れてゐるかと思ひの外、さつても頼もしい心がけ。その詞を聞いたからには話すことがある。――兄太郎家治の主人斯波殿は、近日義兵を起し、佞臣赤沼を攻め滅ぼさんとの準備中と聞いてゐる。この時こそは我等が出世のよい機会と、斯波殿のお味方に加はり、兄太郎殿と力を合はせ、軍功を勵まうと思へども、刃物といつては脇差一本、ちぎれ具足一領さへも工面の出来ぬ貧乏世帯。さてどうしたものであらうと思案してゐると、いや女房は持つべきもの。黄金三十兩調へてくれるといふ。三十兩といふ金があれば、お前と俺との軍の用意は見事に調ふ。さすれば晴れて斯波殿の家來になり、藤内太郎二郎三郎と兄弟三人一緒に名乗り、赤沼親子を召捕り、首提げて目覺しい手柄を立て、御感状を拜受して、今のやうな泣言を言はぬ身分になられやう」と、勇ん

で語り聞かせても、三郎はちつとも氣乗りした色も見せなかつた。

「イヤ飛んでもない事、主取りに事缺く御時世ならいざ知らず、何がよくて斯波の扶持にあづからうと仰せあるのか。さてもさても勿體ない。いつぞや兄太郎殿の肝煎で、拙者が奉公を望んだところ、氣に入らぬとて斷られた。斯波に斷られて無念に思つてゐる矢先、赤沼入道幸滿殿へ肝煎らうといふ人もあつたれど、身拵への金に窮し延引してゐるうち、犬二郎滿景より斯波の左衛門は勿論、主だつた家來の人々一人でも討ち取つてくれれば、三千石は間違ひなく遣はさうと、これ見なされ、確かな書面までまるつてゐる。御内方の調達なされる金子を少々お分け下され。身廻りの物や大小取揃へ、斯波が面當に赤沼殿に奉公し、三千石の祿を受ければ二人扶持の扶助は何でもない。兄貴、そこらは決して嫌とは申さぬ」と廣言を吐く。二郎はむつとしたが空笑ひに誤魔化し、

「兄といふところで二人扶持の御合力とは忝い。が二人の兄が主君に頼まうとする斯波殿には大敵の、赤沼に従ふといふお前に、この大切な金子を與へて、敵に勢付けよとは言ひ難い。天下の忠臣賢臣と呼ばれてゐる斯波殿に嫌はれたを無念と思ひ、手を下げて眞面目に奉公し、行

くゆくは斯波殿に慕はれやうと思ふ心はなく、末頼みない佞臣の赤沼を主に取らうとは、道に背く無分別者。やがては獄門柱の相伴をする前兆。エエ氣の毒な呆れた奴」と教訓した。氣短かな三郎はぐつと急き込み、

「春早々から獄門の相伴などは兄上、嬉しくお禮申す。此の三郎が相伴するか、賢臣の斯波の左衛門を獄門に木登りさせるか、今に見てゐて下され」と言ひ返した。

「ムム、では斯波につく我々故、太郎殿もこの二郎をも討つといふのか。」

「オオ事ある時はこの三郎をも、弟とて遠慮はあるまい。勝つか負けるか、決戦の場合となれば、貴殿の首は拙者が討ち取り、兄甲斐に獄門の木を太うし、他よりは五六寸も高くあげてやらう」といふ。二郎は腹に据ゑかねて、

「汝が知行口になる拙者が首、戦場でやるまでもない、取られるなら今取つて見よ。」と、刀の柄に手をかけた。

「イヤこの三郎が取りかねうか」「サア討て」「サア来い」と、柄に手をかけ睨み合ふ、眼はむいて油断なく光つてゐるが、肝腎の腰の物は竹光なので、抜くに抜かれず、暫く互ひに挑

み合ふばかり。やがて三郎は飛び退き、

「これ二郎、よい加減に引きもせぬは、拙者が大小を本身でないと知つての侮りか。組み伏せて赤沼殿へ引いて行く事は知つてゐるが、兄弟の好誼許して置く。追付け自身の大小取揃へ真劍の勝負をしよう。待つて居れ、盛治」と口先きは立派に其の場を言ひ繕つて別れたが、その心の中では恥かしかつたのである。

二郎は弟の後ろ姿を見送つて、

「弟と思つて甘やかし、情をかけてやればよい事にして、却つて人を馬鹿にして増長する奴」と呟き、茫然と立つてゐた。

側の垣根から長閑に、調子よく突いてゐる羽子板の音が聞えてくる。突き手は娘達でもあらうか時折笑ひ崩れる聲には、いかにも初春らしい気分が満ち、祝儀も籠り伊達も籠つてゐる。情も愛も何も彼も、鴨の羽根や雉子の風切、思ひ羽に打ち込んで思ひの數を突きながら、一と二た三といつと、まだ十二三の子供や、十五六の戀心がついたばかりの娘達が、羽根の數を唱へ、年の數を數へながら突いてゐるのを聞いてゐると、突き人の姿までが惚ばれて、定めし艶

やかな事でもあらうと思ひやられ、遣り羽子の音にはいかにも正月めいた風情があつた。

藤内二郎もなかなかの色好み、

「さても調子のよい羽子板の音、突き手の姿が見たいもの」と心で嘯き、見ぬ戀に心をときめかせて佇んでゐると、祝儀廻りを仕舞つて歸る萬歳が通りかかつた。これ幸ひと呼び止めて、「オオこれこれ、鼓をちよつと貸してくれ。其方はそこに寄つて見物せよ。今面白いことをして見せう」と鼓を取り、得意の曲鼓に戀を含めて打ち始めた。垣の内では本阿彌の一人娘玉椿を始め腰元が、外で拍子よく打つ鼓の調子に、聞き合せて羽根をつく、鼓と羽根の調子はよく揃ひ、往來の人達までが足を留め、聞き惚れる程よい調子であつた。

その時心を浮き立たせて突いてゐた羽根は、さつと吹き寄せた春風に誘はれて、横に飛ばされ、垣の外にゐた藤内の襟から袖にばらばらと落ちて止つた。二郎はすかさず袂に拾ひ入れ、鼓を萬歳に渡し、目禮して返してやつた。間もなく羽子板を持ったまま玉椿は腰元と一緒になつて、通りへ駆け出し、藤内がゐるのに氣が付かず、其處か彼處かと見廻して、傍の梅の枝まで揺つたり振つたりして探してゐる。

藤内はそつと羽根を取り出し、扇を擴げて羽子板代りに、一二三四と言つたので、その聲に姫は振り返り、

「アレあのお人が拾うてぢや。意地の悪い。さあこちらに下さんせ」と言ひ寄つた。藤内は眞顔になつて、

「どなたの羽根かは存じませぬが、年の數だけ突けば夏瘦もせず、蚊にも喰はれぬと申す故ちよつとの間お借り申します。女子衆の大事な物、長くは決して突きませぬ。早く突いてしまひませう。一二三四五六七八九……」

と、口早に數へれば玉椿は打笑ひ、

「そのやうにお年は多くもあるまいが、數は澤山突かしやんす。本當はおいくつか」と藤内が手を握る。「ホホウ、お家柄だけあつてよいお目利。我等は丁度疵なしの二十六。羽根は疾うの昔につき終へ、これは女房の名代に突く羽根。お聞きなされ、その女は私の所に六十二で老女房に来て、當年は明けて八十八歳。顔の皺は漣のやうで、頭は雪、それでも八十八だといつて我が手で米といふ字を書きます。このよねの八十八はとて一日では突かれませぬ。數取

りばかりでしまひましょ。十、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、五十六七、八——オオ草臥れた」と休めた手から姫は羽根をひつたくり、

「お内儀はまだあるまいに、大きな嘘をおいひなさんす。羽根突くことも上手だし、嘘つくこともお上手。——さぞ上手であらう。この——て見たい」と、いきなり——

た。さすがの藤内もこれには顔負けして、てれかくしに扇の骨で白壁に小坊主を書いてゐるばかり。この様子を見かねた腰元どもは取り付いて、

「まあ何といふ氣の小さい事。往來の人も見る事故、門の内へちよつと一緒に這入りなさんせ」と、手を取つて引張つたので、藤内はこれぞ幸ひと、

「何でも御當家には、將軍よりお預りの銘入の大小が澤山あると聞いてゐる。武士たる者の仕合せの爲に、頂戴することは出来ませぬか」と語るのを皆まで聞かず、姫は喜び、顔を輝かせて、

「お易い事お易い事、將軍様の御重代の天國、小鍛冶義光その外名高い銘の物もある。今日は幸ひ御鏡開き、奥の座敷にみな飾つてある。玄關から入つては人目がうるさい。——これそ

こな露地口を明きや。決して人に言つてたもんなや」と、露地の戸を女に明けさせたので、一郎は夕方の節振舞の人ごみに紛れて入り込んだ。

藤内三郎武治は、兄が歸るのを待ち伏せて、投げのめさうと、行つた道を又戻り、最前の本阿彌の屋敷の門の所に立寄ると、奥に通ずる露地口の戸が細目に明いてゐる。

「よし、この家へ素知らぬ顔で入つて見よう。見付けられ叱られたら出るまでのこと」と獨り言を言ひながら身を窄め、するすると露地に入り、取付付きの障子を明けると、床の間に置かれた一腰が目にとまつた。それは相州物の中でも、上物の折紙のついた刀であつた。盗まうと決心したものの、出来心とはいへ、盗むと思へば氣後れして、前後を忘れ棒鞘をしつかり持つたまま、ぶるぶる身顛ひしてゐたが、漸くに抜け出して、姿を眩ましてしまつた。

稍暫らくたつてから、家の内では折紙付きの名刀が失くなつたと大騒ぎになり、家來の者どもは各々自分の潔白を示さうと、上下の區別なくお互ひに調べ合ひ、出入りの者まで嚴重に穿鑿してゐた。そこへ折悪く姫と別れた盛治は、露地から身を忍ばせて歸りかけた。その姿を見つけた家の者は、門外まで跡をつけ、外へ出るや否や「盗人は知れた——」と取り卷いた。二郎

は何も知らないので、狼狽へた様子もなく、

「これこれ粗忽なされますな。我等は宇治の邊りに住む浪人。用事あつて出京し、女中方に誘はれたまま内に入り、お太刀を頂戴してまゐつた者、それが怪しいとあらば、女中衆にお訊ね下され」とはつきり言ひ切つても、

「さう吐かす程却つて怪しい強盜。旦那の留守を狙ひ、女子供を色仕掛でたぶらかす、手のよい盗人め、それ叩け、それ括れ」と喚き立てた。そこへ外から歸つて來た下部の男が、「たつた今三の橋のところを、棒鞘の刀を持った男が、走つて下へ下つて行きました」と注進した。

「それでは仲間に手渡したな。大小挽ぎ取り搦め捕れ」と、駕籠昇や中間共も立ちかかつた。

「意地張つて手向はば打殺すぞ」と捻ぢ伏せ、大小を奪ひ取り、「いやはや見かけばかり立派な金拵へ、焼付で火傷するな」と、悪口たらたら脇差を抜いて見て、「こりや何だ。新身の疵物。これこの刀の身を見よ、竹筧だ。さても立派なお侍。去年の暮なら煤掃きの疊叩きに、この刀を借りるものをなア」と、一度にどつと笑ひ合つた。

藤内は、こみ上げてくる涙をとどめかねて言った、

「盗人とは無實の難儀、天道様もこの身の恥辱をお晴らしなされて下さらう。武士の刀が竹の筥では、この恥を削げようにも術がない。エエ舌喰切つて死にたい——」と、口惜しさうに我が身を掴み、腕に噛み付き、大地を踏み付け、齒を噛んで、身を絞るやうに泣き狂ふのも道理であつた。悲しい中にも二郎は、いやいや少しの恥は忍んでも、大功立てるこそ武士の勇だと思ひ直し、

「これもし、心ある方は聞いて下され。刀を盗んだ覚えは毛頭ないが、折悪い所に廻り合したからは、言譯のしやうもない。併し、一門兄弟は歴々の侍で主も持つてゐる。我とても望みを抱く身の上。それだのに纏にかかつては一家の破滅。後日になつて眞實の盗人が現はれたなら、その時は此の家の中に主人下人何十人ゐるかは知らぬが、犬鶏に至る迄、生かしては置かぬ。それを承知ならとも角も——いやいや、さう言つても無駄なこと。どうぞ料簡して下さい。拙者が女房は我が身のありつきを得るため、今明日中に金子三十兩借り調へると申してござる。刀の値打はいか程かは知らねども、盗人の實否を立つるまで右の金子をお渡し申す。

逃げ隠れするやうな者ではない。土地の者にも知られてゐる。何卒繩だけは御料簡下さるやう願ひ入る」と申し述べた。この家の家老文平次は、「ムムよく分つた。刀の値打は百貫、町人としては賣道具。それを且那の留守に失つては、この文平次が言譯立たぬ。三十兩あるといふならば、拙者が五兩を足さう。ささ宿に歸れ。——これ取り逃すではないぞ。」

と言つたので、二人の者が兩手を取れば、一人は髻を掴み、四方は棒で取圍み、「サア歩め」といふ處へ、姫の玉椿が走り出て、

「やれ、その人の知つた事ではない。可愛想に何事ぞ。許してやつて下され。お頼みぢや」と、泣き叫んで頼んでも、下人共は耳にも入れず、先きを拂ひ、面も恥も名も世間に晒しながら、晒して名高い宇治の里へと送られて行つた。

〔宇治、藤内二郎宅〕

その名から果敢ない、陽炎の森の下蔭に、庵を結んで微かな生計を立ててゐる盛治の住家は、軒も荒れ崩れて、月の影さへ内から見えるみすばらしさ。女房の小晒は、夫の出世のため物入

を稼がうと、我が身を捨てる覺悟をしたのは、何といふ優しい貞女であらう。身賣の仲立の老女は、供の男に財布を持たせて小晒の家を訪れ、

「今日は契約の期日ゆゑ、金子を渡し、證文も極めませう」といひながら、腰を下した。小晒は悦んで、

「何故遅いのかと心待ちして居りました。サア先づこちらへ」と招き入れ、「連合には大方の若君の乳母奉公といひ拵へ、夫の判も預かつてをります。世間へもその通りに言つて下さるなら、茶屋廊の外は何處でも嫌ひはいたしませぬ。が念のため、奉公先きのお主様の名を聞いて證文を上げたい。」

と云ふので、老女は小聲になり、

「勿體ない、どうして遊女や女郎にやれますものか。先きのお主は或る御本山の太師の、悟りを開いた長老様。寢酒のお伽にそなた様を、三年の年季で傭ひたいとの御事。こつちから噂したくとも向ふは殿しい隠密。しかも三十兩は内金で、四季の仕着せや小遣ひは折々出る筈。行く先きも悪い事は無からうぞいの。サア、金渡しませう。判を押して下され。」

と證文を前へ差し出した。女房はハッと胸に應へて涙ぐんだ。

「如何に夫の爲とはいへ、出家に思はれて來世までも、地獄に墮ちる身となるか。悲しやなう」と、心はそぞろに亂れ、涙はとめどなく流れるが、今更約束も變へられずと思ひ諦め、泣き濡れて判を押したので、老女は代金を改めて手渡し、

「只今迎ひの者を連れてまゐりませう。御亭主とも暇乞ひをして門出を祝つて待つてゐるさつしやれ」と、忙しげにあたふたと出て行つた。

時もあらうに、藤内二郎は大勢の者共に取り圍まれ、「逃げでもしたらば打ちのめす。打ち殺す」と怒鳴りつけられ、「逃げはしませぬ、お打ちなさるな。」「逃げたら打つぞ」「——棒をお當てなさるな。逃げはしませぬ」と、脅かされながら命からがら家に歸つて來た。この有様を女房はキツと見て、かねて覺えのある手錠を提げ、大勢の前に立ち塞がった。

「何事かは知らぬが我が夫を——、そこ放せ、放さずば、片端から突き止めますぞ」と、突き出す錠を大勢は、桿棒で打つたり拂つたり、叩き合ひ、既に女房も危く見えた。

盛治は聲をかけ、「やれ女房、早まるな、この人達にも一理がある。様子を訊け」と制した

ので、小洒は口惜しさうに齒齧みをし、

「エエ不甲斐ない。理にもせよ非にもせよ。たとひ浪人の身の上でも、藤内二郎盛治といふ侍ではないかいの。この眞つ晝間手籠めに逢ひ、これが立身の妨げにならずにやうか。夫を出世させたいばかりに、奉公に身を賣つて、たつた今證文渡して三十兩受取つた。この金も皆無駄事になるか。——賤しい下下の者共を相手にするは不足ながら、夫婦一緒に此の場で討死し、名を潔く残しませう」と、金子を大地へバラバラと投げ捨て、杖も棒も厭はず、大勢を相手に無二無三に突立てたのは、人の妻の手本ともいふべき健氣さであつた。

二郎は手籠めにされた繩をふりほどき、勇み勵む女房の鐘の柄をしつかと握り、

「オオ殊勝な心掛、頼もしい。だが先づ氣を鎮めて事情を聞け。武運拙き事ながら、今日都本阿彌の屋敷で、百貫の折紙つきの太刀を何者にか盗まれたといふ所へ行きかけ、我は盗まぬに極まつてゐれど、言ひ譯立たぬ破目となり、既に牢舎の縛り繩にかかるころ、御身が情の三十兩をふと思ひ出した故、それで罪を償ふ約束で、口惜しいとは思つたが、おめおめと涙を押し堪へて來た。御身の無念の心底は至極尤も。我も恥をうけ、生き延びる積りはないが、唐

土の卍和が兩脚を切られても屈せず、寶玉を捧げて本意を磨き、韓信は衆人の中で股を潜つて一時の恥を忍んだ例もある。又勾踐は人の嫌ふ石癖を嘗めて主君を助け、會稽の恥を雪いだこともあるではないか。たとひそれには劣るとも、盗人の虚名を忍び、武功を立てて一天下に名を止めようと思ふ念願のある爲め耐へ忍んでかくの仕儀。それにつけても繩目にかかる恥を逃れたも、誰あらう皆御身の御蔭。妻とはいへ、親にも劣らぬ厚恩は生々世々に忘れはせぬ。エエ思へば、思へばいかなる貧乏神が身に附纏ひ、由なき所へ導き入れ、思ひもよらぬ難儀に逢はせ、あまつさへ妻が情の身の代を無駄にさせるか、口惜しいわい。情けないわが運よなあ」と、男泣きに泣き入つた。女房は夫の語るを聞くに連れ、ハツと心も暗くなり、勇んだ心も打碎けた。

「さてもさても、一寸先きは闇とは浮世の習ひ。夫の爲に捨てる身は、いづれとも同じ道ながら、立身出世をさせまして所領持ちとなし、乗馬よ引馬よと綺羅を飾らせ、浪人の萎んだ肩を怒らすを、人にも見せつ見ん爲に、連れ添うて間もない夫婦の仲を、三年といふ年切つて、辛い生き別れをする身の代を、無實の難に代へやうとは、思へば口惜しや情なや。金は惜しい

とは思はぬが、夫婦別れる三年の月日が惜しい」と、あとは堪へられずに聲を惜しみます泣き伏した。それをも構はず、警固の者共は、

「エエ遅い遅い、早く金子を渡せ」と聲に罵つた。

「ハテサテ渡すまでもない。その金子を取つてゆけ」と言はれて、「請け取らずにおかうか」と、撒かれた金子を拾ひ集め、小判を吟味し、數を調べて一同京へ立ち歸つた。

二郎はその後を見送つてゐたが、

「エエ情知らずの雜人めら。盗まぬに極つてゐるものを——このやうな歎きを見るからには情も我慢ももう無用。この上は目茶苦茶に當り散らし、金も取り戻さずにおかうか」と駈け出すのを。女房は押し止め、

「ハテ諦めの悪い。よいわいな。金よりは命が大事。それに今にも迎ひが来れば行かねばならぬ。三年の間は逢はれませぬ。いつ死ぬやら生きるやらわかりませぬ。迎ひの來ぬ内、ほんのちよつと、門出祝を致しませう。サアござんせ」と、泣き腫らした目をつこと笑ませて、涙片手に押へながらの暇乞ひは、まことにいぢらしくもあつた。

〔大和玉水の里〕

小晒は夫に別れ、宇治の里から駕籠に揺られて、山吹の瀬を通り、——いつになつたら戀しい我が夫の盛治に逢ふ事が出来やうか。たまには逢ひ度いものだ——などと心に念じながら、通ひ馴れぬ大和路にかかつた。疲れたので駕籠から下りて、徒跣になつて歩いてゆく。小晒のそのふさいでゐる姿を見て、媒介の老女は話相手になつて氣を晴らさせようと、色々話をしかけてくれるが、それは少しも耳にも入らず、今の悲しい思ひを晴らすべくもなかつた。

眼の前に見える三空山はまだ春淺く、花は咲かずに雪が白く蔽うてゐる。供の雇人どもは戀知らずの男なのか、何の苦勞も無ささうに、片荷の端に煙草盆を提げ、道々楽しさうに喫んでゐる。折々休む度毎に小晒も、「忘れ草ともいふ煙草を喫んで、せめて今の思ひを忘れよう」と、煙草の煙に思ひを包み紛らしながら、奈良街道筋の玉水の里に辿り着いた。肝煎りの老女が聲にしなを作つて、

「これ申しお内儀様、今宵は奈良に泊つて、明日はお國へ着きます。此處で月代を剃らせ衣

裳も替へて袴を着け、男の姿になる用意をなされ」と言ふ。

小晒はびつくりし、「それは嫌様、何事ぢや。寺方への奉公と聞くさへ臍に落ちかねたが、それは言つても歸らぬこと。月代を刺り袴を着て、男の眞似する約束は、妾は致した覚えもござりませぬ。そりやあんまり——」と、煙草を吹いて顔を振つた。

「ハテこの人は、あんまりつけつけ物を言ひなさんすな。金をやつて證文取つてあるからはどうでも此方の勝手次第。それが厭ならどうなりと、三十兩の金を取揃へ、ここから歸つて貰ひませう。——オオ生あつい——」と上着を脱ぎ、汗押し拭つて何げない顔をする。女房はしくしくと泣き出した。

「何の報いであらうやら、奉公の身の代は夫の身の役にも立たず、今は又この難題。三年経つのは夢の中、月代刺つた髪付を、立ち戻つて男に見せられませうか。人に面が合はされうか、行く道でさへこのやうな事ならば、猶行き先きが思ひやられる——」と泣けど悔めど、今更どうにもならぬので、思ひ直しては又心が亂れ、只出るものは涙ばかりであつた。「歎いた所で返らぬこと。兎も角も、せめて心の諦めに、事の様子を隠さず語り、心の済むやうにして下

され」と泣き泣き言へば老女は悦び、

「オオ語らずには置かれませぬ。寺と言つたのは偽り。——まあ心を鎮めてお聞き下され。

此の國の大名古川権頭清氏殿の一人娘に琵琶の君といふお方がある。斯波左衛門義將殿と許嫁の間でありましたが、父権頭殿は赤沼入道幸満とは肉身の伯父甥故、斯波殿との御祝言も延び延びになつて、今になつても何の沙汰もない。お可愛想に琵琶の君は、惜しや二十歳の花も散りかけるにまだ殿御の顔も見ず、蔭ながら斯波殿を戀ひ慕ひ、思ひ積つて病となり、今養生の眞最中。それ故器量のよい人を斯波の左衛門義將と偽り名付け、心に勇みをつけたなら、自然と薬も利いて來やうとの醫者衆の指圖。なれど本當の男ではならぬこと。男らしい女子といふお尋ねで、ここまで話が纏つたのでござんす。月代刺るのが厭なら、三十兩を今ここで調へてお歸りなされ」と語つた。女房はあまりの事にをかしくなり、

「寺よりはその方がましであらう。常に左衛門様のことは聞いて知つてゐる。その眞似をして、合戦軍の咄でも見事にその場は間に合はさうが、妾と姫君とでは、——、どうも勝負はつきますまい」と、笑つて憂さを晴らしたのであつた。

「それでは承知して下さるか、アア忝い」と、老女は荷物をほどき、櫛道具や衣裳その他の品々を取り出した。女房は常に夫の髪月代を剃り馴れてはゐたが自剃自鬘は初めてだった。美しい藻のやうな黒髪を揉んで、鏡代りの水鏡で梅花の水油を含ませ、匂ひやかな前髪を惜しみながら剃れば、無駄花のやうに髪は散り落ちた。髪置きしてから今まで、何年かの長い間見馴れた我が顔に、自分で別れの涙を送り、剃るにつれ亂れ髪は膝の上にバラバラと散り落ちる。髻の小枕も今日からはもう入らぬ、丈長も捻元結に變へて大髻に結び上げ、眉は引黛して男眉に作り、磨き砂、磨き楊枝で鐵漿を落して白齒に身を整へたその姿は、なよなよとしたその中に張りがあり、恰も青柳に櫻の花がバツと咲いたやうな風情で、二役兼ね、女とも見えるし、男なら御小姓上りの若侍と紛ふばかりの艶やかさだった。衣裳を改め兩刀を手挟み、衣紋に身繕ひして待つてゐると、引馬、乗物、徒歩侍など、行列用の七ツ道具を押し立てて、迎ひの者がやつて來た。

「古川権頭清氏より、花翠斯波の左衛門義將公の御迎へ」と呼ばはつた。その聲に驚いて小晒は、「アレ馬がでんでん太鼓を打つわいな、アア怖——」と逃げ隠れる。老女もこれには困り

果て、「これこれその有様は何事。詞に小訛りをつけてどうすべし、かうすべしと男らしくやるのでござんす」と囁けば打領き、

「ムム、なんと身が方へ身殿よりお迎ひだといふか。オオ太儀々々。目出度い折柄、酒でも打飲つて、唐辛子かつ嚙り、寒風を凌いで供をさせろ、先きへ行くべし。奴様、許さしやんせや」と言つて、可笑しさに堪へかね、口を掩ふのであつた。袂を張り、張腕にして、のつしをつしと歩まうとするが、柄櫓の足癖がいつか出て、顔も和らぎ勝ちなのを、御殿模様の重着に押し隠すが、着物の裏には懐かしい女肌があらはれ、外は男出立、誠にこの手拍の二面であつた。

「ヤア手振の衆、さあさあ振れ振れ、お先き押立てろ」と命じられて、「よい來た——」と供先きの奴ども、手を振り振り、撒いたやうに降つた春の霜を踏んで、行列は古川の館へと向つた。

花掣を迎へるといふので、古川家では支度を整へ、相生の島臺を飾つた座敷構へも、まことに賑々しかつた。

總領である藤の冠者氏連も、妹の祝言だといふので装束を着代へてゐる所へ、都から赤沼判官が、下向の道すがらといふ名目で立寄り、密かに冠者に對面し、さうして言つた。

「先日は御書面有難う存じました。殊に斯波の左衛門義將掣入とお知らせ、是ぞ屈竟の時節と存じ罷り下りましたが、してそれは眞實でござるか。」と、冠者は小聲になつて、

「いかにも、妹の琵琶の姫には左衛門を戀ひ焦れ、その餘り病も重うなつたを父母は心配致し、是非にと申し遣はしましたるところ、左衛門も承知して今日掣入り仕る。我等には別に知らせもない事ながら、是ぞ天の與へ。手筈を合せて討ち取らうと、貴殿に内通致したる次第。早速のお下り忝い、大慶々々。」判官も悦んだ。

「いつぞや此の處にて紛失致した將軍の印判も、琵琶の君が盗んでゐるに違ひない。妹とて油斷召さるな。それに就き、これへ同道致せしは、藤内太郎及び二郎が弟、藤内三郎武治と申す者、兄を忌み嫌ひ我々に仕へ度いと申す故召し抱へたる者。かうした所へ掣入りする左衛門

めは、死ににまゐるも同然——」

と、笑壺に入つて笑ひ興じた。

「アアこれこれ——」冠者は制して小聲で言つた。「下人共の中には、敵に一味の者もある。父母の耳に入つては事面倒。十分に心をつけてお忍びなされ。」

「心得た」と座敷を立ち、判官はわざと土民の家に宿を借り、知らせのあるを待ち構へてゐた。

琵琶の君は殿御がお出でになつたと聞き、今までの病氣も今はさつぱりと、氣も輕やかに、近頃見せた事のない笑顔まで作つてゐる。男といふ妙藥の前には、さしもの名醫香婆でも、匙を投げて降参するであらう。花掣の贋物といふことは、父母だけが承知してゐる外、誰にも一切分かつてゐないので、兄の藤の冠者も家來の者も、まことの斯波殿がお見えになるものと思ひ込み、出迎ひの侍共は花掣の姿を見るや「お通り——」と呼ばはつて、頭を一樣に下げて畏まるのであつた。

身も心も女である小晒は、表面だけは男のやうにつくろつて、侍どもが平伏してゐる前を通

れば、さすがに上氣して顔には紅葉を散らし、赤い錦縁の疊を踏む足も浮き立つて、心の落ちつく暇もない。舅君にも姑にもどう言つて挨拶するのが諸禮やら、どう言へば無禮に當るのやら分からないので、ただ「あいあい」とお辭儀ばかりしてゐた。人數が多いので頭を下げるだけでも容易でなく、割膝に坐つては見たものの、馴れない爲に痛くて堪りかね、動もすれば締りのない女子の居住ひになり勝ちなのを、ハツと氣付いて又坐り直してゐるのは、傍の見る目も痛々しかつた。

だが姫君はいとし殿御と信じ切つて、嬉しさに側へ寄り、

「もうし左衛門様、何がお氣に入りませぬやら、祝言の取りやりにも、こちらはいくら急ぎましても片破舟のやうに、何の訪れもない片思ひ。ようもようも私を煩はして下さりましたなア」と、怨めしさうにおつしやるので、

「焦れ舟でも何舟でも、生憎の身に祝言の帆柱もない故に、不本意には存じながら延引致したる始末——」と、あとはただ辭儀ばかりしてゐた。側にゐた藤の冠者はこの挨拶を聞いて、腑に落ちないと思つたのであらうか、

「これこれ左衛門殿、貴殿の御事は斯波の武衛のお館とて、系圖正しくこれある由。氏は何氏、御先祖はいづれよりのお分かれか承りたい」と問ひかけた。小晒は南無三、しまつたと心の中はざわめいたが、知らぬといふも拙からうと思つたので、

「ムム、さてはこの俺を眞の左衛門でないと思つてのお疑ひか。拙者が家の氏系圖、何で知らずに居られませう。後程ゆるゆるお物語申すでござりませう」と當座を作つて答へた。それでも冠者は何か詞質を取らうと思ひ、

「イヤ後は後、冠者めも言ひかけました以上、聞かずにその儘引くわけにもまゐらぬ。是非ともこの場で。但し語りたくないとおつしやるならば、此方にも語らせやうがござる」と、いかにも苦々しく言ひ張つた。かうなつては言ひ逃れる事も出来まいと、

「然らば語つて聞かせ申さん——」と、合點顔に言つたものの、夢にも知らぬ斯波の系圖何處を根據にして言つたらよいやら、はてさて困つたどうしようかと、氣は急き思ひは亂れたが、此の上は止むを得ない。古の大將、勇將を思ひ出すまま、口から出まかせに嘘八百を並べてこの場を遁れようと胸を据ゑ、膝立て直し、息をついで、いかにもさもありさうに次のやうに語

り出した。

——もんざく系圖——「そもく、斯波の武衛の館と申すは、代々左右の兵衛に任ず。兵衛の官の唐名なれば家を武衛と名付けたり。斯波の氏は源氏なり。總じて源氏もしなくの清和源氏、宇多源氏、村上源氏、嵯峨源氏、源氏々々が四源氏ござる。中にも清和ぞ世に光る。光源氏は敷島の、歌道の傳授と聞えたる百人一首の卷頭。天智天皇十八代の帝、陽成院筑波根の、峰より落つる源の、頼光に胤腹一つの御弟、頼信の跡取頼義の總領、嘘でない世の愛宕白山八幡太郎、義家に五代の後胤上總之介義兼が末葉、兵庫頭坂田の公平には、顔真赤いな他人にて、渡邊の綱こそは、茨城童子が片腕、只一太刀にうちわも内輪叔母舞ぞや、叔母の息子の競瀧口源三位、頼政の小姓立猪俣太とは行合兄弟、近衛院の御宇かよ、鶴といひし獸の、帝を惱まし奉る。頼政勅、蒙つて、たんだ一矢にころくころ、落つる處を猪俣太、九刀ぞ刺いたら畠、畠山の重忠も、縁者つゞきの先祖にて、三浦の大介が疝氣筋、四代の末孫朝夷奈の三郎義秀は、音に聞えし大力、曾我の五郎時致が、鎧の草摺むんと取つて、曳いて見せんとふみしめて、踏んばたかつた股野の五郎、力損

にて我等まで、いかな殿御もしつかとだきしめだけはあられの佐々木殿、土肥の二郎も從弟筋、從弟程よう仁田の四郎、富士の御狩の功名は、末代末世記録に載つた、猪武者の争ひに、負腹立て、讒言いふ、梶原とは何でもなく、鎮西八郎爲朝の外戚腹、瓜の蔓に那須の與一、扇の的より精兵の達者、弓の傳授の家ぞとは、是ぞ系圖の始めなる。それより代に傳はりて、楠多聞兵衛正成が嫡子犬坊丸、二男悪源太義平、三男山邊赤人は古今無雙の歌人にて、公家にも一門在原の、業平の中將の、妾腹の孕ごもり、妻もこもれり若草に、今日はな焼きそ武藏坊、辨慶が七番目の末子、七つ道具のさいづち頭、法然上人の一の御弟子と有難き、熊谷の二郎眞實に三代の一人娘、靜御前は血の道持、扱こそ御子ましまさず、常に冷えたる腰越より、追返されさせ給ひにし、九郎太夫の判官、源の義經の一の谷の鴨越、眞逆様に落し子の、末葉も茂る桃園や、清和源氏のちやくちやく嫡流斯波尾張守家氏、左近の太夫時氏、その子に宗氏その子に武衛、高經が三男斯波左衛門義將とは、我が事にてござんす——

——口から出まかせの系圖の一卷、怪しい處は言ひまるめ、行きつき次第に語つたので、さ

すがの藤の冠者も煙に巻かれた。

「さてもさても、廣い御一家、舅の身には過ぎた立派な掣殿、——三國一ぢや、掣に取りすまいた——」と、譎ひ祝つたのであつた。

權頭夫婦は長物語の間に、若しや女の正體が顯はれては大變と、

「少し御休息なされい、我等も勝手へ引取りませう。サア皆々もこちらへ——」と打連れ、座敷を立つて行つた。

小晒は只一人跡に居残り、

「アア危いところ、オオ氣詰りな。眞似をするさへ苦しいのに、よくまあ殿達はあのやうに堅苦しい事を言つて生きて居られるものぢや」と、獨り言を呟きながら横になり、手枕をして休んでゐた。

そこへ琵琶の姫はそつと立歸り、差足して寢姿の後ろに立ち、つくづく見れば見る程よい男、心もわくわく止めかねて、「日の暮れるまでは待たれぬ」と、とんとその側へ横になつたので、小晒は驚き、

「アアこれこれ、困りまする——」と起き上る袴の相引をしつかと握り、
「これ騒ぎ立ててどうなされます。暮れるも待たぬ新枕、お蔑みも恥かしながら、御事故に祝言が延びてさへ、煩ふ程なこの身の上、お姿見ては堪へられず、つい落付かぬ我が心、——解いて下さんせ。只の一度も——、私をお嫌ひなさんすか」と、恨み眼にぢつと見た顔付は、思ひ迫つた目許であつた。

小晒も突差の間に合はせ、

「アアもし、親達の言ひつけには、あの子の病氣の癒るまでは、——とある。それに背いて親達を出し抜いたとあつては面目ない。是非に——、
り合ふやうで、齒切れが致しますまい」と云つて笑つた。

「エエお堅い事ばかり。毒藥變じて藥となる。——きなさんせ」と姫が継り付けば飛び退き、

「アア聞き分けのない。この——鬼が住んでゐて、大きい口で噛み付きます。怖い事ぢや」と應じないので、姫はさめざめと泣沈んだ

「何といふつれないお心、夫の身の爲め心を盡すは女の習ひ、珍らしくもないかも知れませぬが、自らが兄藤の冠者氏連と伯父赤沼とが心を合はせ、將軍義教公の御判を以て贋廻文を書いたのを、私が御判を盗み取り、新枕の引出物に進ぜうと、兄や伯父には敵となり、隠し置いたを何とも思はず。あんまりむごい我が殿——」と、怨み泣きに歎くのだつた。

「御尤も御尤も、御判も受取り義教公へ奉り、御身の思ひも晴らさせましたいが、——

——は、我等凡夫の業には出来ぬ事、どうぞ、寄り添ふだけで堪能して——」
と言へば、

「それ程——厭なのに、よくまあ掣入りなされましたな、——それならば自らも、今が厭なら今宵中、今宵中に叶はねば明日明後日、深草の少將のやうに百夜なりとも通ひませう、よう覚えてゐさんせや——」と歎きかこつ目に涙、不承々に歸つてゆく心の中は、まことに氣の毒だつた。

藤内二郎盛治は、我が女房とは夢にも知らず、左衛門が掣入りするといふ噂を耳にして、

赤沼一家に縁を組み、心を許すは飛んで火に入る蟲同然の御身上、何としても氣遣はしいと借着に身形を整へ、古川の館にまゐり、玄關の式臺に立ち寄り、當番役の者に近付いた。

「拙者は斯波の左衛門が家來でござる。主人に内々お目にかかり、申し上げ度き儀がござるお取次お頼み申す」と言ひ入れた。當番の侍は承知して、

「幸ひただ今廣間においでなされる。かうお通りなされ」といふ。「然らば御免下され」と奥に入れば、廣間の上段に、美しい若侍がただ一人茫然と坐つてゐる。

一目見るなり、さても我が女房の小廝によくも似た男の子である事よ。だがこの人が斯波殿じがなあらうと、額を疊に擦りつけて、

「近頃まことに差し出がましき事ながら、藤内太郎家治が兄弟の者なれば、お主同然の忠義を重んじ奉るは當代の習ひ。——さて親が子をだませば、子は親に楯をつくつと申します。まして當家は赤沼が一族。殊に御小舅の藤の冠者は、君を討ち滅さん心組みと密かに承りをります。御武運盡きて取り返しのつかぬ破目にお逢ひなさらば、色戀に溺れたと世間の嘲弄は逃れますまい。早速お供してお連れ申さうと、是までまゐりました」と申し述べた。

小晒も藤内が顔を上げないので、夫の二郎とは気がつかず、

「ヤア、ちんぷんかな事を申すは何者ぢや。殊にこの左衛門を色に溺るるなどとは何を申す。そのやうな事を宿に残して来た思ひ人が傳へ聞いたなら、面目なくて合はす顔もない。いつたい汝は何奴ぢや。さつさと下れ」と言ふ。

「イヤ拙者は家來藤内太郎が弟、同じく二郎盛治——」と顔を上げれば、小晒も、

「ヤア藤内殿か、我が夫か——」と、走り寄つて縋り附いた。藤内は小腕取つて投げた。

「ヤア氣狂ひめ、大名の若君の乳母奉公と偽はり、所もあらうに赤沼一家に入り込み、その上に女の身で斯波殿などと名乗つて月代まで剃る。そんな姿は日本は愚か、唐天竺にも例を聞かぬ。爪一つ髪一本まで夫に委せた身體でないか。察する所敵に頼まれ、斯波殿を嘯し寄する計略か、それとも不義か。何れにせよ助けては置けぬ。白狀せよ」と怒る聲さへ顔へてゐる。女房は狼狽へた様子もなく、

「アアコレ聲が高い。不審に思ひ腹を立てさんすも無理はない。さりながら不義する私でもなし、又何で敵に一味しよう。この家の娘御が左衛門様を慕ふあまりの戀煩ひ、そのお相手に

頼まれて、左衛門様になり代り、かうした姿になつたのでござんす、——それに就て一つの大事、琵琶の姫は大將の御判を、兄御の手から奪ひ取り、床入りすれば呉れうといふ。いろいろに考へては見たものの、千日千夜考へても、女子同志——文珠の智恵にもならぬ事。そんなに腹を立てずとも、どうがなして御判を取る工夫をしたがよいわいな。何にも急ぐことはないぞえ」と、一部始終を打明けて話すのを、盛治は聞いて、

「ヤア、それは思ひがけない。出来した出来した。先づその御判は欲しいがどうしたらよからう」と小首をかしげた。

「これよい事があるわいな。今宵も姫が忍び来るに相違ない。此方が私と入替り、暗がり紛れに姫と寝て、だまして御判をお取りなされ。」

「ハテそんな事が出来るものか。他の工夫をせい。」

「エエそれはいらぬ御遠慮。私さへ慾を離れば、御主人の爲になる事ではないかいの。」

「いやいや、後には左衛門様と御夫婦になられる姫君。疵をつけては後難が恐ろしい。それでは拙者が間に待ち受け、姫君が忍んで御出の時事情を語り、連れて一緒に立退かう。さうな

れば御判も取戻し、姫君も殿様とかねての望みを遂げられる。その上我々が忠義も立つといふもの。よい所に來合はせた。もう此方に任せて置け。サア案内——」と、盛治は上段の寢間に入り戸を閉め廻し、寝てゐる態を装つてゐた。

女房は植込のある數寄屋の蔭に隠れ、力を合せ一緒に連れて立退かうと、手筈を定めて立別れると、早や暮六ツの時計の鐘の音。

一間々々には大蠟燭が星が天降つたやうに明々と點された。打ち合はせて置いた藤の冠者、赤沼判官、藤内三郎、それに家來の走井久七、久八、根地大藏の面々が息音も立てず拔足して忍び込み、寢間を取り巻き、鞠垣の大綱をそろりそろりと引延ばし、四方に張廻らして包み、遁げ出る處のないやうにし、互ひにこれで大丈夫と顔見合せて領き合ひ、各々懐中から大釘と鐵槌を取り出し、襖、遣戸に、手を揃へて一度にバタバタと打ち付けた。

藤内二郎は此の物音に跳ね起き、「南無三、失敗つた」と、此處よ、彼處よと、明けようとしても、戸には全部釘打ち付けられ、明けようにも術がない。仕方がないので障子を破り、覗いて見れば大綱をかけ廻らし、軍兵どもが刀を提げて取り圍んでゐる。天に飛ぶにも、地にも

ぐらうにも、どうにもならぬ運のつき。この嚴重な用心には大神道の阿羅漢さへ恐らくは遁れる事は出来なからうと思はれた。是を見て障子の中から大音あげ、涙を流して、

「古人の詞に嘘はない。七人の子はなすとも女に心許すなといふ金言は、今が今骨身にしまてよく知つた。敵なら敵と思つて諦めもしようが。エエ憎い女め。このまま死んでしまはうとも、大天狗になり替り、思ひ知らせてくれるぞ」と、戸障子をやたらに叩き付け踏みならし、「敵の奴輩よツク聞け、昔が今に至るまで、君を弑し、父を殺した一族はあれど、主と掣とを討ち取つて、よい世を過した例はない。汝等も知らぬ事はあるまい。長田の庄司は主君義朝、掣の鎌田を殺したが、その日のうちにその身も討たれた。因果はめぐる小車だ。報いの程を思ひ知れ。せめて冠者めか判官めか一人を討取つて、雜兵どもの五人十人左右兩脇に掻い込み、思ふ存分締め殺し、心變つた女めを蹴殺して死にたいもの、——エエ残念、口惜しい」と、立つてゐる板敷をどろどろと踏み鳴らし、血の涙をはらはらと流しながら襖を切り裂き、齒嚙みをなし、跳ね上つて怒り狂つたのは、無念極まりない有様だつた。

障子の外では、女といふのは姫君の事と思ひ込み、

「ヤア愚かや左衛門。姫も敵の兄弟と知りながら悠々掣入りして女を怨む恥知らず。このやうにして乾し殺しに逢ひ、餓鬼道に落ちるより、一思ひに腹切つて、修羅道に墮ちてゆけ」と一度にドツと打笑ひ、関の聲をあげた。

この只ならぬ物音に、權頭夫婦、姫君も一緒に走り出て、

「ヤア氣が狂つたか、悪人め。仁義厚い斯波殿と縁組して忠を盡し、立身しようと思ふ心は少しもなく、謀反人に與し、賢人の大事な掣をも討ち取らうとは、天魔の障障かあさましや」と抑へようとするのを、

「ヤア聞きたくない。大義の前には親も殺す。それ、引括れ」といふところへ、庭の木蔭から、

「オオ暫く、斯波の左衛門これにあら」と聲がする。

一同ハツと眼を向ければ、夕闇を輝かす黄金作りの五尺餘りの大太刀を差した侍が、あたりを揺がして現れ出た有様は、恰も鷗の群れてゐる潮干潟に、大鶴が蘆を分けてのさのさと歩み出たやうで、威容あたりを拂つて見えた。藤の冠者はびつくりして、

「今までこつちで聲がしたのに、いつの間に逃げ出したやら。——それ、討ち取れ」と叫ぶのを尻目にかけて、

「ヤア愚か愚か、蟹は甲羅に似せて穴を掘るとは汝等がこと。天下の管領職を承つて、六十餘州の政道を司る斯波の左衛門義將は、身は一つなれど、命に代り名に代り、幾人にならうと思ふがまま。コレヤイ藤内三郎、なんとこの左衛門はその方が嫂の小婿によく似てゐると思はぬか。——オオ似たも道理、まことは藤内二郎盛治が妻小婿といふ女房なるわ、うつそりども。女と思ひ悔つて怪我するな。並大抵の女とは女が違ふ。浪人暮しの憂き難儀に、針一本の力で夏の物を冬にし、鏡立を米にしたり、硯箱を味噌にもする。又は古葛籠も忽ち家賃にする神變自在の女。とはいひながら、姫君が床入りだけには、神通も叶はぬ悲しさ。サアこの上は思案はいらぬ。天に二つの日なし、地に二人の殿御なし。夫の爲に捨てる命は塵灰芥同然。吹けば散り、煽げば飛ぶ。高の知れた浮世の中。たとひ汝等が鬼神であらうと恐れはせぬ、斬らば斬らう、突けば突く、飛べば飛ぶ、跳ね上れば跳ね上る。命限り腕限り、三ツ四ツの男首を、この一ツの女首に換へれば換へ徳、——サア来い——」

と、身も軽やかにさつと足踏みし、眼光鋭く勇みかかった有様は、昔の巴か山吹の生れかはりかと疑ふばかりであつた。

「ヤア口の過ぎた女め、サ、あれ討ち留めよ。」

と藤の冠者が下知すれば、父權頭も刀を抜き、母も姫も長刀を構へて、

「主といひ聲といひ、親にまで敵對する大悪人め、容赦はならぬ」と、互ひに入違つて、暫く防いで斬り結んだ。

その間に盛治は疊を上げ、板敷を易々と切り破り、髪を亂して抜け出た。

「藤内二郎とは我が事。敵に勝り劣りはなけれど、差し當つては弟の三郎め、首捻ぢ切つてくれう」と飛んでかかつた。

「三郎討たすな、者ども」と、どつと喚いて駆け寄せた。彼方此方と追ひまくられ、既に二郎が危く見えた時、女房は機轉をきかせ、障子に張つた大網を取り外し、勇みかかる新判官、藤の冠者の後からバツと網を打ちかけ、えいやつと曳いたので、二人諸共仰向けに打倒され、「これはしたり」と焦つても、手足も自由にならず、もがいてゐる様ははごにかかつた野末の

鳥、小氣味よく思はれた。

此の勢に盛治は三郎を取つて引伏せ、腕から手先まで縛り上げ、寄せ来る雑兵どもをばつと追ひ散らし、立ちかかつて網繩を床柱に括りつけた。

「こいつら二人は左衛門殿より身殿へのお年玉。生かすとも殺すとも御勝手次第。弟は拙者が正月の料理初めの初肴、これを肴に姫君を御供申して御祝言。月代剃つたを幸ひに、お興添へにも女房小晒、待女郎にも女房小晒、おつき侍にも女房、お腰元にも女房、四枚揃への花があるた。——切羽根、摘羽根、廻りがよくて二人役、三役の繪がつく、徳つく、色つく、人思ひつく、知行つく、民もつくつく——」と、悦び祝ひ唄つた。

まことに筑紫の果から東の果まで、靡き従ふ管領職の斯波左衛門義將も、やがて武家繁昌の御代に逢ふであらう。その前兆のこの正月は、いかにもお目出度い次第であつた。

下の巻

〔源義教公道行〕

—文武の花も榮えた、初花咲いた見さいな、藤内四郎殿ナ、太鼓打の役で、代々の太鼓を、あそこらもとに置かせて、金の撥を手に持ち、てれつくにはつつてんてん。てれつくにはつつてんてん、とうからつとん、と打惚れた。なるかならぬか、戀の中の町、なつかのなつかの中の町を通りたうはないが、七草たたいててつへい若水。裸花聲百貫。くわんくわんくわんくわんとも鳴るは夜明の、鐘はつんつんつらいか、つつてん、天の道せばからず、立つ春は鶯鳴かぬ離れ島。雪の深谷の奥迄も、知ればや知召されたる、御身の上にかなれば、御運も今は薄霞。花の晨もたゞなくに、袂は露にゆふべの色、赤沼父子が逆心を、防ぐ刀もつき弓の、月の都を、月もろともをちかた人とさすらふる羅綾の袴、錦繡の重ね引換

へいつの間に、鶉衣と綻びて、ほつれ出させ給ひける。従ひ仕ふると者ては、御側近き旅衣、狩場になれぬ若鷹の、鳥立も知らぬ若草や、二番生えなる若侍、六角左近太則冬、尊氏公の白旗を、守袋にまもりとて、疊みこめてぞ持ちにける。山名伊織之介氏廣が、肱にかけてたる袱紗には、代々に傳はる軍配團扇。むかしを匂ふ梅の鞭、畠山小將監高顯が、袋に納め腰に指す。同じく郎等藤内四郎光治、彼等もせめて攻太鼓、勝色見せて又いつか都に歸り花軍、開かん御代の關路の鳥も、此の曉を今暫し、忍べや我も忍ぶぞと、門出の雁に驚きて、笠打掩ふ人々の、世の成る末ぞ痛はしき、思ふに違ふあらしに、昨日と過ぎつ明日は又、いさや白木の弓の弦、思ひ切れども思ほえず。願らるる九重の、残んの雪のほのぼのと、花に明け行く比叡の嶽。霞に籠めて鞍馬山、鞍置き馬の敷々を、繫がせ曳かせ歩ませて、折にふれたる乗心。わが北山の御所櫻、春の眺めと櫻蔭、咲いた櫻になぜ駒繫ぐヨノ、勇めば駒が、駒が勇めば天にも上る、雲雀毛や、夏は梢も青の駒。祭に加茂の瓦毛や、紅葉にかよふ小牡鹿の、鹿毛も冴えたる月毛の駒の、駒の銜さへんくさへと、手綱かいくりく、栗毛に、乗つた馬上はよしや蘆毛に、雪の四つ白、白覆輪や金覆輪。今は

梨子地の鞍籠、馬はあれども此の身には、徒歩路越えゆく木幡山、弓手にみつの行先は、山柁原と聞くからは、世に隠らふる我々が、此の身包むに頼もしく、明けずもあれな淀川の、岸にかけたる白浪を、花の網白と朝ぼらけ。鸚の鳥鳶飛んで天に至れば、魚淵に躍る教も、上下の、道明らけき鳩の峰。正八幡の鎮座なる、我が氏の神軍神、武運を守りたび給へと、頭をかたふけ給ひければ、各遙かに禮拜し、君が行方を祈念ある、御有様こそ殊勝なれ。見渡せば山の名の、朝日に氷解けわたり、水や烟を楨の島、宇治の里の子打群れて、萌ゆるゑぐつむ若菜摘む、芽花杉菜にさいたづま、妻は誰が妻老いぬれば、落の姑、水無い川で船こがば、其方は目籠で水を汲め、落の姑、あの松山の松葉をよめや、嫁菜蒲公英土筆、蕘菜摘みて童の、相撲取草立つ方に、勝てや勝て、凱の、聲高無双武士の、櫓にかけて播磨投、あぐる團扇や扇の芝に、早や三番の勝相撲、名乗りて過ぐる杜、鶉、待たぬに春を漏れ出でて、弓馬の道も魁けんと、漲りわたす長池や、水草かさわけ鳴く蛙、かはづ軍の勝負に、御身の上の占問へば、水の源、淀みなく、濁りなき世に泉川、しばしが程の泡沫に、沈まば沈め頼みある、斐の原にぞ着き給ふ。

〔大意〕足利將軍義教公の道行を叙した長客文。赤沼入道親子の逆心によつて、世を狭めた義教公は、家中に名のある家々の強者どもを御供に、いづくともなく落ちてゆく。六角左近は尊氏公以来の白旗を、山名伊織はお家重代の軍配團扇を、畠山小將監は梅の鞭を夫々に捧持してお供する。畠山の郎黨藤内四郎光治は、小唄にまで囃された太鼓の名手。これも亦主人とともにお供をしてゐる。

年久しく見慣れた比叡の嶽、鞍馬の山を後にして、青葉の加茂や紅葉の嵯峨に名残を惜しみながら落ちてゆく。名に負ふ木幡山を徒歩で越し、山柁原も過ぎゆけば、早や淀川も程近く網代にかかる魚さへも、我が身の上の前表かと物悲しい。運さへあれば又いつか世に出る折もあらうかと、道すがら鳩の森正八幡宮に祈誓をこめて武運を祈り、宇治の里にさしかかれば、芽花杉菜や蕘を摘む女子供の唄もしほらしい。男の子供は相撲をとつてゐる、勇ましいその姿を見れば、我が身もいつか又天下の武將と仰がれるであらうと勇んで道も急がれる。池の水草をかき分けて啼く蛙の聲も、「みなもとよし」と聞けば嬉しく、泉川をも打渡り、頼み甲斐ある山城の國斐の原に到着したのであつた。

〔山城斐の原〕

畠山小將監は御前に進み出て、申し上げた。

「拙者が召し連れましたる者は、藤内四郎光治と申す者、太鼓を打つに妙を得、戦場の駆引といひ、御陣中にての押太鼓といひ、萬里を響かす技を持つたる名人、それ故事ある場合の爲にもと、御代々お家に傳はる太鼓を預け、召連れました。彼めは斯波の左衛門が家臣藤内太郎が弟にござります故、此の者をば使者に立て、斯波が方に内意を通じ、一先づお頼みあるが宜しきかと存じます」と申し上げた。義教公は感慨に迫る思ひに涙ぐみ、

「われもさうは思ふものの、斯波が心からの諫言を用ひず、今このやうな身の上になつたらは、この世にある間はおめおめこの面を左衛門に合はす由もない。仁義厚き忠臣に見捨てられたのも、みな義教が武運の盡きたる證ぢや。」と言ひも果てず、御涙に咽びたまうた。

さうしてゐる所へ、年の頃十八九ばかりの若者が、編笠を脱いで御前近く畏り、頭を地につけて申し上げた。

「拙者は御近習に召使はれて居りました、一色大炊之介にござります。御壁書に背き不義を致した科、はた又、御目を掠めて女を引連れ駆落致した重罪は、遁るる術もござりませぬ。そ

れも決して色に溺れ、御成敗を怖れてのことではござりませぬ。元我等は一色が實の子にてはこれなく、元來は父母なき捨子。養父一色兵衛が拾ひ上げ、御目見得まで仰せ付けられ、總領として立てられました。その内實子出生致し、力となる養父の兵衛尉はこの世を去り、母に當る者若年の弟を總領と申し上げ、年長の拙者を末子と沙汰し、式祭日の御禮の場合にも、俄に末子の座に就かされ、只今御供の六角、畠山、山名を始め、肩を並べた諸朋輩に顔を合すも面目なく、いつそ一色が家を出で、實の親の所縁をたづね、この面目を雪がんと心に極めた折も折、思ひもよらぬ出來心より、御法度を背き、御所を立退きましたる次第。慈悲は上よりと申しますれば、何卒只今御免を蒙り、君の御爲に戰場にて、花々しく討死するがせめて生前の思ひ出と存じます」と、涙ながらに申し上げた。御大將は聞くより御立腹になつた。

「何を不届き者。以前に首を切り、手討に致す所を、入道めが助け落させたのぢや。汝は入道より大恩を受けてゐる者何とて左いふ者を召使はれうぞ。眞心があるならば、直ぐに立歸り、赤沼入道父子の中、何れかの首を取つてまるれ。その時は勘氣を赦し召使はう。ささ行け——」と仰せられた。大炊之介は承り、

「有難きお言葉。赤沼父子の首取つて、御憤りを安んじ奉らん。——これ朋輩達、若し仕損じて討死するとも、敵に半死半生の深手を負はせず置き置くべきか。その時は御勘氣御免のお執成頼み申す。」と言ひ残して御前を立去つたが、その勇猛心は頼もしかった。

大將は彼れが後ろ姿を、遠ざかるまでちつと見送つてゐたが、供の者を顧みて、

「いかに方方、彼れが詞は疑はしい。大炊之介が細腕で、赤沼父子を討たうなどは、まことに蠅螂が斧にも等しい事。出来かねますと、斷つて歎くこそ當然な筈を、無造作に討つてまるらうと、いかにも氣輕に立去つたは、思ふに彼れは入道から受けた恩返しのため、義教が様子を窺ひに來たと見てとつた。跡追ひかけて討つて來い。早く早く」と、仰せられるのを聞くと、や否や、血氣盛んな若者共は、氣の逸るにまかせ、何の考へもなく、「我こそ討取つて御門出の一番手を祝はう」と、早足を踏んで三人の者、藤内四郎を引連れて、腰を打振り打振り急いで追ひ駈けた。

後に思へばこれも亦、大將の拙い御運のしからしむる所であつたのだつた。

ただ一人、取り残された義教公は、暫し佇み、旅人が休むやうにして、道の傍らに寄つてゐ

ると、何處から飛んで來たのか、一本の矢が公の左の袂にブスツと立つた。——これは何事——と、呆れながらも引抜いて、かなぐり捨ててその跡から、引續いてはげしく矢が飛んで來てどうすることも出来なくなつた。取り敢へず御身を防がうと、笠を差しかざして受ければ矢は笠に突き刺さつて、刈残した一叢の薄が、枯野に立つてゐるやうになつた。

かうなつてはとても危い、遁れるだけだと覺悟をきはめ、此處の木蔭、彼處の草叢を頼りに、隠れながら逃げようと心を配つてゐられる處へ、赤沼、熊橋の率ゐる武者百騎ばかり、矢襖立てて連なり、一度にどつと攻め寄せた。

「ヤア義教、都よりつけて來たを少しも氣づかぬ愚かさよ。速かに腹を切れ。否といふなら鬪り殺しにいたすぞ」と、矢先を描へたその勢ひ、遁れやうもないところへ、藤内四郎は引返してきて、いち早く矢面に駈け塞がった。

「ヤアヤア小生意氣な眞似をする奴原。畠山が家來にて、どんと天下に響いた太鼓打の藤内四郎とは俺のことだ。定めし音にも聞いてゐるやう。太鼓も打つが敵も討つ、赤いと聞くさへ物臭い赤沼め、胸が悪くなり頭がびんびんと打つてくる。太刀も刀も無用、撥二本が干將莫耶の

名刀だ。一曲所望か、サア来い——」
と、あたりを睨んで立ちはだかつた。

「コリヤ出過ぎた相手。又向つて犬死するな。——それ遠矢で討取れ」と續けざまに手早く矢をつがへ、雨霰と射て放つ矢を、

「樂身太鼓の曲撥見て置け——」と、撥を両手に、切拂ふ有様は前代未聞の名拍子であつた。矢種を射盡した敵勢は、太刀引抜いて討ち寄せて來た。御大將も太刀振りかざし、共に防ぎ戦ふその隙に、藤内は太鼓を足で轉ばして近寄せ、天にも響けとどうどうと打鳴らした。さすがは名手の打つ太鼓に、「さては大事が起つたか」と、遙か遠くへ行つた以前の三人も、我れ先きにと引返し、大勢の敵の中に割つて入り、斬立て雑立て追散らす勇ましさは、まことに潔よい働きであつた。

熊橋犬二郎満景は取つて返し、藤内目がけて討ちかかつた。「何を馬鹿者、太鼓の撥の鹽梅見ろ」と、目といはず鼻といはず、無暗矢鱈に叩きつけ、太刀打落し、小股を拂つて俯伏せに取つて伏せ、到頭繩をかけてしまつた。程なく、三人も敵を散散に追ひ捲つて立歸つた。

「御事始めの御吉報。重ね重ねお目出度いことには、只今あちらで話を聞けば、赤沼入道は吉野山の古城に立籠つてゐるを、斯波細川が攻め寄せるといふ噂。この上は兩將が陣中に御入りあり、逆臣滅ぼす謀計が肝要。一刻も猶豫はなりませんまい」と言上すれば大將も、
「いかにもさうだ」と頷かれた。藤内四郎は犬二郎の背中に太鼓を括りつけ、
「御出陣の武者揃へに、味方を集める觸太鼓の、祕曲を打つて祝ひませう」と、撥輕輕と打鳴らし、大聲張り上げ、觸れ立てた。

「明日より吉野の山にて大合戦、攻め手の軍は三段續き、敵役は赤沼入道、お望みの方方明日は疾うからからからから、とんとんからからどんがら、つってんてん——」漸く天運到來し、地の利を得たる名將が、太鼓に連れて出陣するその姿はゆゆしい限りであつた。

〔吉野山合戦〕

大將軍義教公の、御出陣といふ報を耳にした斯波左衛門義將は、これこそ忠臣の面目も花のやうに開く折と勇み立ち、花の吉野に籠る大敵を血汐にせよと、赤沼が城の表門に向つた。

裏門には細川勝秀、三萬騎を引率し、前後呼應して貝を吹き太鼓を打鳴らし、鬨の聲をあげて攻め寄せた。軍の大將左衛門は、敵前に進み、矢防ぎの竹東際に馬を立て、

「清和天皇の後胤、足利の類葉、斯波左衛門尉源義將、攻め寄せる趣は赤沼入道父子謀逆を構へ、帝都を騒がし武將を弑し、天下を覆へさうとする罪科容赦ならぬによつて、討伐せよとの御詔をうけて發向、勅命といひ武命といひ、天罰は免れぬところ。速に腹切つて親子首を揃へて渡せよや——」と呼ばはつて、しづしづと乗り入れた有様は、いかにも威勢備はつた武者振だつた。入道も城門の矢切に現れて突立つた。

「大將を滅ぼし國家を奪はんと望むは、弓矢取る武士として當然至極。和漢にその例は數知れず。忠孝に事寄せて、先祖からの位牌知行に膝を屈げる臆病者、そんな態で入道一家を討たうとは鶯の巢を狙ふ鼠も同然。誰そ居らぬか、討つて出て追ひ散らせ」と、采配振つて命令すれば、城の中でも鬨の聲をどつとあげ、表の木戸を押し開き、切つて出たので、寄せての軍勢と入違ひ入亂れ、互ひに揉み合ひ戦つた。

その合戦の最中に、金峰山の方より若武者一人、卯花緘の鎧に身を固めて駈け來り、表門に

突立ち、大音聲を上げた。

「城内に物申す。我れこそは入道殿に一命を救はれたる、義教の奥小姓一色大炊之介久常。御厚恩忘れ難く、命の親の御合戦に、鎧一本の御役にもとお味方に馳せ参じた。門を開き城内に入れられよ」と呼ばはつた。聞きもあへず新判官、塀の上に現れ、

「ヤア吐かすな表裏者の思知らずめ。汝が不義の科により、お手討になるところを、父入道が情けをかけ命を救ひ逃がしたに、その大恩をふり捨てて、祕密の大事を何故藤内に告げ知せた。犬猫の畜生でも食物を與へれば恩を知る。蟲同然の奴どもをこの赤沼が味方にすることはならぬ、ならぬ。さつさと歸れ」と言ひ放ち、城内に入つてしまつた。

大炊之介もかういはれては取りつく島もなく、手持無沙汰に寄せ手の陣を見返れば、藤内兄弟三人が陣頭に控へてゐる。大炊之介はこれにきつと目をつけ、

「ヤア珍らしや藤内太郎。定めし話にも聞いたであらう。拙者御勘氣御免のお願い申し上げし所大將軍の仰せには赤沼父子の首を取つて來りなば、許しやらうとの御詔。味方と偽はり城に入り瞞して討たんと心を定め、門外までは來たものの、敵方も用心厳しく入れぬ故、致し方もな

い。方方偏へにお頼み申す。何卒斯波殿へ様子を語り、御執成にて御免を蒙り、さつぱりとして好き敵と引組み討死したい心底。何卒不便をかけられ、よきやうにお取次ぎ頼み入る、藤内殿——」と涙ながらに頼み入つた。太郎は聲を荒らげ、

「情知らずのやうながら、大事の攻口、小事に關はる暇はない。軍初めの味方に對して涙を流すとは不吉。どうあつても頼みたいなら餘人を頼むがよからう」と、愛想もなく答へて、そ知らぬ顔をしてゐる。あまりの事に胸突かれた大炊之介、

「さては、どう頼んでも聞入れてはくれぬか」と、どつと腰を落して歎いてゐるが、

「……敵も味方も聞いてくれ。我等ほど世に頼り少い者はない。まことの親は見ず知らず、捨子となつて拾はれし名字の親、一色殿には死別れ、主人には勘氣を受け、朋輩には疎まれる。このやうに不運なのは前世は何者であつたのか、何者の生れ替りでこの情ない身になつたのやら——」と、諸軍勢の見る目も恥ぢず、歎く有様は餘所目にも哀れであつた。

「エエ思ひ切つた。如何に軍はして見ても、我が身を侮りよき敵は相手になるまい。雑兵の五人十人討つたと何の益にならう。兩陣の眞中で腹搔破り、生前の悪業煩惱をさつぱりと晴ら

さう」と、腰の刀をすりと抜き、「この刀こそは生みの親より譲りの刀。是を添へて捨ててあつたと育ての親の物語。二度と差すべき鞘でもない。一緒に冥途の供をせよ」と、鞘の眞中を二つにさつと切り割つた。不思議や鞘は二重に鑿られ、中から父の筆跡と覺しき一通の證文が現れた。居合せた人人もこれを見て、不審な面持に鳴りを靜めてゐると、大炊之介は書付を取上げ、聲高らかに讀み上げた。

「なになに——五番目の男子に書き置く一通の事。抑も我等の氏は藤原、生國は河内の國、よつて家名を藤内と呼ぶ。久しく浪人に沈倫して五人の男子を儲く。一藝に名ある者は用ひられずといふこと無しとの本文を忘れず、藤内太郎より二郎三郎四郎まで、笛鼓を習はしたり。汝は襁褓にて母に後れ、父亦今死にのぞむ。孤兒とならんいとほしさ。路頭に捨てて養育の、又餘の親を待つ事もまことの親の情なり。共に孝行忘るべからず。藤内五郎忠治へ。慈父藤内太夫實治判」と、讀みも終らぬうち藤内太郎、二郎、四郎は立寄つて、見れば父の手跡に相違ない。

「ヤアそれでは在ると聞きながら、見ず知らずの末弟五郎とは、そちであつたか。」「兄々達か、懐しや」と、兄弟はしつかと抱き合ひ、慕ひつつ歎いてゐる有様は、誠にさもあらうと思は

れた。

城内でも、これを聞いたものか、

「さうと知つたら誘き入れ、疾うに討つて捨てようものを……、あれ諸共に打殺せ」と、聲に喚き立てると同時に、我も我もと木戸押開き、鎗先き揃へて討つて出た。

いつの間はどこから來たのか、藤内三郎は肩先きから手先きまで荒繩に縛められて、陣中に跳り出した。

「城の大將開き給へ。先日古川の館にて兄の二郎に引括られた藤内三郎武治なり。情知らずの兄めが生かしもせず殺しもせず、見る通りな放し飼ひ。思へば思へば残念千萬。繩をほどいて下され、兄二郎めが首取つて、この無念を晴らしたい。どうぞどうぞ」と呼ばはれば、城に籠つてゐた藤冠者は「俺にまかせよ」と言ふなり、すつと飛んで出て、「ヤア三郎か、珍しい大事な味方一人でも縛られてゐるを見るは、口惜しい。サア働け——」と繩を解きにかかつた。三郎は「忝い」と言ひながら、腕首をぎゆつと掴んで前に引寄せ、どんと地面に押し伏せ、「一時の出來心から兄に背いたを後悔して、瞞しにやつた計略。馬鹿者め。直ぐにこの繩頂

戴しろ」と、罪人括りに繩を掛け、「兄弟が仲直りの土産にする」と、廣言吐いて、味方の陣に追立ててゆくのは、まことに心持よい働きであつた。

第五郎は兄の三郎に入替り、「今までは大炊之介、今日からは藤内五郎。四人の兄は親の躰けた亂舞の藝、我等は自分で工夫した棒の一手を覚えてゐる。我と思はん者あらば、拙者が棒先きの中つて見ろ」と、大聲に叫んで、白銀の筋金の入つた櫓の棍棒を小脇に搔込み、敵に向つて進み出たので、四人の兄弟も、「我我の一藝を揃へて軍の目を覺してやらう。それぞれ棒に合はして囃せよ鼓、吹けよ横笛、打てや太鼓、討つは敵——」と戯れながら、先づ合戦の一聲を奏した。

「これは花花しい奴共だ。ソレ討取つて手柄にせよ」と敵も勇みたち、走井久七、久八、羽根田の頼藏、根地の大藏、栗生の熊藏、石坂九郎の面面、得物得物を提げて、打つてかかつたので藤内五郎は、棒の秘術の水車、横車、腰車、片手輪違ひ、諸輪違ひ、一文字、十文字と曲棒を使つて、拂ひ落し掛け落し、百手千手と技をつくし、數多の敵に駈け向つたのは目覺しい働きだつた。この妙技に敵勢は胸板、胸骨、眉間、眞甲を打割られ、左右にばたばたと倒れた。

「時分はよし、それ乗つ取れ」と、裏門よりは細川勝秀が大軍を指揮して亂入し、敵を堀際
 堀際に追ひつめ追ひ寄せ、一人も残さず討ち止めた。ところが肝腎の赤沼親子を見失ひ、此處
 や彼處と隈なく捜し廻つてゐると、俄に起る花の吹雪に、中川が亡魂の雪女、怨みの一念に鬼
 女となつて現はれた。

「あら恨めしや、如何に赤沼、たとひいづくに隠れうとも助けはやらぬ。よし吉野山に隠れ
 ても、春ならば花を尋ねて山廻り、わが最期の折のやうな寒風荒む冬ならば、冴え返つた空に
 雪氣の雲の、雪を誘うて山廻り、めぐりめぐりてどこ迄も、附纏ふ輪廻の恨み思ひ知れ」と、
 道親子を引立て引立て、御大將の御前に連れ出し引き据ゑ、「猶ほ行末は源氏の白旗白雪の守
 神ぢや」と言ふかと思へば、雪を散らすが如くに、その儘姿は消え失せた。

御大將義教公は殊の外のお悦び、悪人赤沼親子の頭を刎ねて木に懸けさせ、勝鬨を三度あげ
 させ、三三九度の祝ひの盃を、斯波細川の兩將に賜り、藤内五人の兄弟には、五ヶ國の御加増
 やら、御褒美やら、段段に下された。

兄弟達は悦んで、尙も樂車を打つて囃し立てる。一同もこれにつれて囃し立て、茂りに茂る

松竹の變らぬ世もよし、人もよし五穀もよし、仕合せよしの今年だと、祝ひ合つて凱陣した。
 まことに泰平な、目出度い春のきざしであつた。

心しん
中ちゆう
宵しゆう
庚かう
申しん

〔上巻〕濱松の淺山藩士坂部郷左衛門の小姓に、山脇小七郎といふがあつて、其の腹變りの兄を半兵衛といひ、五歳の時から大阪の八百屋へやられた。それが父の十七年忌で歸郷した時、測らずも殿様のお料理を調達する。

〔中巻〕半兵衛は其の歸途、女房の實家である島田家を、山城上田村におとづれた。すると女房のお千代が大阪から來てゐるので、事情を聞いて見ると、半兵衛の不在中に、姑去りにされて歸つたのだといふ。病父はお千代が三度目の嫁入りであり、これが不縁となれば一家の不面目だと歎く。半兵衛は堅く決心し、同伴して歸阪する。

〔下巻〕八百屋の家庭は、なかなかうまく行かなかつた。お千代は近所の家に預けられてゐたが、到底和熟し得ないと判明したので、姑を説いて一旦家に入れ、しめし合せて生玉の馬場先き、勸進所の前で心中を遂げる。

上の巻

〔濱松、坂部宅〕

花のお江戸へ六十里、梅の難波の大阪へも六十里、この二つの都會の距離は百二十里、ちやうどその中間にある遠州濱松の、御城主である淺山家の殿様は當時御在國中であつたので、御城下の商人達までが活氣づき、商賣に油斷なくはげみあひ、武士は又武術錬磨にいそしみ、隔日のやうにお鷹狩が催されてゐた。殿様がお好きなので家來達は勿論のこと、犬までも油斷してはゐられないといふ有様だつた。

この淺山家に代々仕へた家柄で、弓頭を勤めてゐる、坂部郷左衛門は今年六十歳、顔には皺のよつた老人ではあるが、夜晝となくお側去らずの、お氣に入りの家來であつた。今日も例によつて、鷹狩のお供に立つて留守であるが、大手の見附の處にあるその邸へ、鷹狩のお歸り

に殿様がお立寄りになるといふ先觸れが、午時分に狩場からあつたので、留守宅では給仕人や若黨はじめ、出入りの町人までが集まつて、急場の事とて大さわぎ、殿様をお通し申すお成座敷の畳替へやら、床の掛物をなほすやら、お庭の掃除も大急ぎにしなければならず、お款待にさしあげる薄茶を挽くお茶坊主は、引木にもまれるといふ有様。「アアさうだ、忘れてゐた」と門に盛砂をするために、小者は箒をもつて轉手古舞をする。臺所は臺所で、青物が一杯に廣げられ、魚や鳥が山とつまれてゐる。お献立は三汁九菜ときまり、もしや魚がいたみでもしてゐないかと、吟味役は調べる。こりや目出たいといふ鯛を三枚におろす。山葵は八百屋の受持ち、お料理を盛る南京皿や、蒔繪をした道具を持出すといふ、善盡したるお款待の仕度で忙しかつた。

坂部郷左衛門の組下の、次男坊である金田甚藏、岡軍右衛門、大橋逸平の面々、いづれも血氣盛んな者ども、頭の結振りは氣取つた立掛のんこで立派ではあるが、本職の武藝の方は、ともすれば忘れ勝ちな當世風の武士三人、打揃つて勝手見舞にやつて來た。

「やあ誰方も御苦勞、御苦勞。今日は殿様がお鷹狩のお歸りに、こちらへお出でなさるといふ

こと、不意のことで嘸お忙しからう。お料理はもう出來たか、——そりや早い。我々も今日は幸ひ非番だから、お手傳ひ申しませう。なに、遠慮は御無用だ」と口々に言ふ。
その時座敷の方から、小姓の山脇小七郎が、生花の屑を花盆に入れて、若衆盛りの水の垂れるやうな美しい姿で、しとやかにその場へ現はれた。

「これはこれは、ふだんからのお馴染甲斐に、揃つておでかけ下さりまして、主人郷左衛門もさぞ喜ぶでござりませう。今のお殿様は御先代様とは萬事お違ひで、何かにつけてお氣輕、今日も突然のお成りといふのに、主人はお供で留守ではあり、私共ばかりで困りきつてをりました。お掃除なども大急ぎで、そこそこにしてありますし、書院の筆架や飾り石の置方も私の計ひ花、も私が活けましたが、未熟ながらこれも御奉公、さぞ法に適つてもをりますまい、御内見下さつて、どうぞお直し下さりませ」と、詞も出過ぎず謙遜で、行儀作法もしとやかな其の振舞ひ、若衆の品のよいのと饅味噲の味は、どうしても武家屋敷に限る。金田甚藏、岡、大橋の三人は、

「いやどうしてどうして、美しいそなたのお手際なら、何で行届かぬ所があらう。何をさせ

ても、そのないそなただが、たつた一つの難がある。その美しい姿をして、人の氣を散々もませておきながら、ピンシヤンとして愛想がない。それが玉に疵と申すものだ」などと、その忙がしい最中に、額越しに睨んだり、袖をひいたり、そつと手を握つたり、若衆のやみつたらしく、あかぬけのしてゐない邊が、さすがに田舎じみてゐる。

坂部郷左衛門は華奢風流を好む當世風を、強ひて戒めるといふではないが、殿様の御質素を自然と眞似て、木綿の羽織に紺の股引といふ粗末な装で、鷹狩りの装束も勇ましくすたすたと歸つて來た。

「家來ども掃除は出來たか。ヤアどなたも御見舞有難う。イヤもう年は取りたくないものだ。岩松村の岩水寺の門前で、殿様からお暇を頂いて、ほんの一足ですぐ歸らうとは思つたものの、氣ばかりあせて足は進まず、思ひの外に手間どつた。だが殿様はもう一拳遊ばしてゐらつしやるから、急ぐことはないぞよ。まづ献立を見ようか」と、長々と書付けてあるのを、半分讀んでびつくりした。「こりや、何ぢや。殿様の御膳は一汁三菜だと、前に言つてよこしたのに、三汁九菜とは、これは又贅澤な。俺の身代を料理代でつぶさうといふつもりか。こん

な献立を誰が指圖したのぢや」と、大變な苦り方で、藥罐頭から湯氣を立てて小言を言つた。小七郎はものしづかに、

「憚りながら申し上げます。この献立は皆様のお指圖ではござりませぬ。二三日前からお長屋に逗留致してをりまする、大阪の住人にて、靱油掛町の八百屋半兵衛と申す者、もとはこの遠州生れで、私とは腹變りの兄でござりますが、仔細あつて五つの時大阪へ行き、町人の家へ奉公致し養子になりました、今の親は八百屋伊右衛門と申します。實父の山脇三左衛門は、私の生れた年に亡くなりましたから、當年は十七年目、その親の年忌でお墓参りかたがた、弟の私のこともなつかしく、又御主人へもお禮申し上げたいと、唯今逗留致してをります、此の兄半兵衛は、商賣は八百屋ではあり、殊に料理の心得もござりまするので、丁度幸ひと今日のお献立をさせましたは私の不調法、申譯もござりませぬ。お目出たい折柄でもござりませぬ、どうか御氣嫌をお直し下さいまして、兄にも逢つてやつて頂きたく存じます」と、恐入つてお詫をした。これを聞いて主人の機嫌もやや直つたので、

「コレ半兵衛どの、丁度よい折お目見得をなさい。お献立もしかへねばなりませぬから、早

く早く」と呼び立てた。

その聲を力にして兄半兵衛は、心の底は武士氣質で、しつかりはしてゐるが、三十餘年も町人生活をしてゐるので、振舞もとりなりも料理人になりきつて、料理袴をつけ、御主人の前へ出るといふので氣おくれして、臺所の板敷にけつまづくやら滑るやら、やうやう這ひ出て手をついた。

「ツイ御家風もわきまへませず、お献立を致しましたは重々不調法でござりました。お使ひにて一汁三菜といふお言附ではござりましたが、大阪では藏屋敷のお留守居の役人方の御馳走にも、随分粗末なもので二汁三菜、結構なものには限りもありませぬが、來朝の朝鮮人への饗應で御堂へも折々雇はれまして、七五三、五五三、山影中納言家の料理法をはじめ、料理一通りを存じてをりますので、つい思ひ過しを致しました。何といつても御大名の召上りもの、まさか一汁三菜とは粗末すぎる。これはきつとお使の閑誤りでござりませうと、入らぬ念を入れましたは猶ほ不調法。はい畏りました、すぐさまよい具合にしかへまして、お氣に入りますやう松茸や竹の子を生その儘の味はひに料理致しませう。それが祕傳にござります」と、話し振も

料理と同じやうに、至極鹽梅よかつた。郷左衛門も笑つて、

「ムム、山脇三左衛門の倅なら、俺のためにも家來筋だ。親の墓参りとは感心々々。小さい時から他國に育つたのでは、當御代の慣はしを知らぬのも尤も。料理は勿論のこと、衣類でも道具でも何でもかでも、無益の贅澤は大のお嫌ひ。上方では、さうした噂は聞かぬか。去年の十月高師山のお狩場で、俺の同役佐野文太左衛門が、始めてお鷹野のお供をした時、縮緬の羽織を着てゆかれたを、殿様がじろじろ御覽になり、縮緬では風にびらびらして困るであらう。二度とは着るな。代りにはこれをやらうとおつしやつて、御手づから下さつたのは木綿の羽織。さすがの文太左もはツと赤面した事であつたが、後でつくづく推量してみると、お供に立つ文太左が縮緬の羽織を着るわけがないから、きつと前々から殿様とお打合せがあつて、大勢の家來衆の見る前で、わざと木綿の羽織を下さつたのは、表向きに美麗、贅澤をおとめになると角が立つので、自然に皆が儉約するやうにと、蔭ながらの御意見だつたと思はれる。——その深いお考へも悟らずに、家中の小生意氣な次男坊どもの此の頃の風を見るがよい。木挽町（森田座）や堀町（中村座）の役者から、釣を取るやうな贅澤な綺麗な着物を着て、身分の

程もわきまへず、一途に殿様はお吝いお吝いと、勿體ない蔭口をぬかしをる。たとひ綾錦を召されてもお大名、木綿着物を着られても、お大名はお大名ぢやないか。齋藤別當實盛は、最期の時には錦の直垂を着てゐたが、譜代の御主人源氏を捨てて、平家方へ返り忠をした武士、心の汚れた襦袢同然ぢや。それに引きかへ佐々木源藏は、二君にも仕へず襦袢の着物を着しながら、頼朝が世に出るまで節義を持したは、心に錦を着たともいへやう。今の武士の美麗を好むは實盛で、佐々木の遺風をお慕ひなさる殿様のお心持は、下々の者がゆつたりと世を渡れるやうに、商賣のしやすいやうにとの、有難い思召からの御儉約ぢや。武士は無論のこと。町人のお前達まで此の御恩は忘れまいぞ。朝夕の御膳部も一汁三菜、お酒も數をお定めなさつて三杯づつ。だから今日の御馳走も、お粗末な程お氣に入るわけだ。献立も書くに及ばぬ。コレコレ飯は赤まじりの古臭いのをその儘炊かせ、汁はかき立汁に小菜の浮かしてよし。向うづけにはおろし大根に鰯、焼物は室の酢入り、それも二つ切りで結構。引いて古茄子の香の物。サテお平は何にしよう。——オオそれぞれ、家來に持たせた山の芋がよからう。ここへ持つてこい」と呼べば、五尺ほどもある山の芋を、中間二人で荷つて来て、料理場の板敷へ菰から出し

てかき乗せた。半兵衛はそれを見て横手を打ち、

「さてさて、大きな山の芋だ。御當地の名物かは存じませぬが、こんなのは初めて見ました。大阪で見世物にでも出したなら、大金が儲からう。第一お家のために縁起がよい。何故かと申せば今日殿様のお成りにて、旦那様も追付け御出世なされませう。それ、山の芋から鰻になると申すではござりませぬか」と、お世辭たらたら、鰻の油を舌にのせたやうに、はやし立てた。

「イヤそのことそのこと。運がよいといへば今日は又、手下の百姓どもが俺の家へ殿様のお成りと聞きつけ、今歸つて来る道でお料理になさりませといつてくれたのだ。それを幸ひ、今日の御馳走はこれだけで十分。お前の自慢の庖丁で、随分うまくつくつてくれ。頼みました」と言つてゐるうちに、はや表門を開ける門の音がする。

「ソレ殿様のお成りだ」と、どさくさする。郷左衛門も次の間で袴を改め、お迎へに表へ出る。山脇小七郎、岡、大橋、金田等も續いて、急いでお迎へに行く。

半兵衛は料理で忙がしかつた。何をするにも自分一人で目の舞ふやう、薄刃の庖丁を押取つ

て、五尺の大芋を三寸ばかりに切り整へ、皮を手早くむき、ちよきちよきと細かく切つて、葛醬油の鹽梅に氣をつけ、煮方もいそがしいが、殿様のお顔も拜みたしと、座敷口から覗いてみると、家來と同じやうに股引がけで、上段にお坐りになつてゐる。一間隔てて近習の人々をはじめ、鷹匠、犬引、列卒、足輕など、あまり大勢で玄關の小庭にもあふれて、臺所口を通つて長屋々々にいたるまで、休息場所になつてゐる。

奥の間では御食事を早くといふので、主人の郷左衛門が、お膳を目八分に捧げて持つて出る。つづいて大勢が、思ひ思ひに禮儀正しく給仕する。お汁のお替り、御飯のお替り。初献の肴は鮪の足一切づつの引重箱、二献めも御機嫌よく召上られ、平の蓋をお取りになると、臺引物として加太布(わかめ)が出る。定めを通り御酒は三献、吸物は穀蜆のおつゆといふ、粗末な御馳走であるが、殿様はかへつてお喜びで、納めの盃になり、郷左衛門にもお盃を下されて、首尾よくお食事は終つた。

郷左衛門は料理場に立ちほだかり、半兵衛を睨みつけ、

「今日の御馳走は芋一種でよかつたのだ。でつかい所を、お目にかけるのが何よりの御馳走

だつたのだ。だいたい五尺に餘るほどの大芋を、どのやうに切りをつて、一寸足らずのものにしたのぢや。言はうやうない不屈き奴。手打にする奴ではあるが、他國の人間でもあり、殊に今日は殿様のお成といふ、目出たい日故ゆるしておくが、屋敷の内におくことはならぬ。とつとと出て行け」とかんかんになり、詞少なに、恐ろしい權幕だつた。

半兵衛はちつともさわがず、

「これは旦那様のお詞とも覚えませぬ。今日の御料理は随分と心をつけまして、思ふ存分出來しましたと、私としては自慢の料理、それを褒めては下されずかへつてお叱りとは、思ひの外御沙汰でござります。總じて貴人や身分の高いお方には、このやうな珍らしい物は、お目かけぬのが料理の習ひ。何故となら、大名高家といふやうな方々は、萬事鷹揚でゐられる故一度御覽になりますと、どのやうな珍らしい物でも澤山あるものと思召し、憐國の大名方とお出合ひの折にも、自分の領内には珍らしい山の芋があるなどと、お國自慢でお話なされる。と餘所からそんなものがあるなら欲しいと御所望になる。左様の節にはどうにもなりません。國中をたづねてもあの様なのがごろごろあるはずはなし、つまり殿様を嘘つきにしてみましたの

がおちでござります。そこを案じますればこそ、いつどこにでもあるやうに料理するのが、旦那様のお爲めと思ひましたが、それがお氣に入らぬとあつては私の不仕合と申すもの。さあ、どうにでも御存分に遊ばしませ」と、愛想もなく言ひはなす處が、昔忘れぬ武士氣質でもあらう。郷左衛門は言ひまくられて、開いた口が塞がらず、

「ムム、成程。イヤ成程。こりや俺が誤つた。あやまる、あやまる。お前の理窟を、そのまま殿様にお話し申すのが又御馳走といふものだ。ヤレヤレ、山の芋で足をつくといふ譬の通りこれは俺の大しくぢり。」

と、どつと笑つたその折に、早くも「殿様のお立ち」と、お供廻りが毛槍を振り出す。つづいて臺笠立傘大鳥毛、乗物も出て、引馬は嘶く。郷左衛門も今日の御禮のため御城内までお供すると、お輿につき添つて、日の暮れぬうちに御歸城なさるやうに、氣をせきたてて、入日と共にお立ちになつた。

殿様御歸城後の、座敷のあと片附けは侍の役、庭の締りをするのは中間小者の役と、それぞ

れに立別れて仕事を始めた。臺所に残つたのは半兵衛一人、庖丁や眞魚箸や俎板を片つけて、先づ一休みと煙草一服、鐵拐仙人のやうにのんびりと煙を吐いて一息ついた。そこへ家中の次男坊どもが、ばらばらと傍近くへ立寄つた。

「拙者どもは郷左衛門の組下の弓役の者、お身は山脇小七郎の兄上とな。それならば早速ながら頼みがある。弟分のとりなしを頼むのも馬鹿らしいが、あの小七郎の美しい前髪姿には、心底爪先から——を送つてゐて、その紙代ももう五百目ばかりになつてゐる。自分の身代ありつたけを紙につかつてまで眞心をみせても、情のないはあの小七郎これ兄貴殿、是非とりもつて貰ひたい。軍右衛門が両手をついてまで頼むのだ。これこの通り。拜む、拜む」とせきたつて言ふ。甚藏逸平も黙つてゐず、

「コリヤ半兵衛、その頼みを承知したら面倒だぞ。ほかにも思ひ込んでゐるものがある。紙代などは知れたこと、あの君故には一貫五百といふ大金で、外郎つんで實意を見せた此の甚藏だ。弓矢八幡刀にかけても、俺にくれなけりや承知せぬ。」

「イヤイヤ、この逸平が是非とも貰ひうけねばならぬ」と、耳の傍で嚙みつくやうな大聲を

あげ、悪臭い息を吹きかけるので、眼もくらむばかりだった。

半兵衛は煙管もはなさず、大胡坐で、

「御城下の習ひで、どこでも——は御法度になつてゐるはず。よろしとお許し申したら、弟の首はござりませぬわい。」

「イヤ、當國では女にたはむれるは、下々にいたるまでもきつい御法度だが、——
向にお構ひない。性根をすゑてこの三人の中、どれへでもくれると言へ」と、がやがや云つてゐる所へ、小七郎はこれまでに貰つた戀文を、一抱へ持つて出て、半兵衛の前に置き、

「兄者人の前で恥かしいことながら、かうなつては何も隠されませぬ。數ならぬ私をかほど御執心下さるとは、振袖を著た若衆にとつては一代の面目、有難いのは山々ではござりまするが、一人ばかりか、あちらからもこちらからも、澤山文が参ります、その儘返すも情知らずと言はれうかと、受取るを受取つても、一通も封はきりませぬ。それがせめてもの皆様方への義理立て、誰方様にも従ふ心はござりませぬ。兄半兵衛の知つてゐられる事ではなし、この文はこの儘にお返し申します。誰方様も私の事は、思ひ切つて下さりませ」と、若衆の意氣を見

せた詞のやさしさ。

「その心持になほ惚れた」と三人が、いよいよやらしくつきまとふ。半兵衛は見るに見かねて、

「ハテサテわけの分からぬ方々。姿こそ町人ながら、心の底は武士氣質のこの半兵衛が目利して、——ませう。コレ、小七郎、着物をかへて来い」と、自分の氣

持を目顔で知らせる。小七郎は「アイ」と心得て部屋へはひつた。

半兵衛は澤山の戀文の上書を読んで、ハハア、どれにも貴方様方のお名が書いてある。がこの一括りの手紙の上書は、小一兵衛とある。これは誰でござりませう。御存じないか」と聞いた。三人は口を揃へ、「その小一といふ奴はこの家の中間だが、へへエ無禮な中間め。奴にしては生意氣にやりをつたわえ」とあざ笑ふ。「イヤさうではござりませぬ。——頼といふものには、身分の上下はござりませぬ。この小一兵衛も此處へ呼出しておき、——頼む一人と致しませう。」

「イヤイヤ、身分の低い奴、我々と同座させる奴ではない。殊に今は留守でござるから、先

刻から顔も見せぬ。そんな奴には用はない。」といつてゐる所へ、山脇小七郎は、白小袖に淺黄の上下をつけ、覺悟をきめて出て來た。半兵衛は取敢へず肴臺の三方に、拔身の刀二刀を載せて弟の前へ置き、「——、——は第一人。誰にあげてもあとの三人には恨みが殘る。その上にこの兄も、他國に住つてゐるからは、弟の行末も氣にかかる。しかも厭とは言はせぬ程の御執心で、歴々のお待が町人風情のこの私に、手を下げてまでのお頼みでは、退引はなりません。それ故弟にも覺悟をさせ、死装束を致させました。——、未來

までも小七郎を可愛がつて下さるお心算なら、この場で刺違へ、邪魔のはいらぬ未來にて、ゆつくりと——になつて頂きたい。サア弟はさしあげる。どなたなりとお覺悟の上、契約して頂きませう」と、三人を睨みつけた。誰にも意外な、死ぬ覺悟での盃ごと、死装束に恐れをなし尻込みして、「えへんえへん」と、三人は咳にごまかし、ぐづぐづと誰も返事をする者もなかつた。

その時、御門脇の長屋から、紺のだいなしに、裾をぐつと尻七の圖まで引きからげ、一振り振つて飛出した男がある。この男こそ——
奴小一兵衛で、三人の侍の

鼻先へ、尻をつき出しかつつくばつて、

「兄御半兵衛様の目の前で、こつ恥かしい事ながら、——、お定ま

りの二合半の飯も喉につまり、ぎちぎちと食べられぬ程熱心でござりまする。今日はまた有難いこと、——、未來でこのやつがれめを、——して下さるとは、有難

いと申さうか悲しいと申さうか。いやはやもう、唐辛子五つ六つ喰つても、こんな嬉しい、熱い涙は、出されませぬでござりまする」と、いきなり白刃を取つて小七郎を引寄せ、今や刺し殺さうとするのを見て、半兵衛は飛込んで、

「コリヤ、氣が違つたか小一兵衛」と、二人を左右へ引分けた。小一兵衛はあせつて、

「コレサ上方の旦那様。御主人に仕へ糠味噌汁を頂いた御恩にかへてまで——お若衆に

はここで死んで見せねば、心意氣が見えませぬ。どうぞ死なせて下さりませ」と、立上るのを引伏せて、

「男の意氣は見た。男はかうありたいもの。小七郎に心底から惚れたのは、其方一人。争ふ者があればこそ、大事の弟を殺さうとまでしたものの、もう争ひ手もない今なれば、山脇半

兵衛があらためて挨拶する。この後は兄分あにぶんになつてくれませうやう。」

「ハイ」と、喜んだのは小一兵衛。「お侍方と同座も出来ぬこの奴やつこめが、武士に劣らぬ魂たまゆるこの美しいお若衆の、兄分になれるとは、こりや嬉しい嬉しい。勿體もったいなさすぎる。ちよつとこの約束やくそくの手附てつけに、見苦しいはござりますが、かうさせて下さりませ。半兵衛様も氣をきかせておとがめ下さりますな」と、

真黒な紺のだいなしと、白無垢しろむくのおとぎ小七郎と對照して、誠に珍らしい觀物みぶつであつた。

岡軍右衛門は倍氣おんきのほむらをもやし、

「コリヤ下郎め、見苦しいわい。止めろ止めろ」と肩をとつておしわけのを、

「コリヤ何をなされます。ムムわかつた。殿様のお取持の御酒が少し過ぎましたな。ムムよしよし。さすがは二腰ふたこしたばさむお侍だけあつて、お心掛こころかけの程は感心々々。柔術や柔術のお稽古けいこをなされるのか。無調法むてうぽうながらお相手申まへまへませう」と、座興ざきやうにまぎらし、すつと寄つて一當あてあて、引つかつてうんと投げとばした。

「ハハハハハ。こりや兎相うさぎあひでござりまする」と、空そらとぼける。見てゐる甚藏逸平しんざういつへいもたまり

かねて、一緒によつて胸ぐらをつかみ、

「無禮千萬むれいせんまんな丁稚ちやぢめ、傍輩はなはだをなぜ投げた。仕返しには砂を嚙かませてくれるぞ」と引立てた。

「扱あつか々お心掛こころかけのよい。お前方まへまへも柔術や柔術の稽古けいこか。どりやお相手を致いたませう」と立上りざまに、二人をはつたはつたと蹴返せば、板敷いたぢから眞逆まぎやく様にぶち落ちた。

「ハハ、コリヤ又御兎相ごうさ致いたしました。御免ごめん々々」と言ふのを、機はしにして三人はぐづぐづ立上り、

「エエとんだ所へ給仕たまひに來て、酒の酌しやくをして尻しりをふまれ、えらい目にあつたわい」と、袴はかまをはいてゐるのを幸ひに、腰の痛さをかくしながら立歸つた。

半兵衛はぞくぞくするほど小氣味こけいよく、

「さてもさても技倆ぎりやうの勝れた小一兵衛。私は遠くにゐることゆゑ、たよりのない弟を、何分ともに宜しく頼む。二人の事は今日の料理の御褒美ごほうびに私から旦那様に無理にでもお頼みして、天下晴れての——はきつと結ばせる。その仲人なこうどにはこの半兵衛、八百屋冥利やちやうり、八百萬やちやうりの神様に誓ちかを立たてます」と。

かくして結ばれた小七郎小一兵衛の仲は、神かけて末たのもしいものだつた。

中の巻

〔上田村〕

「——五月雨ほど戀慕はれて、今は秋田の落し水、軒の玉水とくどくどざれ、しげんぐどざれば名の立つに——」といふ流行歌も、丁度身にあてはまる、八百屋半兵衛の女房お千代の身の上ではあつた。

山城國上田村は、有名な井手の里の、玉水の井にも近い。この村の島田平右衛門の家は、この村でも庄屋と並び稱せられる程の豪家で、茅屋根葺も立派に聳えたつてゐる。大勢の下女どももの並んでつむぐ綿車の廻りのよいやうに、金廻りもよく、庭には五穀がいく束も積み重ねてあり、目出たいあの蓬萊山も、此處かと思はれる程の老百姓であつた。

平右衛門の妻は去年の秋、霧にさそはれて亡くなつて、あとには残つた娘が一人。が總領の

娘おかるには攝津國島飼から養子を貰ひ、妹娘のお千代も大阪でれつきとした掣を取つてゐるから、父平右衛門も至つて氣樂で、年寄り仕事の、自分の田畠も今は世話をやく必要もなく、一切の事は掣に譲つたから、苦勞の種は何もなくなつて、張合ひなさに俄に死病にかかつたのであつた。姉のおかるは病人の側に付きつきりに附いてゐるので、臺所では下女どもが、

「何と、今朝から仕事も随分したではないか。少し休ませう。お竹どん、お鍋どん」と呼び合つて、骨休めに思ひ思ひに遊びに外へ出て行つた。主婦のおかるは、親もすやすや寝てるのを幸ひに、氣忙しく見廻りに奥から臺所へ出て來た。

「これこれ、臺所には一人もゐぬではないか。連合の平六殿は、淀川筋に開いた新田のごたごたで訴訟のため、大事の病人もさしおいて京に上つてゐるし、男どもは男どもで、皆田へ行つて留守でもあり、一人ぐらゐるは残つてゐればよいものを。エエ憎らしい女どもぢや。私の見てゐる所だけは、いかにも働くやうな様子をしながら、ちよつと見ないともうこの始末。大事な大事な主人の病氣に、薬の一つも温めようとはせぬ者たち。エエ女中なんといふものは、役に立たぬもの。誰か來て圍爐裏の下でも焚きつけぬか。次郎よ、次郎よ」と呼び立ててゐる所

へ、駕籠が門口へかきすゑられた。

「もしもし、大阪の新靱町八百屋伊右衛門様の所から参りました」と、駕籠昇が戸をあけると、中からしよんぼり力なく出て来たのは、身につもる苦勞故に顔は若いに似ず皺がより、縮緬の二重廻りの抱帯をして、涙顔さへものあはれな、妹のお千代であつた。

「確かにお届け申しました」と言ひ捨て、駕籠昇は後をも見ずに立歸つた。

親の家とは言ひながら、去られて戻つた女の身には、なんだか敷居も高いやうに思はれ、中へ入ることも氣がひけておづおづと、佇んでゐる様子を、姉は目早く見付けて、

「ヤアお千代ぢやないか。歸つて来たか。アアきつと病氣の父様のお見舞に來たのであらう。よく来てくれました。餘所の家へでも來たやうに、なんの氣がねをすることがあるものか。駕籠の衆にも酒でも吞ませて歸せばよいのに。早く呼び返したらよからう」と言つても、妹はただうつむいて、しくしく泣くばかり。姉も思はず引きこまれて涙ぐんだ。

「オオお前の泣くのも尤も。父様の御病氣も早く知らせてあげようとは思つたが、父様のおつしやるには、なにこの病氣で死にはせぬ。機嫌のとりにくい舅姑を持つた、お千代のこ

と、掣の半兵衛も丁度忙しい時分であらう。たとひ病氣と知つても自由に來ることも出來まいから、心配をかけさせるのも氣の毒。知らせてはならぬぞ。」とお言葉ゆゑ、それをたつてと言はれもせず、それで高麗橋の伯母様や常盤町へも知らしてない。だがもう心配することはない。京都の御典藥に診て貰つてからは、藥の效目もはつきりと目に見え出し、今朝もお粥を中ぐらゐる茶椀に、三杯もお上りなされる程ぢや。お醫者も、病氣は大丈夫、癒してやる」といつて下さるほどだから、もうお癒りになつたも同然。殊に思ひがけないお前の顔でも見なさつたら、大喜びでいよいよお癒りなされませう。嬉しい嬉しい。さあ早く、お目にかかつたがいぞや」と言はれて、お千代は、

「エエ父様は、お病氣か。ちつともさうとは知りませなんだ。いつ頃から御病氣でござります。」

「エエ何ぢや。それを知らいで、お前は何しに歸つたのぢや。何が悲しうて、泣くのぢや。」
「オオ恥かしい。また離縁されました。」と、顔を袂に押隠しては泣き入る妹。姉も驚き、氣も顛倒した。

「ナウお千代、長い人間一生の中には、そりや三度も五度も嫁入り嫁入りする人もないではないと聞いてるけれど、そんな事は手本にはなりません。恥かしい恥かしいと口で言ふばかりでは、本當に恥を知つたとは言はれぬぞえ。お前もこれで三度目の嫁入り。尤も始めの夫の道修町伏見屋の太兵衛殿は、人柄に落付もなく身代をめちやめちやにして、どうにもかうにも仕様のない事にしてしまひ、飽かぬ別れをし、その次の夫には死別れ、お互ひにどが悪いわけではないが、世間はそれでは通らぬ。みなお前の辛棒がたらぬゆゑ、離縁されたと評判され、今度の嫁入りもその中に追出される事であらう、どんなことがあらうとも、島田平右衛門の娘の風下になるてはならぬ、悪い風がうつるからと、娘を持つた親達が寄合つての茶呑話には、きつとお前の噂ばかりしてゐるほどぢや。お前もその邊のことはよく承知の上で、たとひ火に焼かれ、骨をくだかれても、きつと今度は歸りますまい、オオよく言つた、決して歸つてはならぬぞと、念に念を入れて行つた今度の嫁入りではないか。それをおめおめ歸つて來るとは、何といふこと。父様がこれをお聞きなされたら、さぞ悲しうてどれ程お歎きであらう。お顔を見せるにも折がある、待つてゐや、決して大きな聲では話しもしやんな。して夫の半兵衛から、離

縁状を取つて戻つたか」

「イエイエ、夫の半兵衛殿は父御の十七年忌お参りに、先月から、生れ故郷遠州濱松へお歸りなされたので、大阪へ歸つて來次第に、お前の道具と一緒に、離縁状は後から送る、まづお前だけは歸るやうにと、何も譯はおつしやらず、お腹にはもう四月の子供さへあるのに、姑様が無理矢理に手を取つて、駕籠へ引きずり乗せになされました。あんまり酷い、情ないやり方——」とさめざめと泣くのを見れば、姉も亦いぢらしく、

「子供迄もあるのに夫の留守に離縁するとは、姑も腹に一物あるに違ひない。伯母様ではあるけれど、高麗橋二丁目の川崎屋源兵衛殿に話もせず、すぐに此方へ送り返すといふ、そのやり方も憎らしい。よしよし家の人が歸り次第、早速行つて話をつけ、並大抵の事では離縁はさせぬ。とはいふものの、この世間で仲の好い筈の夫婦の間に離縁などといふことを、誰がはじめて此のやうな悲しい、つらい目させる事やら、ほんに情ないことではないか。」と姉が泣けば、妹は一層悲しく、こらへかねてわつと泣出す聲を押へて、

「アア聲が高い。障子の向うには父様が、ちやうど今寝入ばな、目を覺すと面倒になる。泣

くなよ泣くなと言ひながら、姉の目にも涙が一杯。誠に親は泣寄りといふ諺の通りに、ものはれな姉妹の姿であつた。

「平右衛門殿、お加減は如何」と、ずつと這入つて來たのは同じ村の金藏といふ男。お千代ははッと驚いて、姉の蔭に隠れて見付けられまいとするのを、

「アア隠れずともよい。隠れるには及びませぬ。ほんに今も今、堤の茶屋で駕籠昇の話でわけを聞いてきた。お千代殿、離縁されて戻られたさうな。いや、おめでたい——」と、氣性といひながら遠慮會釋もなく、とんでもないことを、べらべらと言ひ出すので、姉ははッと驚いて親に聞かせては何よりも大變と、「金藏様、少し氣をおつけなされませ、聾は此處にはをりませぬ、もつと小さな聲でも聞えます。千代は離縁はされやしませぬ。親の見舞に戻つて來ました。奥では父様がやすやすや寝てをられる、目を覺させて下さりますな。もつと低い聲で低い聲で、できることなら歸つてほしい」と、氣を揉めば揉むほど猶ほも聲をはり上げて、

「親仁殿は寝てゐられるか。そりや面白い。どれだけ其方で隠しても、儲かなことを聞いてゐる。お千代殿、何遍でも離縁されてござらつしやれ。方々の聲殿が可愛がつたお古でも、百姓

の女房には丁度よい。俺が女房に貰つて、一晩でも淋しい目はさせませぬ。離縁されて戻つて悲しいと氣をめいらせて、その美しい女振りまで落してはなりません。去年の春俺がほしいといつた時、此方へ來ればよいものを。俺がかうまで惚れた一念でも、他の男とうまく添ひとげられる筈はない。アア隠れなさんな、隠れなさんな。かうして離縁されるといふのも、つまりはこの俺様に縁が深いからだ。親仁殿に頼み込んで、今日からでも俺が引受ける。姉さん、大事にしてやつて下され」と大聲でわめきたてるので、姉妹はいつそ死にたい思ひ、親が聞きはせぬかと、ひやひやしてゐると、奥の病間で手を打つ。

「かるよかるよ」と呼ぶ聲がした。「アイ／＼」「ヤア大變。親仁殿が起きた。金藏が見舞に來たといつて下され。又明日お見舞ひ致さう」と歸りかけるから、おかるは先刻からの腹立まきれ「コレコレお頼みぢや、千代を貰つては下されぬか」「イヤイヤさうはいつても縁組は、大事をとらねばならぬもの。いつかよい日柄をえらんで申入れませう」と、へらず口をたたいて歸つて行つた。

「父様お目が覺めましたか」と、姉が障子をあけるそのあとから、千代もおづおづ、覗いて

見れば、父平右衛門は夜着にもたれ起臥さへ大儀さうな老年で、顔の肉も落ちくぼんで荒れてゐる。老病になやむ父の顔を見るにつけ、こらへかねたお千代は、「もし父様。お薬を上つて、もう一度よくなつて下さんせ」と、思はず聲を立て、わつとその場に泣伏した。父親はまた物哀れな千代の姿を見て涙ぐみ、

「イヤ心配せずに、もつと寄れ、もつと寄れ」と、身近く呼び寄せ、「また離縁されて歸つて来たな。子供を思ふ親の心は、坐つてゐても、千里萬里の遠くまで行くもの。まして一つ家に起つたことも知らずにゐるやうか。寝ても寝つかれぬままに、先刻からの様子は、みな聞いた。つくづく考へるに、自分ながらこれほどまでに心が變るものか。五十代といふ年の中は、思ふやうに早くは歩けずとも、心持は若い頃の昔しの通り頑固一徹で、氣も強し義理立もして、お千代め、今度離縁をされて戻つて来たたら、二度と顔も見ろまい、物も言はぬと、我を張つて決心はしたものの、六十にもなつてみれば、年ばかり寄るでなく、月も寄る日も寄るといふやうに、何もかも寄つて来て、病氣にはとりつかれる。身體が衰へれば衰へるほど、猶々子供のことが苦になつて、三度ばかりは愚なこと、たとひ百度千度離縁されたとして、これも前世からの

約束ごとと諦めて、もう悔みもせぬ、憎いとも思はぬ。笑ひたい人は笑へ、譏る人は譏れ、後ろ指をさして笑ふもよい。何されたとして子の可愛いといふことには、もう何物もかへられはせぬわい」と、老人らしく、くどくどと言つて、

「半兵衛めは遠州へ行つて、留守の間とか聞いたが、まことか。よし留守でもよい。もし彼奴がここへ来たとても、物も言ふな、顔も見ろな。彼奴の身代の百倍もある所へ、見事に嫁入らして見せう。つまらぬことを苦にして、病氣になるな。ナウ姉よ。下の者はみな野良へ行つて留守であらう。お茶でも沸かして、千代めにお晝でも食べさせてやつてくれ」と、他意のない父の顔を見て、姉は喜び「コレお千代、案じたとは違つて、マア父様の御機嫌のよいこと。お側についてゐて御介抱してあげたがよい。アアこれで胸がさつぱりした」と、障子をあけて勝手口へ出た。

ちやうどその時門口で、「お頼み申します」と案内を乞ふ聲がした。「何方」と答へて、はいつて来た人を見れば、千代の夫の半兵衛であつた。

「サア案の定、縁を切りに来たな」と思つたので、おかるは胸もどきまぎして、何といつて

よいやら、腹立も手傳つて、

「去状様、ようおいでなされました」と、變な言ひ方をしても、半兵衛は何の事やら氣もつかず、旅出立のまま笠を取り、沓脱で草鞋の紐をときながら、氣輕に、

「おかる様、誰方もお變りはござりますまいな。國許へ行く時は、大變に急いだので、お知らせも致しませんが、あとに残つてゐるは氣のつかない親達、さぞ御無沙汰を致しましたらう。私も無事に、遠州から今歸つたところでござります。」

「それはまあ御奇特に、ようお歸りなされました」と、顔をそむけて無愛想な挨拶をした。

「——男ども、女ども、誰かお茶でもさし上げぬか」と、居もしないのに呼び立てて、むしやくしやしてゐるその様子に、やうやく様子が、何だかをかしいと悟りはしたものの、半兵衛もどうしようにも仕方なく、二人は氣まづい思ひをしてゐる時、間の障子をさらりと開けて、

「姉様、お薬を温めて下さんせ」と出て來たのは、自分の女房。
「ヤアお千代か。此處にゐるか」と聲をかけたが、女房は一言の返事もせず、障子をぱつたりと引立てた。

「おかる様。ありや女房ではござりませぬか。いつからここに來てをります。なぜに返事を致しませぬのか」と不審を打つても、おかるは平氣で、

「どうして物を言はぬかは、貴方のお胸に聞いてみなされ。それを他人のせるのやうにしてハハハハハ。をかしいこととござります」と、そら笑ひして、とりつく島もない。「ムウ、ムウ——」とうつむいて、半兵衛も呆氣にとられるだけだった。

奥の間では父親が、苦しうな聲で、

「夜が短くて日の永いは、老人にはもつて來いといふが、それは達者で働いてゐる時のこと、かう病氣で苦しんでゐるは、日の永いのは退屈で困り入る。千代よ。棚から本を下して、何でもよいから読んでくれ。かるよ、どこにゐるのぢや。ここへ來て聞いたらよからう。俺の側にはゐてくれぬか」と、老人の氣短かに苛立つて言ふ。

「アイアイここで仕事しながら、障子越しに聞きますう」と、無愛想にはするものの、さすがに半兵衛一人そのままにすておいても立ちかねて、障子の側に立寄るので、半兵衛は、
「ヤ、親父様は御病氣か。どんな御様子かちよつと見たい」と、言はうとはしたが、おかる

の餘りの無愛想さが氣になつて、何も言はず、話し出すにはまたよい折もあらうと、一緒に障子にすり寄つて、内の聲に耳をすました。

千代はいろいろの本を取り出した。

「伊勢物語に塵劫記。父様のお側にはないが網島の心中もござんする。徒然草も平家物語もある。ナウ父様、どれがよろしうござんせう。」

「姉がよみかけてくれた、平家物語がよからう。祇王の段が聞きたい、読んでくれ。」

「ほんに、紙を入れた所がある。どれ読みませう」と押し開いて、「——母の刀自泣く泣く又教訓しけるは、天が下に住はんも者もかうも入道の仰せは背くまじき事であるぞ。千年萬年と契るとも、やがて別るる仲もあり、あからさまとは思へども、存らへ果つる事もあり、世に定めなきものは男女の習ひなり——ほんにさうでござんす」と、わが身にしみじみ思ひあたり、思はず知らず自分の憂さ辛さに涙にくれるのであつた。父は娘可愛さに目をしよばしよばさせながら、

「昔でも今でも、人の氣の變り易いのは世上の習ひ。コレ、姉もよく聞いてくれ。平家物語

を千代の身に引較べて言つて見れば、清盛入道は八百屋半兵衛で、祇王は千代にあたつてゐる。その清盛の氣が變り、祇王を追ひ出す、エエ憎らしい清盛め。去年掣入りした時には、不調法な娘をさしあげた、もし氣に入らぬことがあつたら、打毆いてなり縛り括つてなり、悪い所は直させて、末々まで連添つて貰ひたい。今度ともに三度目の嫁入りだが、とかく田舎といふものは、多勢寄集つてうるさい。又も千代が歸つたら、この平右衛門は面目を失ひ、もう人中へは顔が出されぬ。たとひ娘は氣に入らずとも、この私を可愛さうに思つて、決して離縁はせぬやうにと、私が頼んだところ、イヤ決して離縁は致しませぬ。もし貴方の御葬式でもある折は先興は平六殿、後興はこの半兵衛の役と思つてをります。眞實の子をもつたと思つて頂きたい。今でこそ町人の八百屋こそしてゐるが、元は遠州濱松の山脇三左衛門といふ武士の倅、もとの武士と致しましたが、又今の商人の冥利にも、千代は決して離縁しませぬ。決して御心配ないやうにとの言葉、ヤレ有難いと、手をついて、地頭か代官より他には頭を下げた事のないこの私が、頭を下げてまで頼んで約束。物覚えの悪い年寄でもその時の嬉しさは、骨身にしみて今だに忘れはせぬ。それを若い者のくせに忘れたとでも言ふつもりか。いや忘れてはをる

まい。その證據には、自分は實父の年忌にかこつけて遠州へ出かけ、そのあとで姑に追ひ出させ、養子になつたその親に、自分の罪をぬりつけようといふ、イヤもう呆れ果てた不孝な奴、義理も法も知つた男のする事ではない。何のあれが義理を立てぬく武士の果と言はれうか。武士は武士でも、脛節の削り屑のやうな奴。あんな碌でなしと縁を組み、可愛い娘を捨てたが残念。定めて始めにろくに調べもしなかつたのであらうと、死んだ母親がああ世から俺を恨んでゐるであらう。それだけが口惜しい」と、憤み深い老人が悪口交りに口説きたてて泣出したので、二人の娘も正體なく泣き倒れた。

「とかく男に縁のない生れつきであることよ——」と聲も惜しまず、大聲に泣き出した。仔細を聞いて、始めてすべてを了解した半兵衛は、

「それぢやあ女房は、離縁されて此處に戻つてゐたのか——」と、胸にぎつくりこたへたが、あまりの事に涙も出ず、しばらくは黙つてゐたが稍あつて、

「エエ女房、情ないぞよ。たとひ一言でも話をし、一晩でも一緒に泊つたら人の氣質は、大抵知れるものではないか。まして二人は足かけ二年もの馴染であり、腹には子供までもある深

い仲の夫の心を知つてゐて、言譯はしてくれぬのか。親父様の御立腹を申開き、お怒りをなだめる事は知つてゐるが、自分の罪を養子親にぬりつける不孝者と、先刻もおつしやつてゐる上は、イヤ私は決して知りませぬ。私が離縁したのではござりませんと、申譯をすればするほど、不孝の上塗り。と言つて、此處の親父様との始めの約束は、決して違へませぬといふ、昔の武士の魂はかうしてお目にかけてませう。これを見て、せめて疑を晴らしてほしい」と、脇差をずばと抜くより早く、腹を切らうとした。その手にすばやくおかるは縫り付く。千代も驚き、

「アア悲しや。貴方に恨みはござりませぬ」と、障子を押し明けて飛んで出て、留めてもなかなかとまらぬ男の力、女の力では留め兼ねた。

「父様、どうかよいやうに、始末をつけて下さりませ」と騒いでも、平右衛門は少しも騒がなかつた。

「お前がそこにゐることと、知つてゐてのあてこすり。それが耳にとまつて、自害せうとするのか。オオそりやよい考へ。もし自害をしたならば、アレ見よ八百屋伊右衛門夫婦は、娘を憎んで追出したので、子は面あてに自害したと、養子の親に悪い名負はせ、世間の評判になつた

ら、さぞかし其方の名譽であらう。そんな不所存な男なら、娘よ止めるな。思ふやうに自害さしたがよからう。私はここで見物せう」と、意味ありげな一言が、元より孝行な半兵衛の胸にひつしと思ひあたつた。

「ハハ、さうぢやこりや。私の間違ひでござりました。どうぞおゆるし下さりませ」と、額を下にすりつけて、自分の淺薄を悔んでゐたが、「そんなら、もうお暇を致しませう。千代も連れて参ります。さあ支度をするがよい。」

「エエそれでは私を矢張りこの儘、女房に持つて下さりますか。」

「たとひ死んでも、放しはせぬ。」

「オオ嬉し。父様も姉様も喜んで下さりませ。」と、はやもう抱へ帯を締め直す。その帯の先きをたぐつて、にぢり寄つた父親は、ハラハラと涙をおとし、

「半兵衛。この他愛なさを見てやつてくれ。歸られるといふ嬉しさに、親の病氣のことは何にも言はず、喜び勇んでゐる其の顔を見る親の心の嬉しさは、ほんに胸を割つてでも見せたい程ぢや。取り締めた所のない、ふつつかな娘のこと、さだめて伊右殿夫婦のお氣には入るまい

が、頼みにするは其方の心一つ。親は明日知れぬ老病ゆゑ、いつ死ぬことか知れぬが、冥土の底の底までも心にかかるはこの千代一人。たとひ明日が日に死なうとも、姉夫婦に固く遺言して十や二十の金のことならば、いつ何時でも用立てよう。商賣によく精出して繁昌させ、娘のことはくれぐれもお頼み申したい。その約束の盃事を此處でせう。銚子を早く持つて來い。姉よ、酒はもうなかつたか。よしよし、酒でなくても、酒だと思へば、水でもなんでも、酒と同じこと。爛鍋に酒を持つて來い」と、盃の出る間も待遠しいと急ぐのは、子故の闇といふべきである。

つがれた水を、引受け引受け、ぐつとほして、

「半兵衛ささう」と、親子夫婦で水盃を重ね、さしつさされついつまでも、いくら飲んで酔はぬ水酒盛を開いた。これも娘を可愛いと思ふ親の心の現はれだつた。

「命があつたら又逢はう。この儘死んだら、これを末期の水盃と思つてくれ。この水を極樂にあるといふ八功德池の水とも思はう。最早やこの世に思ひ残すことは何もない。さ二人ともおいでおいで、さらば——」と夜着に凭れて、二度と詞はかけないで、あくまで義理をたてとほ

す親心のあまりの立派さに、半兵衛も感激して、わざと親には詞もかけず、姉にだけはくどくどと思ふことを話し、二人連立ち立ち出でようとした時に、

「しばらく待った」と、父親は起上つた。

「ナウ姉よ。千代が二度と歸らぬやうに、祝つて家で門火を焚け」と言はれて姉は、門火は葬式の折に焚くもの、縁起でもないとは思つたものの、親の言付けゆる仕方なく、「めでたう此處で焚きます」と、門火を焚いた。

庭に煙る門火、その火はやがて半兵衛夫婦の身體を焼く、無常の煙ともなつた。

「たとひ灰になつても、もう歸つてはならぬぞよ」との、父の一言を後ろに聞いて、姉妹と掣とは、互ひに名残りを惜しみながら立別れたが、後で思へば、これがこの世の永い名残りになつたのだつた。

下の巻

〔八百屋〕

夏季になると、青物商賣の八百屋の見世では、青物がかわいて困るので、筵庇で陽光をよくける。その日蔭にも似て、妻ではありながら、公然と家へ歸られぬお千代の舅の家は、新靱油掛町の八百屋であつた。

主人の伊右衛門は、浄土宗の大的信心家で、この頃は了海坊といふ坊さんの説教に打ち込んで、方々のお寺の開帳や回向の世話役を引受けて忙しがつてゐた。見世の方は掣半兵衛に任せつきりで、まるで大阪中のお寺参りに走り廻つてゐるやうだつた。

亭主がさういふ風だから、女房は家の中の用事やら、世間への附合の世話ばかりしてゐるその苦勞がつもつて、本當の年よりは五つも老けて見える程で、朝から晩まで氣を苛立ててゐる

のであつた。

「あの役に立たずの半兵衛は、藏の中でぐづぐづと何をしてゐる、見世の賣物がしなびてしまふぢやないか。……ヤイ松よ、さつさと水をまきをらんか。……コリヤさんよ。糊かひ物ももう干上るだらう、ぐづぐづせすと早うとり込んで、打盤出してちよきちよき手早く打つたがよい。ヤ、それぞれ、ちよきちよきで思ひ出した、次手に夕飯のお茶のお根葉をきざんでおけ。……コレ松よ、今日は五日で宵庚申、もう甲子も近い。甲子は一ツ寝をしてはならぬ日だから、二股大根は何だか人の目に立つて見苦しい、どこかへ片つけておけ。……それ、さんよ、茶釜の下を焚きすぎるではないか……」

と、商賣が八百屋といふだけに、一度にあちこち取交せて、八百色も言ひつける。口のがちやがちやとやかましいのは、大晦日の急がしい最中にでも生れたのもあらうか。

此の、口も八丁手も八丁といふ働きの者、伯母にはちつとも似てゐないで、呑氣な氣質の甥の太兵衛は、市場へ出かけた歸り道、走り物の筍を片方に、別の片方には獨活、生姜、山椒に白瓜二本をのせて、

「——これはさつても、早い事でござんすよの。俺が戻るは、ても遅い事でござんすよの——」と、鼻唄を歌ひながら、ぶらりぶらりとやつてくる。それを見付けた伯母はたまりかねて、

「これ、この大野良め。今朝卯の刻（六時）に家を出て、今までどこで何してゐたのぢや。もう晝過ぎではないか、何處で馬鹿にされてゐた。お出入の旦那様からの誂へ物に、日覆しておいてさへ傷みやすい時分に、値段の高い物をわざわざ天道干にするといふは、何といふ罰あたりぢや。少し正氣をつけをらんかい」とむしやぶりつく所へ、半兵衛は奥から走り出て留めた。

「母様のおつしやるのは尤も。コレ太兵衛、どこでそのやうに暇どつてゐたのぢや。在町の笹屋からは筍取りに矢の催促、阿波座堀の丹波屋からは栗をよこせと言つて来る。朝倉屋からは青山椒の御用があつたが、家になくて返事に困つてゐたところぢや。氣の毒だが母様の御機嫌直しに、ちよつと一走り行つて來い。」

「ハテ何ば私でも悪い所に這入つてゐましょか。横町の山城屋でちよつと呼びこまれたので

二つ三つ話をして来たばかり。それは外の用でない。此方に誰やらが逢ひたいといふので、今朝から此處に待つてゐると言つてくれと、言傳をされただけのことぢや。——どれ、私しやお得意廻りをして来ませう。此方もちよつと行つて来たがよからう」と言ひながら、誂へ物を揃へ、荷拵して出て行つた。

半兵衛は山城屋と聞いて、お千代が来たのに違ひないが、母親に氣がつかれては大變と、わざと空とぼけて、

「ハテ、山城屋の用とは、何用であらう。どれ、ちよつと行つて来ませう」と走り出ようとするのを、母親はむづとおさへた。

「鞞殿、こりやどこへ行かうといふのぢや。」

「イヤナニ、山城屋から逢ひたいと言つてよこしましたので。」

「オオその山城屋のこと知つてゐる。行つてはなりません。そのとぼけた顔附はそりや何ぢやい。私ら夫婦は何も知らぬと思つて、とぼけさつしやるのか。此のわしが氣に入らず、追出した嫁をば、遠州からの歸りがけに、よくもまあ引張つて来たものぢや。さうして常盤町の從

弟の所へあづけておき、商賣にかこつけては、暇さへあればいちやつくを、わしが知らずにるませうか。さぞ二人寄つたらば、わしの事を悪く言つてゐるであらう。十五年も長い間世話をした此の親の嫌ふ嫁に、さんざん孝行して、親にはたんと不孝をするがよいわい。この恩知らずめが」と、疊をたたいてわめきたてる所へ、青布子を着た西念坊が、御免とも言はずにはいつて来た。

「熊野屋の權右衛門からの御用。先日からのお約束通り宗味の刻鐘の開眼で、粗末ながら非時をさしあげます。講中の皆様ももうお揃ひ、且那樣も来ておいでぢや。御夫婦とも直ぐに来て貰ひませう」と言ひすて、その儘あわてて歸つて行つた。こんな坊主に未來を頼む氣には到底なれない、そそくさ坊主だつた。

「あれ親仁殿、熊野屋から呼びに来ました。早く行きなされ。わしは行かぬ。早く支度しなされや」と、怒り聲でわめきたてた。

親伊右衛門は信心一方の好人物として、「ハテ嬢、何をがやがや喧しい。又しても又しても半兵衛さへ見ると、まるで敵のやうに言ふ人ぢや。商賣をしてゐて附合の廣い若い者のこと。呼

びに来る人もあるはず。少々の事は知らぬ顔してやつたがよい。」

「ソレソレ、そんな人の好いことばかり言つてゐるから、親を馬鹿にするわいの。現在の甥の太兵衛をさしおいて、赤の他人の、此ののらくらの半兵衛に、家屋敷までやらうといふ心の美しいこのわしの、どこが悪いといふのぢや。」

「コレ嬢よ。そんな事は誰も知つてゐること、今更しらべたてずともよいわい。そのやうに腹の立つてゐる時には、念佛が一番の薬、とかくは如来様の御方便で、修羅をもやして怒つてゐるお前を、呼びに来たのも阿彌陀如来のお慈悲。行かうといふこのわしも亦、彌陀如来と同様の美しい心。機嫌直して、さあ一緒に出かけませう」と宥めても、

「イヤイヤ、私達の出かけたあとで、この半兵衛めが千代を呼込み、留守の間にさんざんとふざけやう。そんな事をさせてはおけぬ。あんた一人お参りして、私のことは俄に目まひがしたとか、頓死をしたとか、うまく言抜けておきなさい。」

「これ嬢、今も今とて西念坊が、お前の達者なのを見て行つたではないか。そしてマアこの伊右衛門に嘘をつけといふのか。アア勿體ない。そんな事が出来やうか。それが五戒の一つの

妄語戒といふものぢや。この間もあるお寺で、五戒の割口説といふのを聴聞したが、三百戒の五百戒のといふ澤山の戒めも、つまる所は色の道になるとの御説教ぢやつた。半兵衛の叱られるのも色の道、これそんなやかましいこと言はんでもよいではないか、一蓮託生の閨のお同行殿」と、笑ひながら機嫌をとつたので、さすがの女房も気が折れた。

「そんならまづ此方は先きへ行かつしやれ。このやうに胸がむしやくしやすする時に、お念佛を唱へたら、咽にすすく立ちませう。氣を落ちつけて後から行きます。エエいろいろと氣がもめるのに、その上に七面倒くさい念佛講があることぢやな。こんな時には氣を利かして、延ばしたらよからうに。ほんにほんに私達の同行には、機轉の利いたものは一人もない」と、怖い目に逢はぬ育ちに、我儘のありつたけを並べつくす。

「オオ、そんなら先きへまゐりませう。あとからおじや。佛法と萱屋の雨は、外へ出て聞けといふが、その通り。外へ出ると又有難い事を聞くものぢや。今度生玉の大賣寺のお開帳に築山をかざつたのも、竹本座の筑後掾の淨瑠璃の、川中島合戦の四段目から、思ひついたことぢやげな。こんなことも外へ出なければ聞くことは出来ぬ。アア有難い、南無阿彌陀佛南無阿彌

陀佛と、輪數珠を爪ぐりながら出掛けていつた。

半兵衛は一言の返事もせず、涙にくれてゐたが、やがて顔を振上げた。

「もうし母様。今更らしい言分ではござりますが、半兵衛も元は武士の釜の水で育ちまして義理といふことを心得て居ります。二十二の歳から御厄介になり、一人の甥御をのけてこの私に、家屋敷をお譲り下さらうといふ御高恩は、肝に銘じて決してあだやおろそかには存じませぬ。その御恩も厚い母様のお氣に入らぬ女房なら、私が離縁致してこそ孝行ともなり、又世間へも言譯になります。ところが今度のやうに、私が國許へ歸つたその留守の間に、御離縁をなされました、——アレ見よ、八百屋半兵衛の母親は、嫁を憎んで姑去りにしたげな——と世間では大評判を致します。さうなりましては、たとひ千代めに悪い所があつても、判官最良で、弱い者の味方ばかりしたがる世間のこと、貴方の評判ばかりが悪くなります。それでは若い者の私が、どの顔下げて世間へ出られませう。そればかりか、ひいては親父様の御名譽まで損はせる。それゆゑここに一つのお願ひがござります。と申すは、ほんの少しの間の御辛抱を願つて、一旦千代めを家へよび返して下さりませ。その上で私が、立派に離縁状を書いて暇

をやりませう。」

「ホホ、そこが男の效驗、どんな尊いお方の娘でも、夫が離縁するのに誰が何と言はうか。」

「サさうなれば千代と致しましても、姑のあなたには何の恨みもござりませぬ道理。私としてはあなたをお慈悲深いお人と、世間にも言はせ、千代にも思はせたいばかりでござります。十六年以來、これがたつた一度きりのお願ひ。老少不定といふこの世の中、どんなことがあつて、私が先きへ死ぬまいものでもない。もし死んだとて、あとでどんな手厚い回向をし百萬遍を繰つて下さるより、——よし聞き入れたと、只今言つて下さることが、高僧からお十念を授かるよりも有難いことに存じます」と、女房の親にも自分の親にも義理を立て、世間への義理また女房への恩愛と、四方八方へ氣をかねて、思ひ切つてかう言ひ出した半兵衛は、あとはただ涙にくれるのであつた。母はにやりと笑つて、

「ムム、さうはいつでも思ひ合つた夫婦仲、ほんとうとは思はれぬが、涙は嘘にはなかなか出ぬもの。では、本當に離縁をする氣ぢやな。」

「ハテあなたを騙すほどならば、こんなお願ひは致しませぬ。」

「オオそれは嬉しい。わしも鬼にはなりたうない。きつと離縁をするのぢやぞ。間に合の嘘を言つたら、コレこの母が出刃庖丁で喉笛をちよいちよいと突き刺すぞよ。母を殺すか離縁をするか。どちらでもその先きはお前の勝手にするがよい。アアこれでさらりつと、この娑婆の苦もなくなつた。この世からの生佛とはわしのこと。それでは氣輕に吞氣に非時に行つて來ませう。女房を離縁するお前と違ひこのわしには、未來までもどこまでも置き去りにせぬあの夫が、さぞ待つてゐることであらう。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。さんよ、そのままよい、ちよつと供をしや。松よ、また見世の吊し柿を食べちやならんぞ。アア南無阿彌陀佛——」と念佛を唱へながら、ぶつぶつ口小言を言ひながら出掛けて行つた。

お千代はもう五月の身重だが、心のつかへもおり、足も手も輕やかに、小棲を引上げ、ちよこちよこ小走りに歸つて來た。

「ヤレ久し振りで家を見た。半兵衛様、今日といふ今日こそ、世間晴れて歸つて來ました。ア嬉しい——」

と抱きついた。半兵衛はぎよつとして、

「何と思つて歸つて來た。今しがた母は出て行かれたが、道で逢ひはせなんだか。」

「さあそのこと。母様が山城屋へおよりなまつて、いつになく門口からにこにことして、可愛さうに、わしのちよつとした思ひ違ひから心配をさせた。今からは、歸れのかの字も言ふまいと、心に誓ひを立てました。娘といつても外にはなし、天にも地にもたつた一人の花嫁のこ。末期の水とつて貰ふのも、骨拾つて貰ふのも、お前より外に一人もない。これからは随分孝行にしても。わしもお前を可愛がる、今お念佛に行くとこだが、お前は早く家に歸るがよい。わしも歸つてからゆつくりと逢ひませう。早く早くと、もう桶の物をすつかりぶちあげたやうなお心持。これといふのも皆お前様のとりなし故と思ふと、ほんたうに有難うござりまする。——松よ、随分と久し振り。——もうどこにも蚊があるのに、女房あるじがるなければ蚊帳の吊手もない。あのさんの居眠り好きでは袷の洗濯もまだ出來てはをるまい。マアこの戸棚の埃だらけなこと。奥の方の疵もまだ直してない。香の物もどうなつてゐるやら見まはりたし、何からしたらよからうやら、氣ばかり急ぐ。まづいつもの所に坐つてみましょ。」

と、とんと茶釜の前に坐つたが、湯を沸して水になるといふ譬の通りに、この喜びが仇になるとは知らぬお千代こそ、誠に哀れであつた。

半兵衛は喜び勇む女房には何の返事もしないで、

「コレ松よ、ぼんやりしてゐると、藏へ行つて、椎茸でも選るがよい」と、人を避けておいて、お千代の顔をつくづく眺めて涙ぐんだ。

「エエ可愛さうに。利口なやうでもさすがは女。母の言葉を眞實と思つてゐるやるか。あれはみんな嘘ぢや。けれど昨日もよく話した通り、佛法のはしくれでも聞きかぢり、慈悲といふ言葉も知つてはゐるお人、自分の甥をさしおいて他人の私に財産を皆護るといふ、あのお心持でもわかる通り、根から曲つた根性は持つてゐぬ良いお人だが、人間には合縁奇縁といつて、現在血を分けた中でさへ仲の悪い親子もあり、通りすがりの乗合船の相客の中にも、一目見ただけで可愛らしいと思ふ人もあるといふもの。人間はとかくさうしたもの。お氣の毒に、元來悪人でもない母を、お前故に邪慳者と言はせては、夫婦の後生も悪いから、母の機嫌のよいやうに一度は呼返したその上で、わしの手から改めて離縁をするはずぢや。」

「エエ、そんならどうでも、離縁されるのでござんすか。」

「ハテびつくりするほどのことか。死なうとは二人の前々からの覺悟ぢやないか。死にさへすれば養子の親にも悪名つけず、そちの在所の親にも恨みはなく、エエさすがに、よくまあ見事に死んだと、褒められこそすれ、未練者といふ名はとるまいと、母にむかつてどれほど言葉をつくして話したと思ふか。書置ももう書いて、死装束も脇差も、荒布の荷へ巻込んでおいた。

もうこの世に思ひ残すことは一つもないが、ただ金につまつて心中したと、一概に言はれうかと、こればかりが氣にかかる」と、わつと泣けば、お千代もわつと泣き出した。

「エエもう、あなたの孝行の道さへ立てば、わたくしに何の未練もありはしませぬ」と、夫婦互ひに取違つて、泣き沈むこそ道理であつた。

母は念佛回向に行つたが、嫁夫婦のことが胸にかかり、餘所にゆつくりも氣が氣でなく、見世の表戸をたてる時分、によつと歸つた。

「なうお千代、歸つて來たか。先刻もいふ通り、ちよつとしたわしの料簡違ひで心配させ

た、可愛さうなことをしました。ほんたうのお慈悲深い、生如来様が見たかつたら、このわしを見るがよい。もう長くもないこの浮世で、酷い目や辛い目見てどうせうぞ。オオ厭やの、厭やの。——コレ半兵衛、臺所の流しの出刃庖丁は、よく研がしておいたぞ。ちよとさはつても劍のやうちや。アア南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と、半兵衛に謎をかけ、嫁は何にも知らないと思ひ込んでゐる、其の心だけは佛のやうでもある。夫婦は母の機嫌のよいのさへ見れば、何より嬉しいとは思ふものの、心の中では情なく、泣きたい思ひを押隠してゐる心遣ひこそ、誠に物哀れだつた。

「コレ半兵衛、何も忘れたことはないか。日の永い時は、よく物忘れをするものぢや。よく思ひ出してみるがよい。——お千代よ。泣かないでここへおじや。まだわしが怖いか。ここへ、ここへ」と、猫なで聲。

「ハイハイ、お側へ参ります」と、近寄らうとする所を、半兵衛はつきのけた。

「女房だけは親の氣儘にもならぬもの。わしの氣に入らぬお千代、離縁した。離縁したぞ。出て行け。コリヤさんも丁稚もよく聞け。半兵衛は女房を離縁したぞよ。向ひでも隣町でも、

母の悪口を言ひ立てたら、このわしが承知せぬぞ。うろろろせずに出て行け」と、眞顔になつて睨みつけるが、その眼は涙で一杯である。母は、

「コレ嫁御。わしは離縁したくはないが、夫婦の仲は親の思ふやうにもならぬものゆゑ仕様ががない。わしを恨んでくれるなよ」と言つても、お千代は返事もなく、しやくり泣きをしてゐるので、

「ムム、さう泣くところを見ると、まだこの母に恨みがあるさうな。恨みがあるならばつきりと聞きませう。」

「イイエ、お慈悲深い姑御様に、どうしてどうして恨みなど——」と言つたばかりで、わつと泣伏した。

「エエ其方のいふまでもないこと。母様に何の恨みがあらう。べらべらしやべつてばかりで、エエ面倒な」と、半兵衛は腕をとつて門口へ引出した。「この私も、すぐあとから行く。萬事は後で——」

と囁いて、目交で知らしても、お千代はこれがこの家の見納めかと、ともすれば心がにぶ

る。それを母に悟られまいと、半兵衛はわざと見世をぐわつたりと閉し、門口をびつしやりと戸締りをした。折柄鳴るのは六時の鐘。ああ、もう初夜か。今日は五日だから、人が息を引取るといふ潮の引時は、五五八八で、五（戌——午後八時）になるには、もうあまり間もないと思ふと、さすがに胸は躍るのだつた。

飽きも飽かれもせぬ夫婦の、生別れの悲しみを見ると、さすがの母も言ふことなく、居間を立つて奥の佛前で、罪亡ぼしに鉦を打つてゐる。善悪を照らすといふ燈明の火を見るが早いか、下女は居眠りをはじめたので、もう外に見る人もなしと半兵衛は荒布の束の中に隠しておいた一尺四寸の刀を取り出し、これが冥土の案内としつかと取り、魂をこめて書いた書置を箱に入れ、死んだら地獄へ墮ちるか極楽へゆかれるか、未来のことはわからぬが、白茶の死装束まで、毛氈に包みこめた。毛氈の赤い色が血の色に似通つてゐるのを見るにつけ、死損ひは決してしまいと、心に覚悟は出来たものの、暖簾一つ隔てた向うでは、母の打つ鉦の音がカンカンと響いてくる。それが胸にこたへて身體も顛へ、踏所さへもきまらぬさし足で、鏝をはずす手もわなわなとふるへながら、やつとの思ひで門を開け、そつと外へ出るとお千代が待つてゐた。

「お千代か。」

「ハイ。」

「これで罌の口をば通れた。さあおいで。」と手をひく。

「ママ待つて下され。なまじ一度戻つて来て、お前の口から離縁した、去つたと言はれては、未来までも氣にかかる。せめてのことにこの門口で、離縁はせぬと一言いつて下さりませ。」

「ハテサテ、つまらぬことばかり言ふ、今宵は四月五日で宵庚申の日、夫婦連でこの家を去ると思へば、よいではないか。」

「成程さうぢや。手に手をとつて、この世を去りませう。」

死にさへすれば輪廻を去り迷ひも去る。今日こそこの世の最期の日と、屠所に曳かれる羊の思ひ、足に任せて死場所を捜しに出て行つた。

〔八百屋半兵衛女房おちよ道行思ひの短夜〕

名残も夏の薄衣、鶯の巢に育てられ、子で子にならぬ杜鵑、我も二七の年月を、養ひ親に

育てられ、子で子にならず振捨て、死に、行く身は人ならぬ、死出の田長か杜鵑。同じたぐひの女夫づれ、肩にかけたる毛氈は啼く音血を吐く姿かや、覺悟極めし足許も、影ほのぐらき薄曇り、卯月五日の宵庚申、死なば一處と契りたる、其の一言は庚申、参りの人に打紛れ、忍び出づるも商賣の八百や萬を一文字に、半兵衛といふ名にも似ず、只根深くも思ひつむ、若菜心のつきつめて詞の義理に生薑や、智者は惑はず勇者は恐れぬ生れつき、さすがは武士の胤ぞかし、千代も今度が三度目の嫁菜さかりもひねくれて、諸事をこまかな芥子辛子、人のいふ事木耳や、夫の親を手にささげ、晝夜孝行つくぐし、仰せ背かぬ宮仕へ、氣のとつさかな姑に、せりぐいぢりたでられて、命もなしやありのみの、谷川ふりに身を投げう、今日甘海苔にならうかと、心は有頂寒天の、いつ出糞としもせねば、斯くなる蓮でござんせう、何と生薑の身の果を、いふて返らぬ水蔞の、姑去りて殺したと、悪名つけて世の人の、わらびませうがお笑止と、悔めば夫は芋莖の涙、なう其方さへ其の如く悔んでたもろに此の半兵衛、年頃日頃の御高恩、送らで死ぬるは人のくす、罰をかぶらん恐ろしと、酸漿程な血の涙はらくこぼせば走り寄り、私も病者なと、様を先へ

送るが尊菜を、却つてうき目見せます。是も何ゆる相生の松茸ゆゑと抱付く、梢に知らぬ松の露、落して松露になりやせん。あれ一群に聲高く、下向の衆のぞめき唄、見つけられじと影かくす、我が戀路は絃なき三味よ、なんの音もせで待ちあかすそれぢや、見れば思ひの雲の帯、さすぞ盃、ならずと一つまるれ、いやとおしやるに、こちやもそれぢや、さうさんせ、それぢや、しかもよいこの、情盛りにちよきりこつきり小女房の腰もしなへてやつくり、くるりや、やつくりとぬめらしやんすは、二人が外に名取川、オオそれ二人と二人が名取川、それぢや、それ行過ぎしと立出でて、今の小唄の一節に二人と二人が名取川、オオそれぢやと唄ひしは、かれと其方が名取川、辻占がよい此方へと、勇むは男の彌猛心、アア嬉しいと引連れて、共に急ぐは女氣の、なさけするどに人絶えて、物しんぐたる寺町を、死に行く身も暫くは、ここ生玉の馬場先に法界無縁の勸進所、無明能化の門前に、念佛をたより通り寄る。

〔大意〕お千代半兵衛の道行を敍した景容文で、八百屋だけに、野菜つくしの所もある。

杜鵑が眞實の親に育てられず、鶯を親として育てられるやうに、生みの親の手許をはなれ、八百屋伊右衛門の手許で人となつた半兵衛は、十六年も世話になつたが、結局子として生きること出来ず、死出の田長の杜鵑に誘はれて、死なねばならぬ身の上であつた。同じ運命の女房お千代と二人連、毛氈を肩にかけ覺悟を極め、折柄四月五日の宵庚申へお参りの人に紛れて、忍んで死に出掛けたのであつた。半兵衛などといふ中途半端な名に似ず、どこまでも一處にと女房の親に誓つた一言の義理を重んじて、「智者は惑はず勇者は恐れず」といふ論語の教への通りの行動をとつたのは、流石に武士の胤ともいふべきである。女房千代もこれが三度目だけに嫁入り盛りももう過ぎて、年増じみではあるが、萬事に氣をつけ、人のいふことをよく聞いて、舅達の氣に入るやうに勤めたが、我儘な姑にさんく苛められ、今日は谷川へ身を投げようか、今日は尼にならうかと苦勞ばかりが重なつて、呑氣な日とはなかつたから、この苦が積つてかうして死ぬのも、當然であらうか。「私はどうにもならない身だから仕方もないが、姑御様は自分の好嫌から嫁を出して殺したと、世間の人が悪く言つて笑ひませう。それがお氣の毒」といへば夫も今更涙にくれ「お前でさへさういつてくれるのに、この私は十數年の御恩も送らず死ぬるとは、人の屑も同然、さぞ親の罰が當らう」と酸漿ほどの涙を流すのであつた。お千代も「私も病氣の父様を先へ見送るはずを、却つて御心配をかけます。是も誰れ故、夫のあなたがいとしい故」と泣出した。庚申歸りの人々が唄をうたつて通り過ぎる。「あの歌の文句は我々にはよい辻占」

「サア早く最期の場所へ」と急ぐは男のはりきる心。「オオ嬉しい」と連立つは夫に従ふやさしい女の心。物淋しくしんと更け渡る寺町を通つてゆく身は、今しばらくの間だけ生きてゐるのであつた。生玉の馬場先の勸進所から聞える念佛の聲をたよりに、最期の場所であるその門前へと、やうやくの思ひで辿りついた。

〔門 前〕

門前にたどりついた半兵衛は、

「ナウお千代。お祖師様の偈の中の、心隨萬境轉といふことは、心は境界に随つて、轉じ變るといふことぢやげな。そなたも今は千代といふ名を改め、風覺良薰信女といひ、私も八百屋半兵衛を露秋禪定門と改めたからは、息はあつてもはや亡き人同然の體。死後の體の置所も俗縁を離れ、寺の庭で死にたいと思つたが、門があかぬからは仕様もない。此處は奈良の東大寺大佛殿の勸進所で、先年了海和尚が衆生濟度の御説教を、ここでお説きになり、今はお亡くなりになつたが、親伊右衛門殿は講中一の信心者。由縁の深い所だから、最期の場所も、此處にきめようと思ふ。がお前は外に、何處か、望みの場所でもあるか」と聞いた。

「なに、死なうといふ身には、何の望みもありませぬ。水の中でも火の中でも、どんな所もかまひませぬ。ただこな様と先の世までもどこまでも、一緒にゐられるやうな所を、見付けて死なせて下さりませ」と、さめざめと歎くばかりだつた。半兵衛は、

「オオよう言うてくれた、有難い。この書置にも書いた通り、養子になつて十六年この方、十方且那の機嫌をとり、暇さへあれば町中を振賣したお蔭で、もとは僅かな八百屋であつたが、今では少しは人に金を貸せるぐらゐに儲けたものの、辛い目にばかりあつてゐて、半日でもゆつくり休んだことはない。いつそ死んでしまはうかと思つたこともこれまでに、五度までもあつたほど恨めしい日ばかり送つたが、それでもお前と夫婦になつてから、せめても氣を慰めてゐたものを、そのお前にまで添つてゐられぬ羽目となり、かうして死なねばならぬとは、何たる因果か。この半兵衛のやうな者と縁を組んだばかりに、わしの因果がお前にまで及び、在所の親父様や姉様にも、悲しい目をみせるかと思へば、この胸に鎌をかけ、肝を猛火で焼かれるやうに、アア苦しい」と、拳を握り膝に押付けて身をふるはし、はらはら流す涙は、折柄地上に置いた朝露と、ひとつになつて流れた。お千代は、

「アレ又くどくどと、愚痴ばかり言ふ。在所の父様や姉様は、こな様よりは諦めのよい御氣質ゆゑ。水盃をした上で門火まで焚かれたは、生きては二度と歸るなと私に意見をしたついでに、暇乞をしたつもりに相違ない。そんな愚痴をこぼしてゐる暇に、早う殺して下さりませ。アレ、アレ、アレ、方々で半鐘がなる。人が來ると悪い。來ぬ中に早う、早う」と最期を急ぎ、玉かつらのやうに、夫にまとひついて泣沈んだ。

「オオそれぞれ。つまらぬ愚痴をいひ出した。もうお互ひに親や兄弟のことは言ふまい。お前も言ふではない。さあこつちへ——」と、毛氈を土に敷いて、

「なうお千代。この毛氈を毛氈とは思ふなよ。二人一緒に未來で乗る法の花、紅の蓮と思ひ込めば、一蓮托生といふ望みもある。親兄弟への書置もこの状態に入れてある。明日はもう届くであらう。サアサア、覺悟はよいか。最期の念佛を忘れるな。今が最期——と、一尺八寸の刀をずばと抜いた。この刀は先祖重代、我が身を切れとて親は譲りはせまい。思へば思へば、この半兵衛の情ない身の果ちやと、昔の事を考へれば、感慨無量で手もふるはれ、不覺の涙はとめどもない。西と思ふ方角へ千代は合掌して、

「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛——」といふより早く引寄せて、脇差を喉咽に押當てた。

「ナウ少し待つて、待つて下され」と、身をすりつけるので半兵衛は、

「待つてとは未練な。刃物を見て俄かに命が惜しうなつたか。卑怯者め——」と睨みつけた。

「イエイエ、未練でも卑怯でもない。今の回向は自分の回向。可愛さうにお腹にはもう五月の子供がゐる。男か女かわかりませぬが、この子のためにも回向してやりたい。嬉しや無事で産んだなら、どういふやうに育てうか、かうもああと、案じてゐたのも、みな徒となり、目の見せずに殺すことかと、思へば可愛うてたまりませぬ」と、わつとばかりに泣入つた。男も聲をすすりあげて、

「わしもどうしてそれを忘れよう。もし言ひ出したらお前が泣くであらうと思ひ、それが悲しさに黙つてゐたのだ」と、二人一度に聲をあげて、前後正體なく泣き叫んだ。

やがて、最期を急がせるやうに、八聲の鶏の、曉を告げるのが聞えて來たので、

「サアサア、もうすぐに夜が明ける。明日は未來で添はれるのに、この世の別れはほんのし

ばしの中のこと」と、唱へる十念の聲も逼つて、一念の聲と共に、女をぐつと刺殺した。呼吸のみだれにつれて刃もみだれがちであるが、思ひ切つてぐつと刀をつきさせば、女は覺悟の上とはいへ、四苦八苦して手足をもがき身もだえしたが、四月六日の朝露と共に、草の上には屍を横たへず、血のやうな毛氈の上に倒れて、むなしくなり果てた。

千代の年は二十七、着てゐた郡内縞の着物は血汐に染んだ、其の眞紅の着物の亂れを直し、抱へ帯を二つに切り、兩肌脱いで自分の鳩尾と臍の二ヶ所を、ぎりぎり固く結び、脇差を逆手に持つて、二首の辭世を詠んだ。

「古へを捨てばや義理も思ふまじ、朽ちても消えぬ名こそ惜しけれ——」

「はるばると濱松風にもまれ來て、涙に沈むざんざの聲——」

もう思ひのこす所もない、これで自分も佛になりますと、しやんと左手の腹に刀を突立て、右手へうんと引廻し、かへす刀で喉の笛をかき切つて、此の世の縁を切つて捨て、自分の息も引きとつた。

朝あさの勸行ごんぎやうの始まる卯の刻（朝の六時）過ぎになつて、勸進所の門番が、眠ねむさうな目をこすりこすりやつて来て、これを見つけた。

「ヤ、心中だ、心中だ、死んだ。死んだ——」と呼ぶ聲に、大勢の人達も馳せつけて、濱松はま松の半兵衛夫婦の心中が、ぱつと評判になり、松の枝さへゆるがぬ今この泰平の世の中に、珍らしい見事な死姿しにすがただ、立派な心中ではないかと、感心するばかりだつた。

略

註

（括弧中の数字は本文の頁數）

(國性爺合戰)

伍子胥の忠心(四〇)

吳王夫差が會稽山に越王勾踐を破つて、心甚だ驕つた。それを伍子胥が諫めたところが、吳王怒つて劍を與へ自殺を命じた。伍子胥大いに憤慨して、吳の滅ぶのも遠くあるまい、我が眼を東門にかけよと叫んで、自刎して死した。それを言ふ。

范蠡の忠義(四〇)

范蠡が越王を助けて吳を滅ぼし、會稽の恥を雪いだこと。

一家仁あれば云々(四四) 『大學』に、一家仁一國興、一國興一國作亂、其機如此とある。

五刑(四五)

支那古來の刑罰の總名である。古は墨(いれずみ)、劓(鼻をそぐ)、剕(荆または廣ともいひ足を截る)、宮(男は勢を斷ち、女は入精の道を掩閉する。或は云女は宮中に幽閉する)、大辟(死)の五刑を指したが、隋以後は笞、杖、徒、流、死を以てした。日本でも大凡これらの法に準じた。

金刀點(四六)

筆法の名。大の字は三點にて、大の字の一文字は玉案、左へ引くを犀角點、右へひくを金刀點といふ。その形刀身に似るが故といふ。

石火矢(四九)

大砲のこと。はじめ彈丸に石を用ひたから。

木まぶり(五一)

果物の樹梢に取り殘されたのをいふ。

舟梁(五六)

船の兩側の棚板間に横たへた角材。

鳴の看經(六〇)

田や澤にゐる鳴の閑黙なる状態を、俗諺に「鳴の看經」といふ。

雪折竹に本來の面目を悟り云々(六〇)

初祖に神光といふ僧來り參ずるに、祖はただ端座して教の

詞なければ、かの僧庭に立ちけるに、大雪ふりて竹を折れども退かず、夜明くるまで立居たりしかば、初祖あはれみて、汝何事を求めんためにか雪中にあるやと問ひ給ふに、かの僧涙を流し、師たゞ願はくば教へたまへといふ。初祖の曰く、諸佛無上の仁道は汝が如き小智小徳の慢心を以て得べきにあらずと、かの僧聞くや否や、刀を以て左の肘を切り師の前に置きて曰く、諸佛の法印聞く事を得べしや祖の曰く諸佛の法印は己が心にあり、他より求むべけんや、かの僧の曰く、我心未だ安からず、師願はくば我ために我心を安んぜよ、祖の曰く、汝が心を我前に持來れ、かの僧心を求むるに捕へ得べからず、祖の曰く、今汝が爲に心を安ぜりと、かの僧遂に悟を開けり(難波みやげ)とある。

合從連衡(六一)

蘇秦が六國を説いて同盟して秦に當らしめたを合從といひ、張儀が六國を説いて秦と連合せしめたのを連衡といふ。

延平王國姓爺(六一)

鄭成功わが寛永十五年に明に歸り、父芝龍と共に恢復を謀つた。その功により成功を思孝伯に封じ、朱姓を賜はる、故に國姓爺と號した。わが萬治元年延平王に封ぜられた。

縁につるれば唐の物(六七)

縁につるれば唐の物くるといふ諺を持つて來た。

師の卦(六七)

師の卦は六十四卦の一つにて、入卦の坤を上卦とし、坎を下卦としたる卦體なり、卦

の義理は専らいくさの事をことたりたる卦也(難波みやげ)。

望夫山(七一) 『幽明録』に、武昌北、山上有望夫石、狀若人立、古傳云、昔有貞婦、其夫從役、遠赴國難、餓送此山、立望夫、而化爲石、因名焉。

領巾振山(七一) 大伴狹手彦が唐土に使ひした時、其妻佐用姫が別れを惜しみ、高山の頂に上り、夫の船を戀ひて領巾を振つたので、此の名を生じた。

溥陽の江云々(七三) 謠曲『狸々』に本づく。

楊香(七四) 虎が父をくはへて行かうとしたのを、勇を奮つて組みついたので、虎は驚いて父を放して逃げ去つた。

餓鬼も人數(七六) これにつづけて、「枯れ木も山の賑ひ」などいふ。同じ意味である。

ちやるなん(七九) 茶字篇によつて著名の印度のチャウルをいふか。(近松全集第十卷)。

ほるなん(七九) チャルナンに對したまで、但しほるとがるに思ひよせたものか。(同上)。

うんすん六郎(七九) うんすんがるたのウンスンによる。(同上)。

章甫の冠(一〇五) 股の世の冠。

ちくら者(一〇八) 對馬の海中にちくらが沖といふ所があつて、日本と韓國との潮界だといふ。そこで物事落ちつかずふらついてゐるにいふ。

鸞輿屬車(一一三) 鸞輿は天子の乘輿、屬車は之れにつづく車。

大真殿(一一八) 楊貴妃の死後、玄宗悲しみに堪へず、魂の所在を求めさせた。すると蓬萊山の大真殿といふ額を打つた所にて貴妃に逢つたといふ。それを持つて來た。

炮烙火矢(一二〇) 戰國時代に、銅製の丸に火薬をこめ、布で包み、漆を塗り、火をつけ、敵中に投げて爆發させたもの。今日の手榴弾であらう。

四目殺し、しちやう、せき、打かへて、劫(一二七) 關碁の術語。

はま(一二八) 敵より取りたる石をいふ。

(心中天網島)

のんこ(一四六) 伊達を好む若者の間に流行した頭髮の結び様。兩鬢を細く狭く残し、髷を高くする。

小詰役者(一六二) 下廻りの役者にいふ。小部屋に詰込んで居させられるから。(傑作淨瑠璃集上卷)

白人(一七〇) 私娼の一種の名稱だったが、やがて公娼にも用ひるやうになつた。白人は素人の當字で、音讀したのである。

新銀七百五十目(一七六) 新銀は良質の享保銀をいふ。新銀七百五十目は金十四兩三分餘りに當り、四寶銀三貫餘にあたる。

紗綾(一七九) ポルトガル語の *紗*、スペイン語の *綾*。統地の絹織物。

中脇差(一七九) 九寸五分までを小脇差、一尺七寸までを中脇差、一尺九寸までを大脇差といふ。
 毛頭巾(一七九) 毛皮で作った頭巾。多く老人が用ひた。
 桑山(一八三) 丸薬の名。小兒の胎毒、腹痛その他の良薬として著名だった。
 一字書き(一八四) 字をくづして、ひとと一筆のやうに書き下すをいふ。
 花車(一八五) 遊女屋の主婦をいふ。
 納屋の下(一八九) 納屋は物置小屋。此の頃、大阪天満青物市場の納屋の下をさまよふ辻君があつた。
それを買ふをいつた。(傑作淨瑠璃集上巻)
 一座流れ(一九六) 一座した時だけの情誼で、眞實の情のないをいふ。

(夕霧阿波鳴渡)

角前髪(二〇八) 額を広く抜きあげて、生えぎはに角を入れたるをいふ。若衆から元服に至るの過渡
期の額つきである。「すみまへがみ」と訓む。
 紙衣の火打(二〇九) 紙衣の袖口、または袖つけなどの綻び易い所に、三角形の紙片をあてるを火打
といふ。
 師走坊主師走浪人(二一〇) 諺から出てゐる。姿のやつれて頼りなげなるをいふ。

迦陵頻(二二三) 伽陵頻伽の略。
 總縁(二二三) 夜鷹、辻君の異稱。
 ばつばの鮫鞘(二二四) 南蠻舶來の上等の鮫皮をばつばといふ。
 象眼鍔(二二四) 鐵鍔に金銀にて模様を象眼にしたをいふ。
 土佐駒(二二〇) 土佐産の小馬。
 濱せせり(二三〇) 濱側(川岸)の小屋で色をひさぐ私娼をいふ。
 夜見世狂ひ(二三〇) 新町通ひ。
 來世金(二四六) 來世の冥福を祈るために捧げる金。

(壽の門松)

新艘や突出し(二五八) 新艘は禿より女郎になつたをいふ。突出しは素人より始めて女郎になつたと
か、或ひは他の遊廓から轉じて來た初見世の女郎をいふ。
 盆にござれ(二六一) 一昨日來いと同様の、嘲罵の言葉。
 庭錢(二六八) 遊所にて纏頭として與へる錢。單に庭ともいふ。
 三羽の征矢(二六八) 的中してはづれないの意。

ぜいじき(二七〇) 膾炙、皮肉を言ふもの。
 葉屋(二七一) 葉煙草屋の略で、煙草商のこと。
 山姥が山又山に山めぐり(二七二) 謡曲『山姥』の文句より取つた。
 深田に馬を云々(二八三) 謡曲『業平』の一節。
 ぐわち(三〇二) 野暮な人間。

梅で名代の云々(三〇四) 梅は天神、松は太夫、紅葉は鹿戀によそへたのである。上下の遊女を指す。

(女殺油地獄)

寢覺提重(三二二) 食器や食物などを入れ、提げるやうに作つた重箱。寢覺提重はその手軽に作つたもの。

坊主持(三二二) 道連れが持物を順持にするに、坊主に逢つた毎に替へるをいふ。

桔梗染(三二二) 桔梗の花の如き色に染めるをいふ。

腰變り(三二二) 衣服の腰にあたる部分だけを、染色、模様等を變へてあるもの。

入子鉢(三二三) 大小の鉢を順に入れ子にしたによそへて、年齢の順に程よく子澤山なるに言つた。

甚左衛門(三二五) 大和山甚左衛門、元祿享保の名優。

幸左衛門(三二五) 竹ノ鳥幸左衛門、前同斷。

四郎三(三二五) 櫻山四郎三、前同斷。

毛さい六(三二九) 人を罵つていふ語。「毛才」は「小二才」の略轉。「六」は老練のろくてあらうといふ。

顛骨(三二九) おとがひ骨。

出頭(三二九) 君側にあつて政務にあづかる武家の職名。

智恵の輪(三二九) 九つの輪違の模様。

手振(三二九) 昔の行列には、その先頭に、大手を振つて足並を揃へ、且つ警戒する供人があつた。それをいふ。

山上講(三三八) 大和の山上ヶ嶽(大峰)參詣の講中。

四ツ寶(三四六) 正徳に鑄造した悪質の銀貨、享保銀の四分の一しか價值がなかつた。

あざふの明神(三四八) めくりがるた四十八枚の中に「あざ」といふのがあり、またかるたは昔し、

麻布で造られたので、それを掛けて、神様の名のやうにしたのだといふ。(傑作淨瑠璃集上巻)。

八ツかう(三四八) 八講。近江國比良の天神のことであらうといふ。

七の社(三四八) 京都市上京區大宮通靈山寺上ル西入、七野卿の氏神であらうかといふ。

百日法華(三五五) 他宗の者が病氣平癒を祈るために、一時法華宗になるをいふ。

町中(三五六) 町年寄五人組を指す。今日なら町役場、區役所、村役場。

男でも杵でもない(三七二) 人間の資格のないにいふ。

奥を聞かうより口聞け(三七二) 人の心の奥を聞くより、口に語るを聞けば分かるの意。

大寄(三八〇) 遊女遊客を數多寄せて、一緒に遊興すること。

幸左衛門(三八四) 二代目竹島幸左衛門。大阪の立役の名優。大阪吉左衛門町の中座で、享保六年七

月七日から、酒屋のお吉殺しを酒屋に作りかへて、歌舞伎に上演したをいふ。

文藏(三八四) 佐川文藏。

變成男子云々(三八七) 淨土和讃中の一節。

願以此功德云々(三八七) 念佛宗の回向唱。

繩三寸(三九三) 兩手を背後に廻して縛り上げ、首繩と手頭との間を三寸位になるやう締括るをいふ。

(雪女五枚羽子板)

服部(三九九) 攝津の煙草の産地。

四職衆(四〇〇) 侍所の所司を勤める、山名、京極、一色、赤松の四家。

槌の子まで春めく(四〇二) 「閏年には槌の子まで春めく」といふ諺がある。此の曲の上演は寶永二

年で、四月に閏があつた。

四魔三障(四〇四) 四魔は、五蘊の和合よりなる肉體の諸種の苦惱を生ずる蘊魔、煩惱の心身を惱害

する煩惱魔、人の壽命を奪ひ修行を妨げる死魔、怒の第六天の魔王等が吾人の心身を亂し、正道を妨

げる天魔等の四をいふ。三障は煩惱障、業障、報障等の正道、善心を害する三つのさはり。

燕石(四一七) 玉に似た石。

泪羅(四一九) 楚の屈原が諛に逢ひ、自ら泪羅に投じて死したと傳へられる。

梟松桂の林云々(四一九) 謡曲『殺生石』の一節。

竹光(四二九) 刀身を竹にて造り、銀紙を貼りつけたもの。

風切、思羽(四三二) いづれも羽の名稱。

相引(四五七) 袴の左右の、縫ひ合せのところ。

鞠垣の大綱(四六二) 蹴鞠の他へ飛び出るを防ぐために張る綱。

巴、山吹(四六六) 木曾義仲の妾で、勇力すぐれてゐるので名がある。

押太鼓(四七二) 軍隊の後ろから太鼓をたたいて、軍兵を勵ますをいふ。督戦隊である。

御壁書(四七二) 提書は壁に張つてあるから、提のことをいふ。

矢切(四七八) 忍び返しのこと。

位牌知行(四七八) 先祖の功勞によつて受けた知所。

(心中容庚申)

立掛のんこ(四九〇) 立掛鬚ののんこ結をいふ。立掛は鬚の根を高く立てたもの。

朝鮮人の饗應御堂(四九四) 享保四年主九月朝鮮人が來朝して大阪東區の御堂を旅館として持成した。

葛醬油(四九八) 醬油を煮たてた中に、葛粉を溶いたのを入れたもの。

外郎つんで(五〇一) 外郎をつまみ、嚙んで口中の悪臭を消すをいふ。身だしなみをよくしての心。

念者(五〇三) 男色の兄分。

紺のだいなし(五〇四) 中間小者の用ふる紺無地の着類。

七の圖(五〇四) 肋骨の七枚目。

二合半(五〇五) 奴は日給が二合半で、糠味噌を喰つて生活するからいふ。

八功德池(五二五) 極樂淨土にあつて、八功德を具有する池水。

宗味が刻鐘(五三一) 宗味は鑄物師の名であらうといふ。刻鐘は鐘のことで、時を報じるためにも用

ひられるからである。(傑作淨瑠璃集上巻)

非時(五三一) 非時食の略。午後の食事。

五戒(五三二) 佛教にいふ殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五戒。

第十九回配本

昭和十三年五月十日印刷
昭和十三年五月十五日發行

現代語譯國文學全集第二十三卷

近松名作集 下

定價壹圓八拾錢

著者 河竹繁俊

發行者 加藤雄策
東京市小石川區表町一〇九印刷者 君島潔
東京市小石川區久堅町一〇八

東京市小石川區表町一〇九

發兌 非凡閣

振替東京三六三三九
電話小石川六六一〇

共同印刷株式會社印刷

印 檢

43B7A

現代語譯文全集

全二十六卷 定價壹圓八拾錢

| | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|---------------|---------------------|-----------------|------------------|------------------|------------------|------------------|--------------------|-----------------|------------------|--------------------|--------------------|
| 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 保元物語・平治物語 前田 昶 | 今昔物語 山岸 德平 | 榮華物語 藤村 作 | 大鏡 五十嵐 力 | 平安朝女流日記 與謝野晶子 | 土佐日記外二篇 藤村 作 | 枕草子 玉井 幸助 | 源氏物語下卷 窪田 空穂 | 源氏物語中卷 與謝野晶子 | 源氏物語上卷 窪田 空穂 | 竹取物語他二篇 川端 康成 | 伊勢物語・落窪物語 窪田 空穂 | 古事記・日本書紀抄 植木直一郎 |
| 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 |
| 讀本傑作選 永井 荷風 | 八犬傳 白井 喬二 | 雨月物語・春雨物語 漆山 又四郎 | 近松名作集下 河竹 繁俊 | 近松名作集上 河竹 繁俊 | 西鶴名作集下 武田 麟太郎 | 西鶴名作集上 石割 松太郎 | 徒然草・方丈記 佐藤 春夫 | 義經記・曾我物語 漆山 又四郎 | 增鏡 岡 一男 | 太平記 西村 眞次 | 源平盛衰記 白井 喬二 | 平家物語 菊池 寛 |

終

